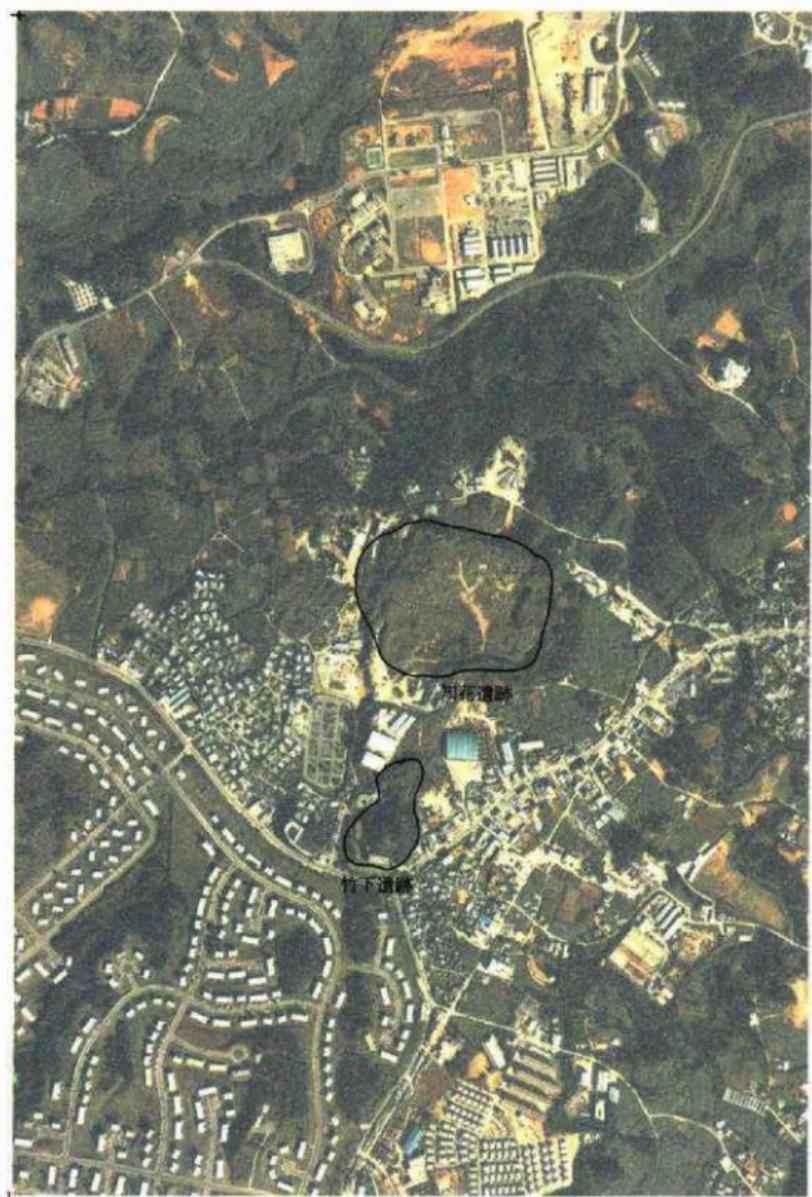


知花遺跡

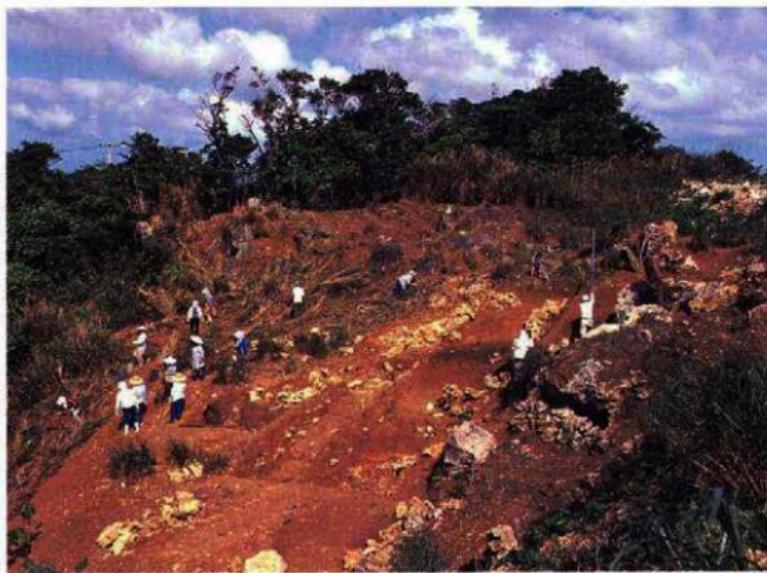
— 沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事
に伴う緊急発掘調査報告書(1) —

1986年3月

沖縄県教育委員会



周口店遗址航空写真



知花遺跡遠景(上) 知花遺跡近景(下)

序

本調査報告書は沖縄市字知花所在の知花遺跡発掘調査の成果を記録したものであります。

さて、沖縄の復帰記念事業として開催された沖縄国際海洋博覧会に関連して、日本道路公団により石川～許田間に自動車道が開設されたのは周知の通りであります。その後、石川～那覇間の延長計画が策定されたのであります。同公団と当委員会との間では早い時期から当該区間の文化財の取り扱いに関する照会、協議、調整に取り組んでまいりました。

当委員会としましても独自に分布調査事業を実施し、埋蔵文化財の分布状況に関する基礎情報の収集に努めるなど、円滑な協議による埋蔵文化財の適切な保存に配慮してきたところであります。

最終的に確定した予定路線内における埋蔵文化財は7件で、このうち6件については現状保存がきわめて困難であるということで、やむをえず記録保存の措置をとることとなった次第であります。

発掘調査についてはその経費を同公団が負担し、沖縄県がこれを受託して当委員会が担当するということで協議が成立し、昭和58年度から実施してまいりました。この間、日本道路公団沖縄建設所の文化財に対する御理解と御協力をいただき、円滑に発掘調査が推進できたことを喜びとするものであります。

発掘調査の結果、縄文時代からグスク時代さらには近世にかけての遺跡から住居跡、貝塚、墓、石敷道などの遺構が検出され、さらに土器、石器、貝器、骨器、陶器、磁器などの遺物が豊富に出土いたしました。これらを記録した本報告書は、沖縄の原始から近世までの先人たちの生活と社会を知る資料として、大いに役立つものと確信するものであります。

本書が文化財についての知識の普及ならびに文化財愛護思想の高揚、さらには歴史学習教材および学術研究などの資料として、今後多方面に活用されることを期待する次第であります。

昭和61年3月31日

沖縄県教育委員会

教育長 米村幸政

例　　言

1. 本報告書は、昭和58年度、59年度に実施した知花遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 調査は、「沖縄自動車道建設工事」に伴うもので、日本道路公団沖縄建設所の委託を受けて、沖縄県教育委員会が実施した。

3. 発掘調査及び資料の整理にあたっては下記の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

宮城利旭氏（沖縄市教育委員会）、大城逸朗氏（沖縄県立教育センター）

4. 石質、獸骨、貝の同定は下記の方々による。記して謝意を表する次第である。

石　質　　大城逸朗氏　（沖縄県立教育センター）

獸　骨　　金子浩昌氏　（早稲田大学）

貝　　知念盛俊氏　（真和志高校）

5. 本書に掲載した地形図は、日本道路公団沖縄建設事務所発行のものを複製した。

6. 本報告書の執筆は、次のとおりである。

- 第1章・1節・2節……………安里　剛淳
- 第1章・3節、第2章、第3章・1節・2節・3節・4・5……………座間味政光
- 第3章・3節1・2、4節1・2……………花城　潤子
- 第3章・3節3、第4章……………岸本　義彦

7. 資料整理は下記のメンバーで行なった。

実測・トレース　花城　潤子・新垣千恵子・城間　光子・宮城奈々子

上地千賀子・比嘉　優子

注　記・分　類　大城　勝江・伊集　恵子・高良三千代・下地　洋子
大城ますみ・渡慶次純子・大嶺みな子

8. 出土した資料については、すべて沖縄県教育委員会文化課の資料室にて保管している。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 層 序	9
第2節 遺 構	12
第3節 人工遺物	
1 貝製品	14
2 骨牙製品	15
3 石 器	17
4 土 器	65
第4節 自然遺物	
1 貝類遺存体	103
2 動物遺存体	107
第5節 古 墓	115
第4章 まとめ	119

挿図目次

1 沖縄市及び知花遺跡の位置	6
2 知花遺跡周辺の地形	7
3 地区・グリッド設定図	8
4 壁面図	10
5 遺構実測図	13
6 スイジガイ製利器の部位	14
7 スイジガイ製利器	14
8 ゴホウラ製ヘラ状製品	15
9 有孔貝製品	15
10 イノシシの牙製品	16
11 有孔サメ歯製品	16
12 骨錐	16
13 石斧の各部名称	18
14 石斧（I類）	21
15 石斧（II類）	23
16 石斧（II類）	25
17 石斧（II類）	27
18 石斧（II・III類）	29
19 石斧（III類）	31
20 石斧（III類）	33
21 石斧（III・IV類）	35
22 石斧（IV類）	37
23 石斧（IV類）	39
24 石斧（IV・V類）	41
25 扁平小型利器	42
26 たたき石	45
27 たたき石	47
28 伊波式土器	78
29 伊波式土器	80
30 伊波式土器	82
31 萩堂式土器	84
32 萩堂式土器	86
33 萩堂式土器	88

34 萩堂式土器	90
35 萩堂式土器	92
36 大山式土器	94
37 カヤウチパンタ式・室川式土器	96
38 室川上層式・奄美系土器	98
39 底部	100
40 古墓平面図	116
41 古墓正面図・側面図	117

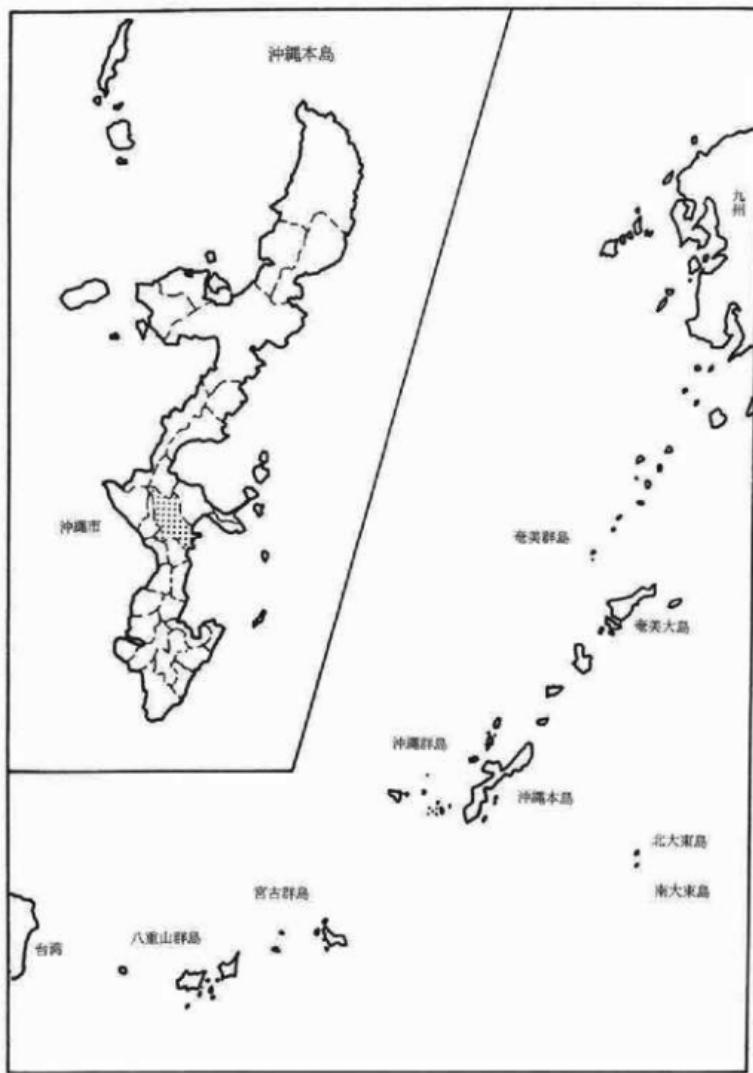
表目次

1 分類と出土区の相関	18
2 分類と破損形態の相関	19
3 分類と石質の相関	19
4 器種と石質の相関	48
5 石材（片）と石質の相関	48
6 型式毎の土器一覧	66
7 土器出土状況	75
8 沖縄諸島における新石器時代の編年	102
9 出土貝の地区別比較	103
10 地区層位別主体貝の構成比較	103
11 貝殻の出土状況	104
12 魚骨の出土状況	107
13 蜕虫類のカメ目の出土状況	107
14 イノシシの骨出土状況	108
15 哺乳類の骨出土状況	110

図版目次

1	発掘風景	3
2	知花遺跡調査区近景	5
3	発掘終了後の丘陵（I 区）	9
4	J ライン壁面	11
5	12 ライン壁面	11
6	遺構全景	12
7	スイジガイ製利器	14
8	ゴホウラ製ヘラ状製品	15
9	有孔貝製品	15
10	イノシシの牙製品	16
11	有孔サメ歯製品	16
12	骨 雜	16
13	石 斧 (1) I 類	51
14	石 斧 (2) II 類	52
15	石 斧 (3) II 類	53
16	石 斧 (4) II 類	54
17	石 斧 (5) II・III 類	55
18	石 斧 (6) III 類	56
19	石 斧 (7) III 類	57
20	石 斧 (8) III・IV 類	58
21	石 斧 (9) IV 類	59
22	石 斧 (10) IV 類	60
23	石 斧 (11) IV・V 類	61
24	扁平小型利器	62
25	たたき石 (1)	63
26	たたき石 (2)	64
27	石器片・石材	65
28	土 器 伊波式土器	79
29	土 器 伊波式土器	81
30	土 器 伊波式土器	83
31	土 器 萩堂式土器	85
32	土 器 萩堂式土器	87
33	土 器 萩堂式土器	89

34 土 器 荻堂式土器	91
35 土 器 荻堂式土器	93
36 土 器 大山式土器	95
37 土 器 カヤウチバンタ式 (230~235)、室川式 (236~241)	97
38 土 器 室川上層式 (242~248)、奄美の土器 (249~258)	99
39 土器底部	101
40 貝類遺存体	106
41 貝類遺存体	106
42 魚 骨	111
43 蠕虫類	111
44 哺乳類・ネズミ・マングース	112
45 哺乳類 イノシシ	112
46 哺乳類 イノシシ	113
47 哺乳類 イノシシ	113
48 哺乳類 ウシ・ヤギ・ヒト	114
49 哺乳類 イヌ	114
50 岩陰古墓平面	115
51 岩陰古墓正面	118
52 岩陰古墓側面	118



沖縄本島の位置

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

沖縄の日本復帰記念事業のひとつ、沖縄海洋博覧会が1975年に沖縄本島北部の本部（もとぶ）において開催された。

この時中南部からの観客輸送対策として、日本道路公団による沖縄自動車道石川～名護間に開通した。その後、石川～那覇間の路線延長が計画され、いくつかの路線案の中から石川市伊波～沖縄市～北中城村～宜野湾市～中城村～西原町～浦添市～那覇市首里間の本島脊梁部を通過する設計案が採択された。

日本道路公団沖縄建設所は、当該地域に関する独自の環境アセスメントを作成すると共に、沖縄県教育委員会（教育庁文化課）としても事前の分布調査を実施し、その報告書を昭和57年3月に刊行した。⁸¹

この分布調査の結果、当該計画路線内に石川古我地原貝塚（石川市）、知花遺跡、竹下遺跡（沖縄市）、ヒニグスク（北中城村）、石嶺坂石敷道（中城村）、イシグスク（西原町）、押山遺跡（浦添市）の7カ所の埋蔵文化財包蔵地が、存在することが判明した。

その後、この7カ所の遺跡の取り扱いに関する協議が続けられた。その結果、ヒニグスクはトンネル工法によるので埋蔵文化財は保存されること、他の6遺跡は線形上および工法上保存は困難であるので、同覚書1の(3)「発掘調査を行なって記録をのこすもの」として取り扱うこととなった。

発掘調査事業は同覚書4の(1)「・・・埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が必要となった場合、公団は都道府県教育委員会に委託して実施するものとし・・」に基づき、日本道路公団沖縄建設事務所は、その費用を負担し、沖縄県教育委員会（所管教育庁文化課）がその委託を受けて実施することで協議が成立した。

発掘調査事業委託契約は、昭和58年4月1日に締結され、最初に同年6月に石川古我地原貝塚（石川市）から着手することとなった。

本遺跡の発掘調査は、昭和59年1月23日に着手した。

注1. 金武正紀・大城慧 「沖縄自動車道埋蔵文化財分布調査報告」

沖縄県教育委員会 1980年3月

第2節 調査体制

この事業は次の体制により実施された。

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	米村 幸政
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	比嘉 貢幸
事業総括	同 上 埋蔵文化財係	係長	安里 瞳淳
事業事務	同 上 文化振興係	係長	大城 真幸
発掘調査員	沖縄県教育庁文化課	指導主事	座間味政光
	同 上	専門員	岸本 義彦
	同 上	同 上	玉城 朝健
	同 上	同 上	花城 潤子
	同 上	同 上	島袋 春美
	同 上	同 上	島 弘
	同 上	同 上	松川 章
	同 上	同 上	大城 剛

作業員 仲程 スミ、玉城マサ子、池原ミツ子、砂川カツ子、金城 ハツ
西銘 生徳、幸地 幸子、仲村百合子、金城 勇盛、金城 タケ
仲村 ツル、比嘉 和子、栄野比芳子、仲村 雪子、大工邁洋子
島村 トミ、金城 ヨシ、池原 ノブ、上元 幸子、金城 初江
島袋 スミ、田島 定子、池原 秋子

第3節 調査の経過

発掘調査は、1984年1月から7月までの日程で実施した。

本遺跡は、1960年に採石工事の際に発見され、1962年の1月に2週間の緊急調査が実施されている。

2図は、その調査の範囲を示したものである。ところで1962年に調査を実施した4地点は、今回の南仲道の計画にいずれも含まれており、計画を見ると調査地点をほぼ横断する形になっている。

調査は伐開作業と、4地点の確認作業を並行して進めた。

この作業にかなり時間を費やしたが、目的の包含層は確認できなかった。「…………遺跡の大部分は、採石工事によって破壊され、なおも工事は急ピッチで進行中である…………」と著した前回の報告を改めて確認することとなってしまった。進行中であった採石工事は1962年の調査後も更に進み、丘陵上の遺跡のほとんどを削り取ってしまった。

最終的に遺物包含層を確認したのは、石灰岩台地の北端の崖邊一帯である。従って調査の対象もこの地点に絞った。

道路の予定地内には、全区間を通して道路の中央を印すセンター杭と、両サイドを示す輻杭が設置されている。センター杭には、座標エレベーションが与えられており、グリッドの設定には、その成果を使用させてもらった。



図版1 発掘風景

先ず台地の端に設置されているセンター杭102+40（E L・69、90メートル、座標X・39711、4143、Y・30612、6400）と、崖下のSTA102+00（E L・55.13メートル、座標X・39746、2526、Y・30784、5680）を結ぶ、南北の主軸を設ける。そして主軸を中心に、2メートル×2メートルを単位とした方眼を調査地全域に配した。

102+00のセンター杭をA-1とし、主軸から東へA・B・C・D・E……、西へあ・い・う・え……の記号を与え、南には1・2・3・4……と算用数字を付した。

図3で示したのがその設定状況である。杭のナンバーを、その北東隅のグリッドの名称とする。

当初3月いっぱいの調査を予定したが、調査を進める中で丘陵だけでなく斜面そして崖下にも遺物の包含が認められたので調査を延長すると共に、新たにII区・III区を設定し、調査域を拡大した。

注1. 金武正紀・大城慧 「沖縄自動車道埋蔵文化財分布調査報告」

沖縄県教育委員会 1980年3月

注2. 高宮廣衛・嵩元政秀・安里嗣淳 「知花遺跡群」

沖縄県教育委員会 1978年3月

第2章 知花遺跡の位置と環境

知花遺跡は、沖縄本島中部沖縄市字知花小字城花畠に所在する。

沖縄本島の地形・地質は、大きく北部と南部に区分できる。沖縄市はこの北部の国頭疊層、南部の島尻層の接する地域にあたる。

国頭疊層は、本島北部の起伏の大きな山地を主に、粘板岩、千枚岩などから構成された、名護層・嘉陽層から成る。

一方島尻層は、本島南部の比較的低平な地形で、灰色のジャガル・クチャと呼ばれる泥岩、ニービーの砂岩などから構成される。その境は東は具志川市字堅、沖縄市をとおり、北谷町浜川を結ぶ線上だと言われている。

沖縄本島を2分するこの線上には、切立った急斜面状の独立した琉球石灰岩の丘陵が、配列される。これをカルスト・ビナックルと呼ぶ。石灰岩の溶食作用にともない、差別的作用に形成された残丘地形である。

一般に、50~60メートルの琉球層群の石灰岩や砂礫段丘上に、10~30メートルほどの比高で突出し、周囲は急斜面あるいは垂直状を呈し、基底の面積は30~4000平方メートルであること等の特徴を有している。このカルスト・ビナックルの一つが知花城跡であり、竹下遺跡、そ

して知花遺跡の石灰岩丘陵である。知花付近ではほぼ100メートルおきに縁に覆われた円錐状のこれらの丘陵が認められる。

知花遺跡は、国土基本図によると中央付近がX・39711、4143、Yが30764、9153の座標値を示し、海拔高は81.90メートルを測る。

石灰岩の台地は東西が約140メートル、南北が300メートル程あり、南側ではそのまま竹下遺跡に連なっていたという。戦後の早い時期から大規模な採石工事が行われ、縁に覆われていた台地は全くその形を一変させ、すすきだけの繁る草原となっている。

なお、本遺跡のすぐ北側をカフンジャー（嘉普武川）と呼ばれる川が蛇行する。この川は本県の水源の1つである比謝川の中流域にあたる。

参考文献

木崎甲子郎 「琉球弧の地質誌」 沖縄タイムス社 1985年9月

上原富士男 「カルスト・ビナックル」『沖縄大百科事典』

沖縄タイムス社 1983年3月



図版2 知花遺跡調査区近景



図1 沖縄市及び知花遺跡の位置

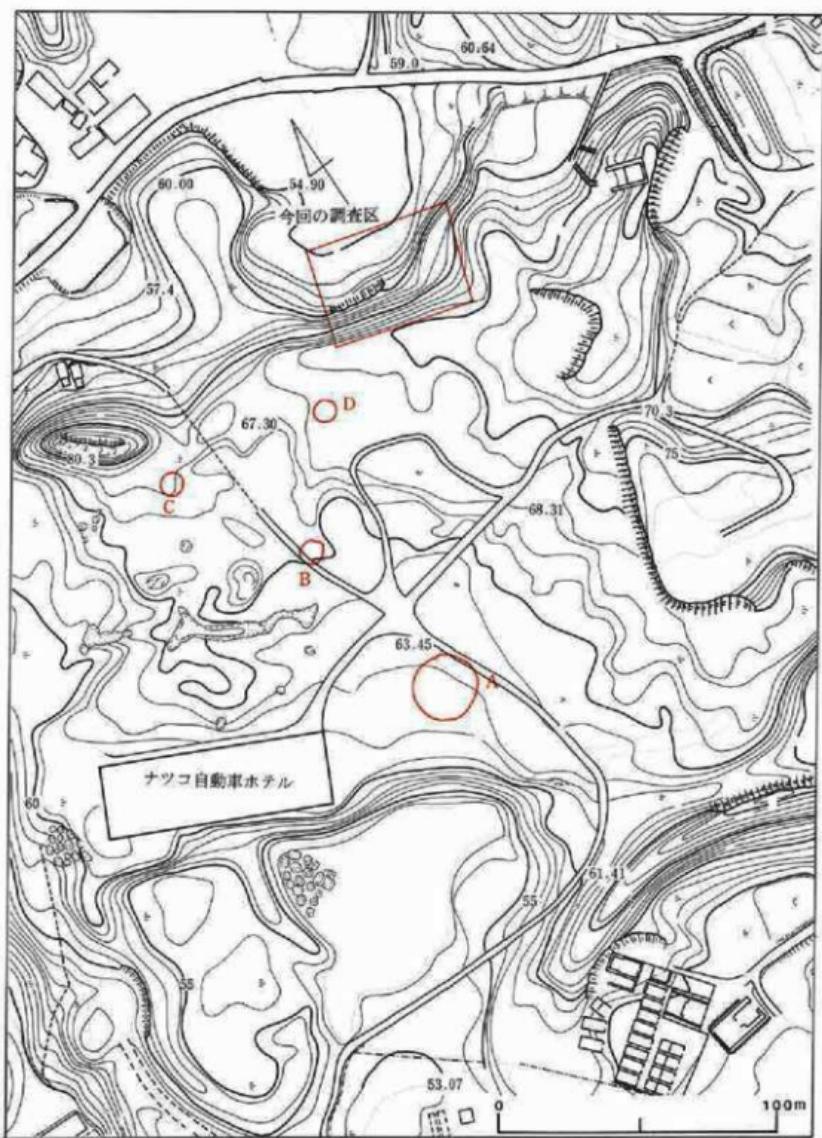


図2 知花遺跡周辺の地形 (A・B・C・D 1962年調査区)

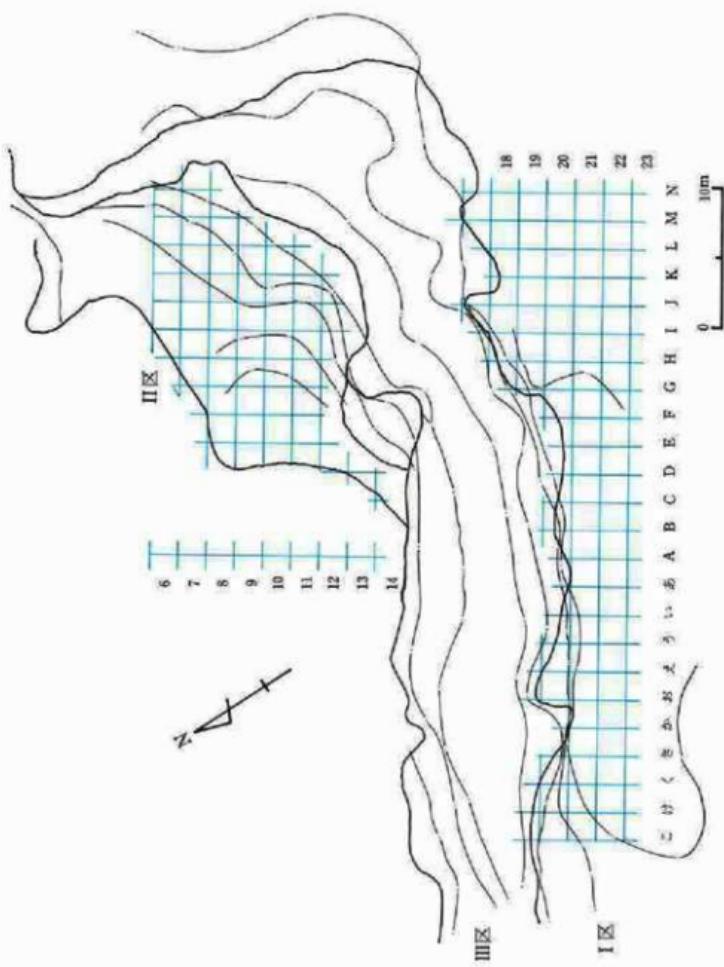


図3 地区・グリッド設定図

第3章 調査の成果

第1節 層序

前項で触れたように先史時代の遺物が確認されたのは、石灰岩台地の北端と斜面及びその崖下であった。調査は便宜上3区に区分した。各区の特徴と層の状態について述べる。

I区

石灰岩台地の北端、崖淵一帯をI区とした。

地表面から土器片が採集できたものの、空ビン・鉄屑等の現代遺物も出土する攪乱層である。層は15~20センチメートルの厚さで、その下は基盤の石灰岩となる。

石灰岩の表面は平たくブルで削られた痕跡が有り、採石工事の及んだ事がうかがえる。
あ-22、A-22、B-21の3グリッドに跨って、深さ60センチメートル、幅40センチメートル程のフィッシャーがある。そこには遺物を含む未攪乱の黒褐色土層がわずかに残っていた。これを第2層とした。

この2層からは、伊波式・荻堂式・カヤウチパンタ式の土器片が出土している。



図版3 発掘終了後の丘陵（I区）

II区

石灰岩台地の北側の崖下になった所で、台地よりおよそ5メートル降る。層の状態は4図に示したとおりである。

第1層A 赤黄色の琉球石灰岩の風化土で、地元ではマーチと呼んでいる。I区の崖が崩れここに堆積したもので、遺物は含まない。II区の南側の一部だけにある。

第1層B 暗褐色の攪乱層、土器等の遺物も含むが、採石工事のブルトーザーで台地上から投棄されたもので、II区での表土層にあたる。約30センチメートルの厚さで北へ傾斜する。

第2層 黒褐色の腐植土で遺物は全く含まない。全域には分布せず、グリッドの11ラインより南の範囲におさまる。旧表土である。

第3層 茶褐色の遺物包含層で、2~3センチメートルの粒状の石灰岩を多量に含み、サラッとした感じをうける。層は深い所で70センチメートルを測る、北側へ傾斜しながらこの区全域に分布する。この3層からは、伊波式・萩堂式・大山式の土器が出土している。

第4層 琉球石灰岩の風化土マーチと呼ばれる地山層である。

III区

I区とII区に挟まれた斜面部をIII区とした。最も多くの遺物を得た所だが、台地での採石の時投棄されたもので、したがって攪乱された層である。基盤となるのは琉球石灰岩だが、石灰岩と石灰岩に挟まれた2地点で黒褐色土が確認された。厚さもさ程ないが、採石前斜面にも包含層のあったことを窺せる。

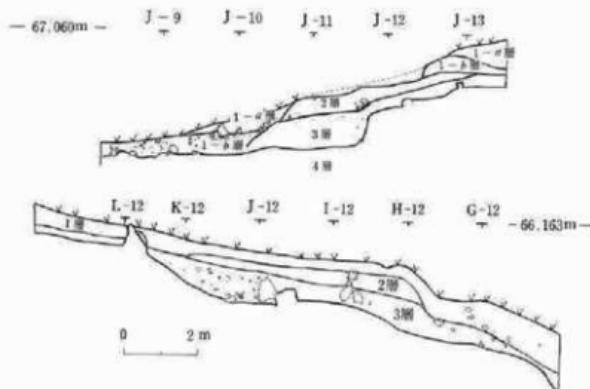
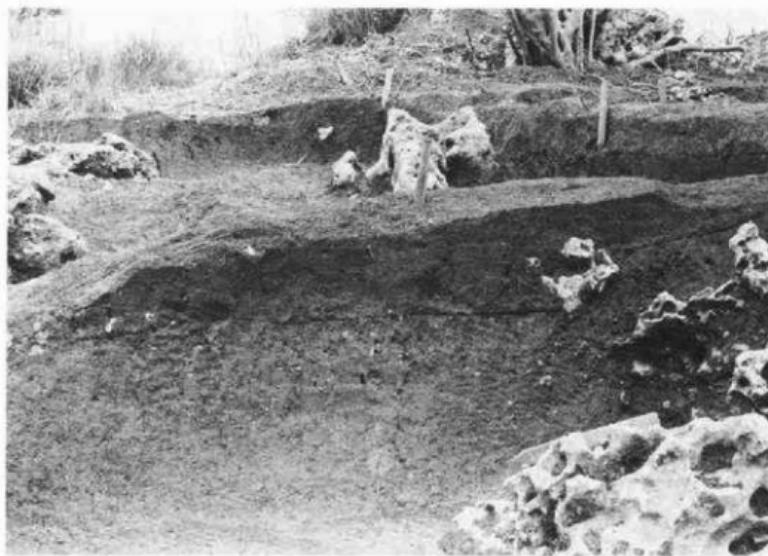


図4 壁面図



図版4 Jライン壁面



図版5 12ライン壁面

第2節 遺構

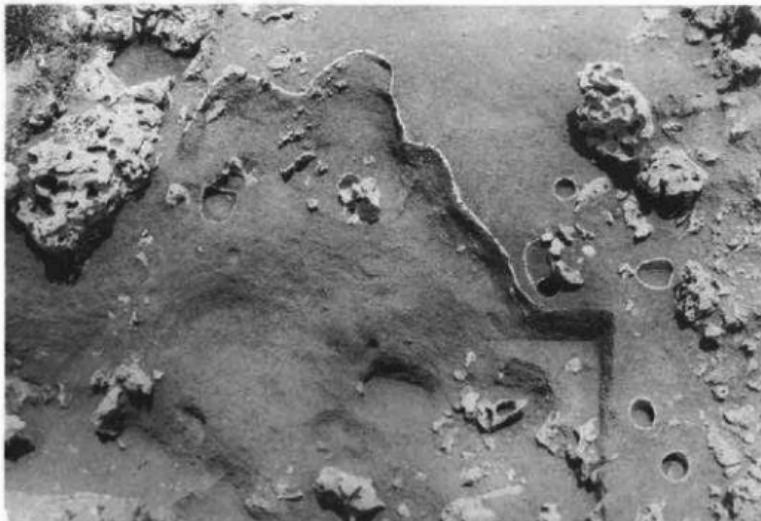
II区のH-11、H-10、I-10で、竪穴遺構の一部が検出された。

遺構は、赤黄色の地山面を30センチメートル程掘り込んだもので、全体のおよそ3分の1を残している。大部分は採土工事の時に、ブルトーザーで切り取られたと考えられ、又斜面から流れてくる雨水でも更に削られたと思われる。一部では遺構の床面まで客土が覆っていた。したがって遺構全体の形状・性格も明らかでない。

東隅では105×50センチメートルの焼土が、地山面にて検出された。焼土はおよそ2分の1が遺構の外に伸びている。又焼土面近くまで攪乱の状態にあったこともあり、炉址と関係するのか判断は難しい。

柱穴は7個が検出された。5個は遺構の南外に集中していた。

遺構内には、2個の柱穴が認められた。No.7は深さも径も一際大きく、塊状になった炭化物を含んでいた。No.7も含め柱穴は、規則的なものを認めることができなかった。



図版6 遺構全景

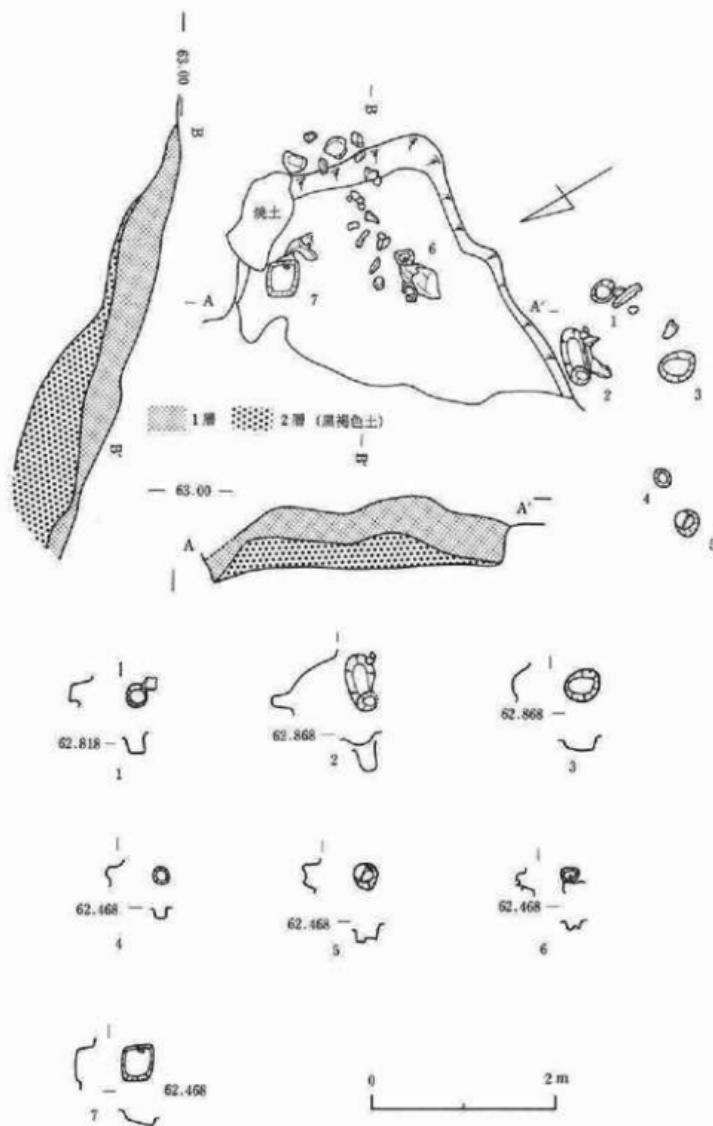


图5 遗構平面图·断面图、柱穴平面图·断面图

第3節 人工遺物

本遺跡から、貝製品（スイジガイ製利器・ゴホウラ製ヘラ状製品・有孔貝製品）、骨牙製品（イノシシの牙製品・有孔サメ歯製品・骨錐）、石器（石斧・扁平小型利器・たたき石）、土器が出土した。以下これらの人工遺物について記述する。

1. 貝製品

本遺跡からスイジガイ製利器・ゴホウラ製ヘラ状製品・リュウキュウザルボウ製有孔製品が出土した。

(1) スイジガイ製利器

III区盛土から出土した。

製品は体層部や、ら塔部を除去し、外唇部の2つの突起が残存している。1つの突起は刃部を有し、もう1つの突起は先端が欠損している。

刃部を有する突起の部位は、他の遺跡から出土したスイジガイ製利器においても附刃頻度の最も高い突起部である。

本遺跡出土の製品の、スイジガイの利用部位を図6に示した。

製品は、刃部が両面研磨されている。背面側突起（上面）は刃面付近の貝表面が剥離しているが、刃面は狭く、角度をもって刃縁に達する。もう一方の刃面（下面）は広く、ゆるやかに刃縁に達する。

刃部両側面の刃縁に近い部分は、研磨が施されている。

刃部の平面形は弧状を呈し、側面形は片刃的である。

正面形は、スイジガイの背面を上にした状態にすると、刃縁は水平よりやや右に傾いている。



図6 スイジガイ製利器の部位

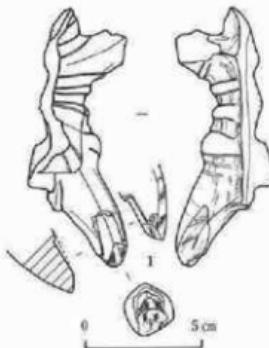


図7 スイジガイ製利器



図版7 スイジガイ製利器

(2) ゴホウラ製ヘラ状製品

貝輪に似たゴホウラ製の用途不明の製品が、I区の1層から出土した。

製品は、ゴホウラの体層部を除去した外唇部を利用してしたもので、貝厚の薄い前溝部の背面を研磨して、ゆるやかな弧状の刃部を作り出している。上部は破損している。

貝の背面部は全面研磨調整されており、裏面は両側面が研磨され、中央部に自然の凹面が確認できる。上部の破損部は貝巾は細く厚味があり、両側面は稜を有する。

背面の体層部側に直線的な稜ができる、角度をもって側面まで研磨されている。外唇側は、その稜からゆるやかな弧を描くように側面まで研磨され刃部に至る。

裏面の外唇側は平坦に研磨され、稜が直線的で明確である。体層部側も研磨調整されており、稜は前溝部（刃部付近）で側面の稜と一つになる。裏面の刃部は、使用によると思われる細かい剝離痕が認められる。

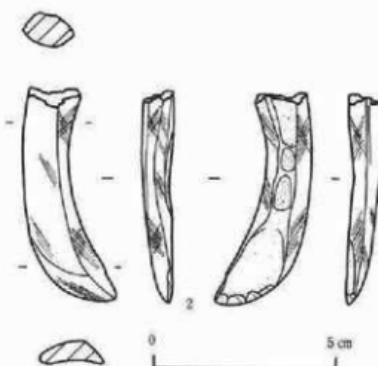


図8 ゴホウラ製 ヘラ状製品



図版8 ゴホウラ製 ヘラ状製品

(3) 有孔貝製品

III区の盛土から、リュウキュウサルボウガイの殻頂部付近を穿孔した製品が出土した。

孔は長径12ミリメー

トル・短径8.5ミリメー

トルの梢円形で、貝殻の保存状態は良い。



図版9 有孔貝製品

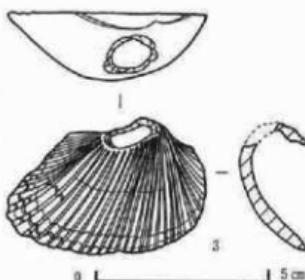


図9 有孔貝製品

2. 骨牙製品

本遺跡より、イノシシの牙製品と、有孔サメ歯製品、骨錐の3点の骨牙製品が出土した。

(1) イノシシの牙製品

III区の盛土から出土した。

製品は、オスのイノシシの牙（左下顎犬歯）を利用したもので、牙の外側周縁の先端に近い方を、長さが1センチメートル程度弧状に削り込まれている。凹部には横方向に刃物痕がかすかに残っているが、丁寧に研磨調整されている。

外側周縁のエナメル質のとれた稜線部にも研磨が施され、光沢がある。

製品は完形品ではなく、上部（先端部）下部と側面の一部を欠損している。

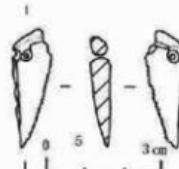
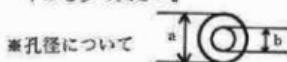
(2) 有孔サメ歯製品

III区の盛土から出土した。

製品は、ホホジロザメの歯の歯根部を整形し、歯根部・歯骨部の接点付近の中央部に2孔穿たれたもので、半分程欠損しており、その欠損によって1孔は半分欠けている。

歯骨部との接点の歯根部（エナメル質のすぐ上）を削り、溝をつくっている。孔は、その溝のすぐ下のエナメル質の部分に両面から穿孔されている。

1孔は完形で、孔径aは3.5ミリメートル、bは1.5ミリメートルである。もう1孔は半損の孔で、孔径bが2ミリメートルと少々大きい。



図版11 有孔サメ歯製品

(3) 骨錐

II区の2層から出土した。製品はジュゴンの肋骨を利用して、上部と錐の尖端部を欠損している。

丁寧に研磨調整されており、削り痕やその稜線は明確ではない。



図版12 骨錐

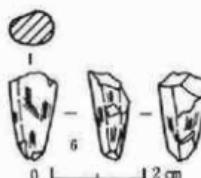


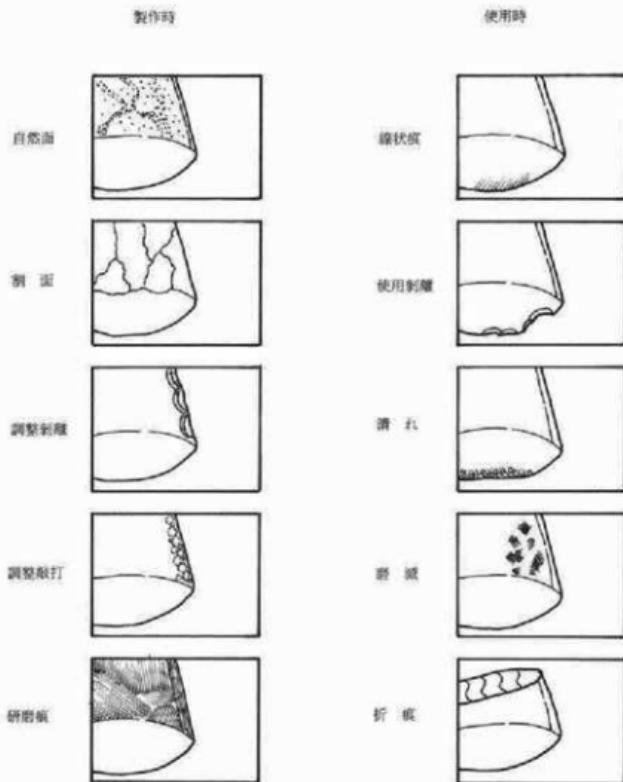
図12 骨錐

3. 石器

今回の調査で得られた石器は破片も含めて88点あり、うち器種の判別ができたのは石斧と扁平小型利器、たたき石の僅か3種類である。その内訳は石斧が69点と最も多く、次いでたたき石15点、扁平小型利器4点となっている。出土状況は第3章で述べたとおりほとんどのものが壊乱部からで、他の遺物も含めての時間的・空間的位置関係の詳細は残念ながらチェックが困難である。しかし、1962年の調査成果や他の類例^{注12}遺跡の成果をもとに分類・分析を行い、本遺跡の石器の性格づけ、位置づけを考えたい。

以下、器種別に述べる。なお、石器の実測図については、製作時・使用時の諸痕跡を下図のとおり表現した。石斧をモデルにしているが、他の石器もこれに準ずる。

凡　例



(1) 石斧

破片も含めて69点得られ、石器全体の75パーセント強を占める。しかし、そのほとんどが擾乱部からのもので、プライマリーな遺物包含層から出土した資料は10点と石斧全体の15パーセントにもみたない数量である。そのために他の遺物を含めての共伴関係が判然とせず、さらに大半の標品が破損しており、刃部の形状など形態的な面も不明瞭な点が少なくない。

ここでは限られた資料から機能的な面、すなわち大きさ・厚み・重量に観点をおき、次

の5類に分類した。なお、分類に際して製作途上品・再生品・転用品についても製作者の当初目的を鑑み、石斧完成時の形態に主眼をおいた。石斧個々については観察一覧に示したとおりで、観察事項は原則として製作過程、使用状況、破損形態の順（石斧の一生）に記している。

I類——刃渡りが4センチメートル以下、長さが5~6センチメートル前後、重量が70グラム以下の小型石斧。

II類——刃渡りが5~6センチメートル、長さが8~9センチメートル、重量が100グラム~150グラムの中型石斧。

III類——刃渡り、大きさともII類と同様であるが、厚さと幅の比が1対3の扁平石斧。

IV類——刃渡りが6センチメートル以上、長さが10センチメートル以上、重量が200グラム以上の重厚な大型石斧。

V類——刃渡りが2センチメートル以下、長さが9~10センチメートルの細身型石斧。

分類結果と出土区の関係を表1に示した。

分類別についてみると、II類が23点と全体の3分の1を占め、次いでIV類20点(29.0パーセント)、III類17点(24.6パーセント)、I類6点(8.7パーセント)、V類3点(4.4パーセント)となっているが、前者3類は量的にそれほど差ではなく、本遺跡の主体をなしていることがうかがえる。出土区分にはIII区が圧倒的に多く、53点と全体の76.8パーセントを占めているが、すべて盛土中（擾乱）からの出土である。

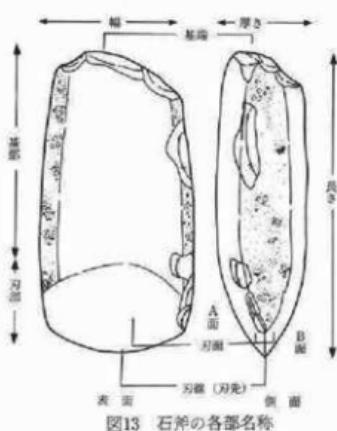


図13 石斧の各部名称

表1 分類と出土区の相關

分類 出土区	I	II	III	IV	V	計	比率 (%)
I 区 第1層	1	1				2	2.9
II 区 第1層	1	2		1		4	
III 区 第3層	4	2	4			10	14 20.3
III 区 盛土	5	16	14	15	3	53	76.8
計	6	23	17	20	3	69	100
比率換	8.7	33.3	24.6	29.0	4.4		100

69点の石斧について使用の際の破損形態に着目して次の6類に分類した。

- A類——刃部の一端を若干欠いている場合があるが、ほぼ完成時の形を留めているもの。
B類——刃部の剥離・潰れ等により刃先を失しているもの。
C類——横折れにより刃部もしくは基端部を欠いているもの。
D類——縦割れにより一方の側面部を欠いているもの。
E類——表面か裏面の一方もしくは両面が剥落しているもの。
F類——はじけとんだ刃部片のみ残っているもの。

実際にはA類からF類までの破損が2~3類複合している資料もあるが、原則として主になる破損形態に含めた。また、F類はC・D・Eのいずれかに含まれる可能性があるが、あえて分離した。

破損形態による分類と完成時の形態分類の関係を示したのが表2である。全体的にはC類が38例と半数以上を占めている。D類が最も少なく、その他はほぼ同様な割合である。

分類別にみると、I類はA類が多く、II・IV類は圧倒的にC類・III類はC・E類が目立つ。

そのことは使用時の打撃の大きさ、つまり機能的な側面や石質の違いなどが考えられる。

破損後の状況についてみると、そのまま廃棄したものが多いが、中には刃部を延長して再使用したもの(16・19・24・35・43・60)や元来の形状を変えて再生したもの(39・47・48・61・62・70)、まったく別の機能を有する道具(たたき石など)に転用したもの(55・58・59)があり、わりと有効(今でいうところのリサイクル)に活用していたことがうかがえる。

次に石質について検討してみたい。本遺跡の石斧に用いられている岩石は、はんれい岩・角閃岩・角閃ヒン岩(以上火成岩)、礫質砂岩・砂岩(以上堆積岩)、輝緑岩・結晶片岩(以上変成岩)の7種類である。これら岩石と形態分類の関係を表3に示した。

表2 分類と破損形態の相関

分類 破損形態	I	II	III	IV	V	計	比率 (%)
A	3	(3)	1(1)			8	11.6
B	1	3	1	1		6	8.7
C	1	13	6	16	2	38	55.1
D		1				1	1.4
E	1	1	5	1		8	11.6
F		2	3	3		8	11.6
計	6	23	17	20	3	69	100

* A類の()は製作途上品を示す。

表3 分類と石質の相関

分類 石質	I	II	III	IV	V	計	比率 (%)
輝綠岩	5	15	7	7		34	49.3
はんれい岩		4	2	13	1	20	29.0
結晶片岩	1	1	7		2	11	15.9
角閃岩			1			1	1.45
角閃ヒン岩			1			1	1.45
礫質砂岩			1			1	1.45
砂岩			1			1	1.45
計	6	23	17	20	3	69	100

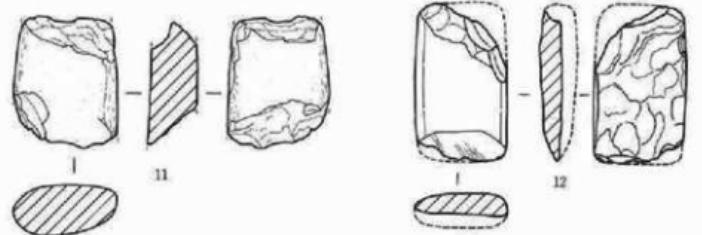
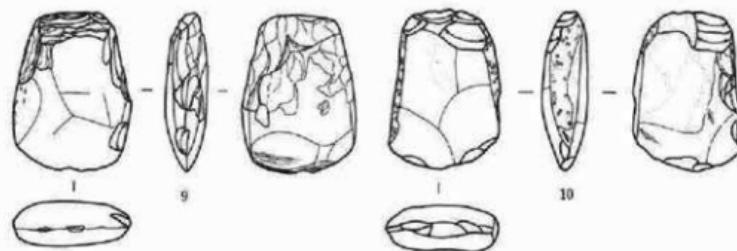
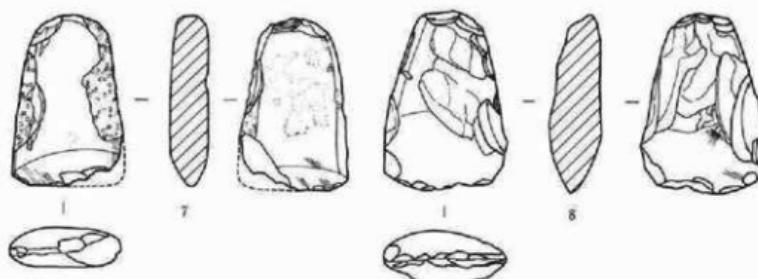
7種類のうちよく利用されているものは輝緑岩が34例と最も多く、次いではんれい岩20点、結晶片岩11点となっている。他の4種類は各1例のみである。分類別にみると、I・II類は輝緑岩が圧倒的で、III類は輝緑岩と結晶片岩、IV類ははんれい岩が主体をなしている。そのことは岩石のもつ性質を当時の人々が経験的に知っており、うまく用いていたことが想定される。つまり、I・II類に多い輝緑岩は変成作用を受けて薄く剥離しやすい性質をもつと同時に粘り強さという特徴を有している。それは製作過程が比較的容易であり、多少の打撃にも耐えうるという恰好の石材で、工作具に適していることがうかがえる。IV類に多いはんれい岩は比重が大きく（重い）、なおかつ粘り強さをもっていることから伐採用の道具として最適である。IV類の破損形態が圧倒的にC類（横折れ）であることからも容易にうかがい知ることができる。

このように、石斧の用途が形態的（大きさ・重量等）な違いによって推察できることもさることながら、石質ともかなり密接な関係にあることがわかる。

石斧観察一覧(1)

登録番号 押印番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ [cm] 幅 [cm] 厚さ [cm] 重さ [g]	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項	
						I類の典型品。刃部の一部を欠失するが、ほぼ完全な形をとどめている。表裏面及び側面とも研磨を施す。側面に製作時の打削が残っている。刃部の研ぎ出しは両面から丁寧におこない両刃をなす。使用時の刃こぼれがみられるが、使用線状痕は認められない。B面の大きな打削は比較的新しい傷である。	ほとんど完形。打削調整が著しく自然面が残っていない。研磨は刃部のみ丁寧で、基盤は徹底していない。刃こぼれは著しいが、使用線状痕はみられない。
36	Ⅲ区	6.0			I		
7	盛土	3.8			A		
7		1.3 (55)		輝緑岩			
51	Ⅲ区	6.1			I		
8	盛土	4.3			A		
8		1.8 (65)		輝緑岩			
33	Ⅱ区 F-10	5.6			I		
9		4.0			A		
9	表土層	1.5 (50)		輝緑岩			
20	Ⅲ区	(5.5)			I		
10	盛土	3.8			B		
10		1.5 (55)		輝緑岩			
19	Ⅲ区	(4.5)			I		
11	盛土	3.6			C		
11		1.7 (47)		輝緑岩			
37	Ⅲ区	(5.3)			I		
12	盛土	3.2 (0.7)		結晶片岩	E		
12		(23)					

※ 法量の数値はすべて現存資料の最大値で、カッコで閉じてないものは完成時の数値を示す。



0 10cm

図14 石斧(1) 1類

登録番号 挿図番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	細　察　事　項	
43	Ⅲ区 盛土		(8.8) 4.5 2.3 (145)	砂岩	II B	II類の典型品。全面とも研磨が徹底し、素材段階の状態が判然としない。風化が著しく、手触りはザラザラする。刃部の欠損が激しく、刃先は残っていない。刃面の底ぎだしの角度から両刃石斧であることがわかる。使用線状痕はみられない。	
12 14 14	Ⅲ区 盛土		(9.2) 4.8 2.5 (155)	はんれい岩	II B	全面とも研磨が徹底していたと考えられるが、風化が著しく手触りがザラザラする。基端と刃部の両耳部分が剥離している。刃先の潰れが激しく、使用線状痕はみられない。	
53 15 15	Ⅲ区 盛土		(9.0) 4.3 2.2 (145)	輝緑岩	II B	表裏面と右側面は自然面が残っている。左側面は打削調整を施す。刃部の剥離が著しく刃先を欠失している。基端も破損している。表面の磨滅痕の状況より、刃部の剥離後も使用されたようである。使用線状痕はみられない。	
14 16 16	Ⅱ区 第1層		(8.3) 2.6 2.2 (70)	結晶片岩	II D	表裏面は研磨が徹底しているが、側面は製作時の敲打痕がそのままである。使用時の打撃により節理面から割れている。両刃で、使用線状痕はみられない。	
76 17 17	Ⅱ区 1-11 第3層		8.2 3.7 (1.6) (80)	輝緑岩	II E	自然縫をそのまま利用しており、研磨以外の調整がみられない。使用時の衝撃が大きく、裏面が剥離している。B面に剥離後の研磨がみられることより、再利用されたものと考えられる。使用線状痕はみられない。	
52 18 18	Ⅲ区 盛土		(4.9) 4.9 1.6 (65)	輝緑岩	II C	表裏面及び両側面とも打削調整により素材づくりしている。刃面の研磨は徹底しているが、他は剥離面が消えきらず残っている。使用時の打撃により基部上半を欠失。軽微な刃こぼれがみられる。使用線状痕はみられない。	

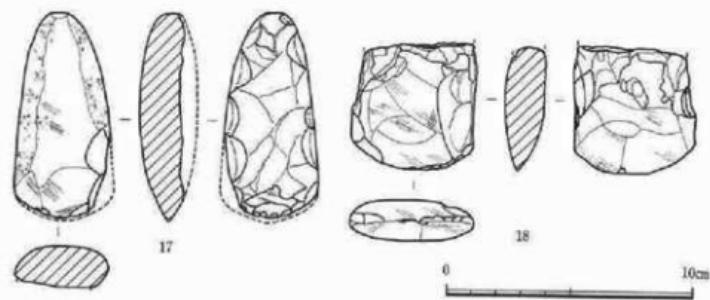
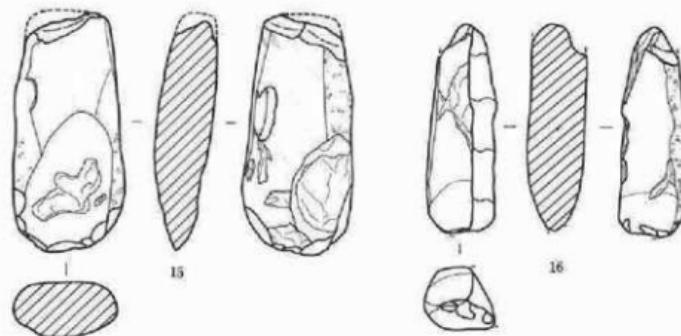
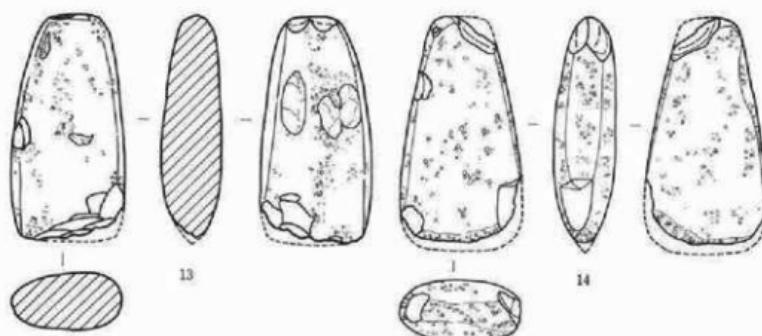


図15 石斧(2) II類

石斧観察一覧(3)

登録番号 排図番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観察事項
46 19 19	III区 盛土	(7.2) 4.6 1.8 (103)		はんれい 岩	II C	表裏面・両側面とも研磨が入念で、製作時の痕跡を留めてない。基部の折損は2方向に及び、裏面のそれは刃部付近まで剥離している。刃先の潰れも著しいが、使用線状痕はみられない。
75 20 20	I区 G-20 第1層	(6.8) 4.8 2.0 (100)		輝緑岩	II C	裏面は自然面のまま、表面と両側面は敲打調整により素材づくりしている。特に両側面は柄に固定するための抉りをつくりだしている。刃部は破損後の底ぎ直しがみられる。基部上方は表面側からの衝撃により折損。使用線状痕はみられない。
48 21 21	III区 盛土	(5.6) 4.3 1.7 (65)		輝緑岩	II C	裏面の一部に自然面が認められる。他の部分は研磨が徹底しており素材段階の状況が判然としない。基部上半は2方向からの衝撃により折損。刃先は裏面側への刃こぼれがあるが、大きい傷は新しいものである。使用線状痕はみられない。
7 22 22	II区 第1層	(5.1) 4.6 1.7 (66)		角閃ヒン 岩	II C	表裏面・両側面とも打削及び敲打により素材づくりしている。研磨は徹底しておらず、特に表面は調整痕が消えきらざっている。A面側への刃こぼれがみられる。使用線状痕はない。基部上半は裏面側からの衝撃により折損。
21 23 23	III区 盛土	(3.2) 4.4 1.7 (35)		輝緑岩	II C	全面とも研磨が入念で、素材段階の状況が判然としない。基部上半は表面側からの衝撃により折損。刃こぼれも著しいが使用線状痕はみられない。
50 24 24	III区 盛土	(3.8) 4.5 2.2 (55)		輝緑岩	II C	研磨が徹底しており、素材段階の状況は判然としない。本遺跡出土資料中、唯一の弧刃をなすものである。軽微な刃こぼれがあり、B面に使用線状痕がみられる。基部上半は裏面側からの衝撃により折損。

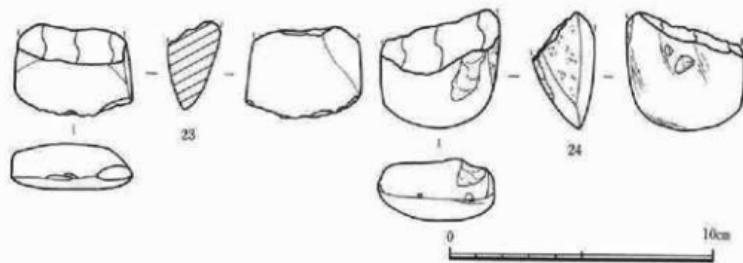
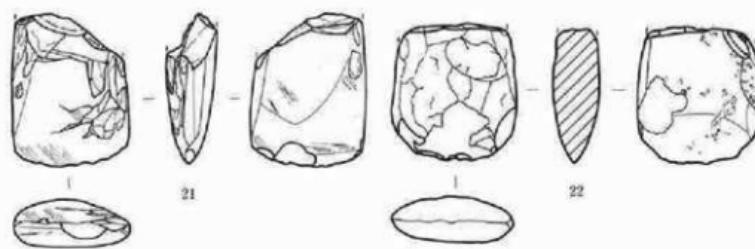
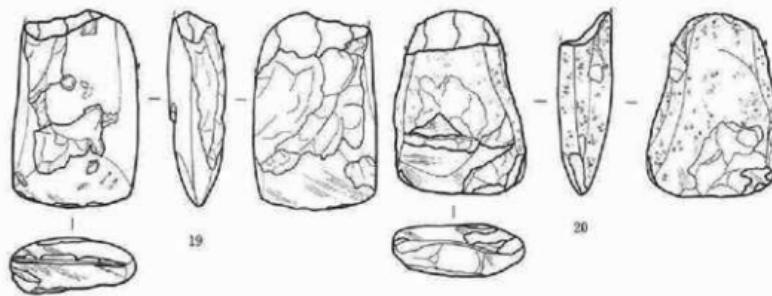


圖16 石斧 (3) II類

登録番号 排図番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項
45	Ⅲ区 盛土	(7.1) 4.4 1.8 (94)	はんれい 岩	II C		表裏面は研磨が入念。両側面の一部に調整剥離がみられる。表面の剥離は研磨後のもので、刃部(A面)を砥ぎなおしたためにバランスが悪くなり、片刃状をなす。刃こぼれは著しいが、使用線状痕はみられない。基端部は表面側からの衝撃により折損。
501	Ⅱ区 J-13 第3層	(4.9) 4.1 1.6 (56)	輝綠岩	II C		表裏面と右側面は自然面。左側面は打剥調整を施す。研磨はそれほど徹底していない。表面側からの打撃により折損し、刃部は欠失している。
24 27 27	Ⅲ区 盛土	(3.9) (3.8) (1.0) (20)	はんれい 岩	II F		刃部片。研磨は入念である。A面に刃線と直交する使用線状痕がみられる。裏面の大きな剥離面の打撃方向は判然としない。斜位の折れは節理面での破損である。
61 28 28	Ⅱ区 J-12 第3層	(3.1) (3.4) (1.0) (15)	輝綠岩	II F		刃部片。研磨は入念に施されている。刃こぼれが軽微なことから、かなり強い一撃ではじけたものと考えられる。使用線状痕はみられない。
31 29 29	Ⅲ区 盛土	(3.4) (3.8) (2.0) (45)	輝綠岩	II C		基端部片。表面と両側面の研磨は徹底している。基端には敲打による潰れがみられる。表面側からの強い衝撃により折損。登録番号61の資料と同一個体の可能性がある。
30 30 30	Ⅱ区 第3層	(6.5) (3.1) (1.9) (40)	礫質砂岩	II C		全面とも入念な研磨を施してあったと考えられるが、風化が著しく、手触りはザラザラする。形態は登録番号12に類似している。表面側からの衝撃により折損。

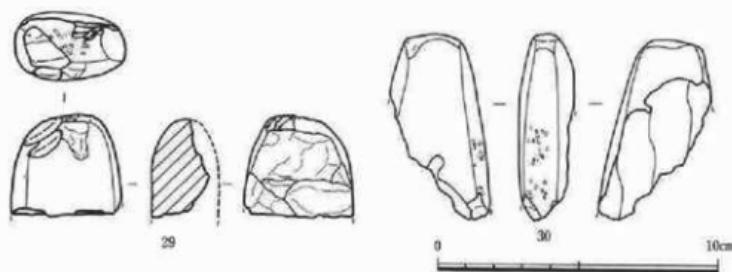
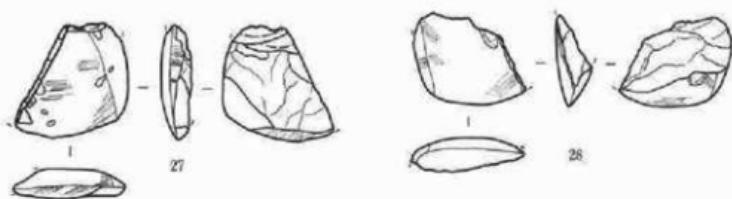
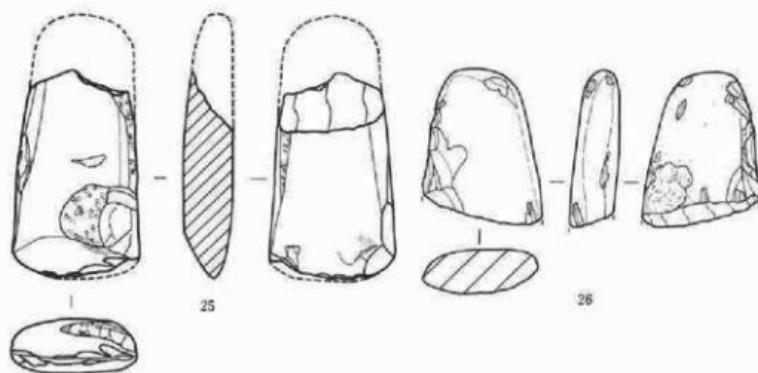


图17 石斧(4) II類

登録番号 拂団番号 図版番号	出 土 区 出土層位	法 量	長さ[cm] 幅[cm] 厚さ[cm] 重さ[g]	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項
26 31 31	Ⅲ 区 盛 土		(6.0) 3.9 2.0 (80)	輝 緑 岩	II C	自然礫をそのまま使用している。基端は上方からの打撃により剥離している。表面側からの強い衝撃により折損。
6 32 32	Ⅲ 区 盛 土		(7.9) 5.2 2.0 (115)	輝 緑 岩	II C	研磨により整形されているが、両面と右側面に自然面がみられる。左側面は打削調整を施している。基端の剥離は研磨後のものである。裏面側からの衝撃により折損。
42 33 33	Ⅲ 区 盛 土		10.0 4.7 2.2 145	輝 緑 岩	II A	製作途上品（素材段階の典型品）。裏面と右側面は自然面で、表面と左側面及び基端、刃部は打削調整を施している。仕上げとなる研磨工程まで及んでない。両側面側の厚味のバランスが悪く、打削調整時の失敗とも考えられる。
11 34 34	Ⅲ 区 盛 土		7.2 5.1 2.2 116	輝 緑 岩	II A	製作途上品。両面の一部と基端は自然面。両側面はラフな打削調整を施す。刃部の打ち欠きも粗く、バランスも悪いことから失敗作とも考えられる。
2 35 35	Ⅲ 区 盛 土		(8.7) 5.0 2.1 (130)	輝 緑 岩	II A	製作途上品。表面と裏面の上端部に自然面がみられる。側面はラフな打削に留まっている。下方の折損は打削調整後のものであることから、登録番号42・11と同様に失敗作と考えられる。
41 36 36	Ⅲ 区 盛 土		10.1 4.4 1.2 78	輝 緑 岩	III A	自然礫をそのまま使用し、打削調整を施していない。研磨も刃部のみで、他の部分は磨滅している。砥ぎ直したために幾分偏刃になっている。刃先は若干潰れているが、使用線状痕はみられない。

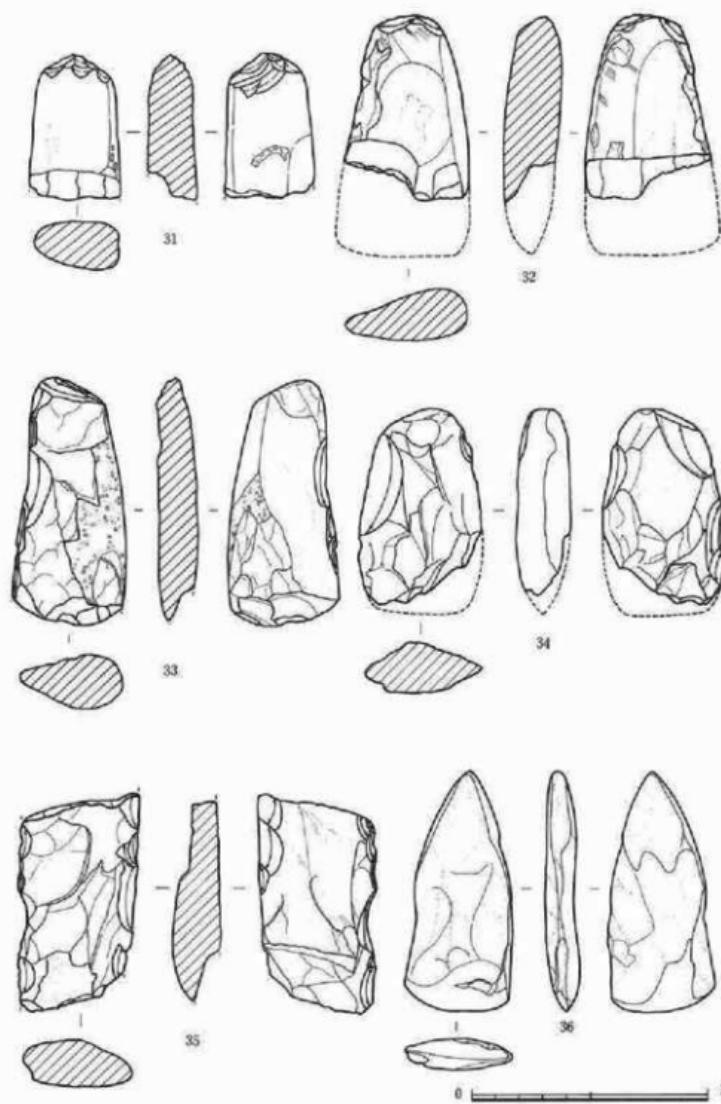


图18 石斧(5) II・III類

石斧調査一覧 (6)

登録番号 標図番号 図版番号	出土区 法 出土層位	長さ [cm] 幅 [cm] 厚さ [cm] 重さ [g]	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項	
44	III 区	(7.8)				
38	盛 土	4.6 1.5 (85)	角 閃 岩	III B	表面の一部に自然面を有するが、全体的に打剥調整により素材づくりしている。研磨はそれほど徹底していない。III類の典型資料。B面側への刃こぼれが著しい。	
502	II 区 J-12	(7.8)				
37	第3層	6.8 1.8 (150)	結晶片岩	III C	表面面とも側面は打剥調整を施す。風化が著しく磨面の観察はできない。本遺跡出土石斧で唯一の片刃である。裏面側からの衝撃により折損、刃面（A面）も一部剥落している。使用線状痕はみられないが、横斧としての機能を有していたと考えられる。	
503	II 区 J-11	(5.8)				
39		4.5 0.9 (41)	結晶片岩	III C	扁平な自然礫をうまく利用したものである。側面と基端を研磨工程のみで整形している。表面面とも磨きは徹底してなく、一部に自然面を残す。裏面側からの打撃により折損し、刃部の形状は判然としない。	
504	III 区	(4.4)				
40	盛 土	3.0 0.8 (30)	輝 緑 岩	III E	表面と右側面に自然面が残っている。縦割れと裏面が剥落した後にB面を研磨して再利用している。使用時に刃こぼれが生じ廃棄したようである。使用線状痕はみられない。	
418	I 区 あ-21	(3.6)				
42		(3.1)	輝 緑 岩	III F	扁平な自然礫をうまく利用している。左側面は、打剥調整後研磨により仕上げている。刃部は両面から砥ぎだし、比較的鋭い刃先をつくりだしている。基部中ごろで横折れし、さらに縦割れしている。使用線状痕はみられない。	
505	III 区	(4.9)				
41	盛 土	(3.7) (0.7) (21)	結晶片岩	III F	左側面に整形時の痕跡が残っているのみである。表面面とも大きく剥落しており、刃面も僅かに確認できる程度である。大きさは判然としないが、側面のつくりや石質などの観点からIII類に含めた。	
13	III 区	(8.2)				
43	盛 土	4.7 (0.9) (65)	結晶片岩	III E	表面は自然面。側面もラフな打剥調整を施した後に磨いている。裏面は剥落しているが、一部に磨面が残っていることから、1枚のみ剥離したようである。刃部はB面側への剥離が著しい。使用線状痕はみられない。	

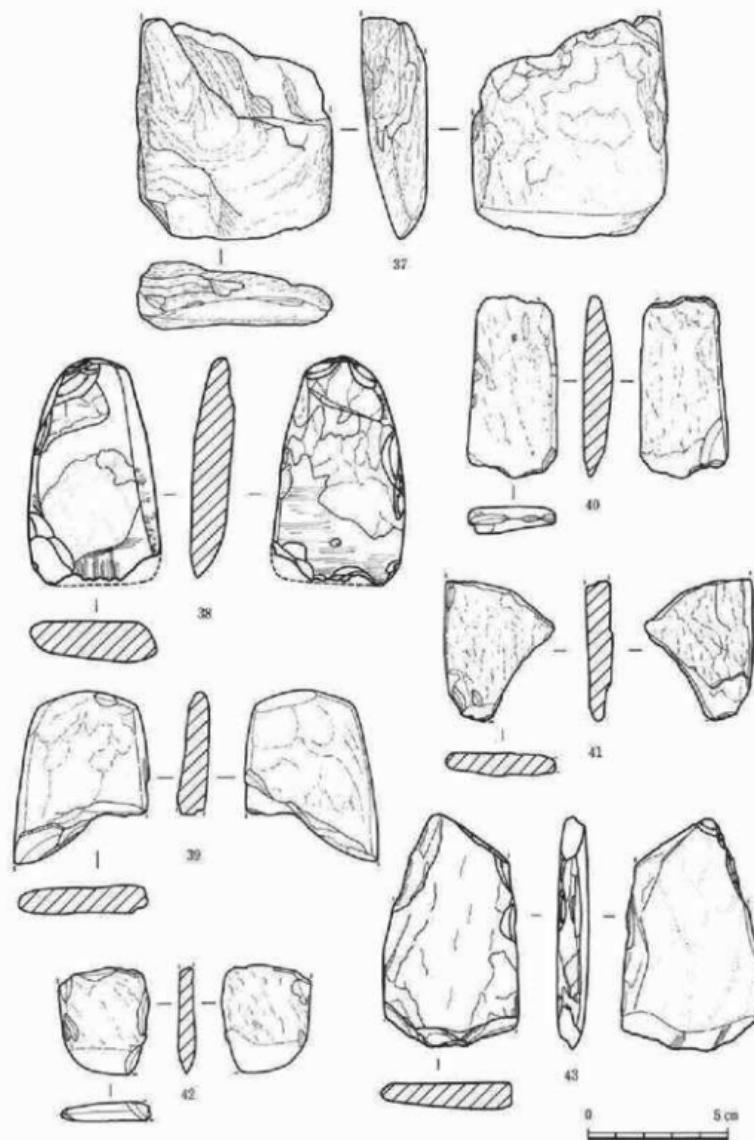


図19 石斧(6) Ⅲ類

登録番号 検査番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項
49	Ⅲ 区	(6.7)				
44	盛 土	4.9 (1.1)	はんれい			
44		(55)	岩		E	表面は研磨が入念で自然面か削面か判然としないが、両側面は磨きが徹底しておらず、剥離面が残っている。裏面は大きく剥落し、その後に研磨を施して再利用している。さらに刃部、基端が破損していることよりかなり利用されていたことがうかがえる。
64	Ⅲ 区	(5.3)				
45	盛 土	5.3 1.4 (80)	輝 緑 岩			
45					C	表面は自然面、裏面は削面。研磨は徹底せず、側面と基端に打刺調整痕が残っている。裏面側からの衝撃により折損し、刃部を欠失しているが、Ⅲ類の典型資料である。
78	Ⅲ 区	(5.5)				
46	盛 土	4.6 (1.0)	結晶片岩			
46		(40)			E	両側面と表面の一部にオリジナルな磨面が残っているが、表裏面ともかなり剥落している。基部上方も横位に折損。刃面が僅かに残っている。剥離の状況から、かなり強い打撃によるものと考えられる。
32	Ⅲ 区	(6.1)				
47	盛 土	(2.6)	輝 緑 岩			
47		(1.0) (20)			C	刃部片。現存するオリジナルな面から素材段階の状態を捉えることは困難であるが、側面の状況からⅢ類に含めた。使用線状痕はみられない。かなり強い衝撃ではじけとんだものである。
18	Ⅲ 区	(4.2)				
48	盛 土	4.9 (1.3)	輝 緑 岩			
48		(40)			C	再生品の典型資料。図に示したとおり、元來は剥離した部分も刃部になっていた。裏面と側面にオリジナルな面を残している。表面が剥落し、さらに基部が縦理面で折損した後に右側面の一部を研磨し、現状では彎刀の小型石斧になっている。使用線状痕はみられない。
35	Ⅲ 区	(6.1)				
49	盛 土	(2.5)	結晶片岩			
49		(1.1) (25)			E	再生品。両面とも剥落している。左側面の打刺調整も元來のものでなく、一部残っている刃面も砥ぎ直された痕跡がみられる。再生後の縱割れにより癪瘻されたようである。

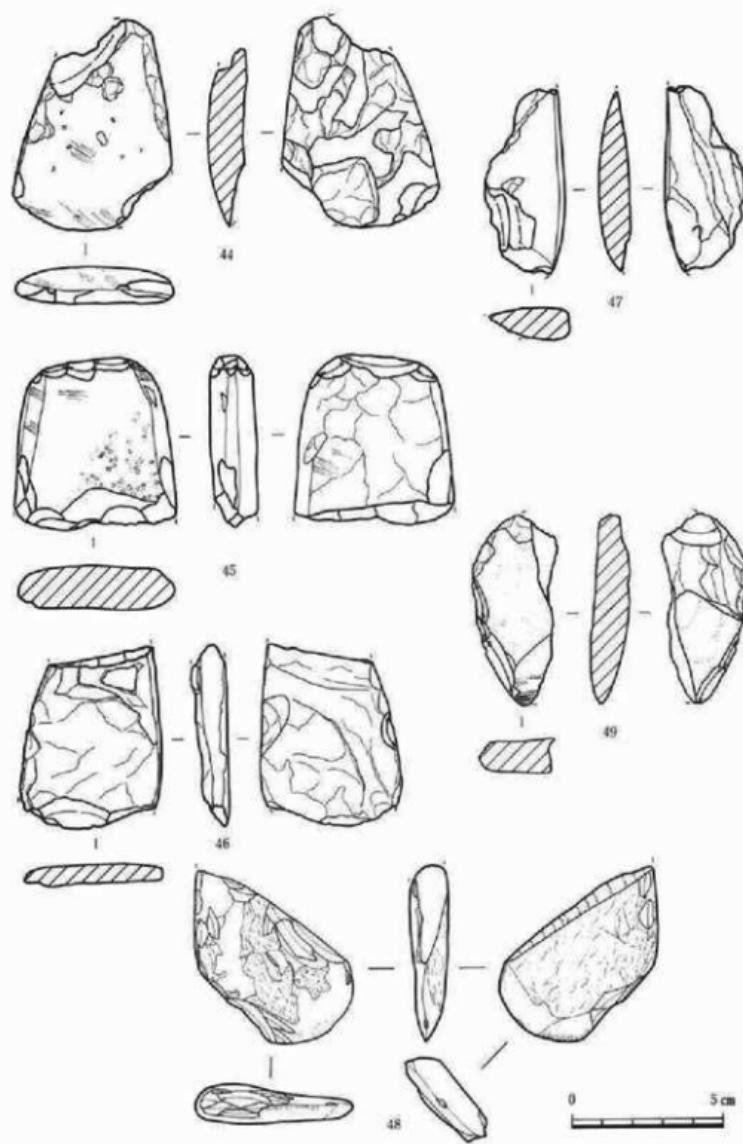


図20 石斧(7) II類

登録番号 揮因番号 図版番号	出土区 法 出土層位	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観 察 事 項	
17	Ⅲ 区	(7.0)				
50	盛 土	4.8				
50		1.4				
		(85)	輝 緑 岩	III C	両面とも自然的。両側面は打削調整を施している。研磨は徹底しておらず、表面に僅かな磨面がみられる。裏面側からの衝撃により折損、刃部の形状は判然としない。	
15	Ⅲ 区	(6.6)				
51	盛 土	4.1				
51		1.7				
		(60)	はんれい 岩	III C	全面とも打削及び敲打によって素材づくりしている。裏面の一部に磨面がみられるが、徹底していない。表面側からの衝撃により横折れ。刃部の形状は不明。	
25	Ⅲ 区	(6.4)				
52	盛 土	4.6				
52		1.4				
		(60)	結晶片岩	III A	両面とも割面。左側面に自然面が残っているが、両側面とも打削調整により素材づくりしている。上下端の破損が不自然であるが、研磨面がないことより製作途上品として取り扱う。	
16	Ⅲ 区					
53	盛 土	(8.2)				
53		5.4				
		(3.5)				
		(235)	はんれい 岩	IV C	刃部と基端を欠失しているが、IV類の典型資料である。研磨が徹底しており、素材づくりまでの製作工程が判然としない。基部上方と下方が折損していることはかなり強い衝撃によるもので、相当の力が加わったことを示している。形態的な面から、重厚な始刃石斧であることがうかがえる。	
5	Ⅲ 区	(9.1)				
54	盛 土	5.2				
54		3.2				
		(224)	はんれい 岩	IV C	磨きが入念で、研磨工程までの製作過程が判然としない。基端は若干潰れている。表面側からの衝撃により横折れしている。現状から平面観がバチ形になる重厚な始刃石斧であることがうかがえる。	
87	Ⅱ区 J-13 第3層	(7.3)				
55		5.1				
55		3.1				
		(140)	はんれい 岩	IV C	全面とも徹底した研磨を施していたと考えられるが、風化が著しく手触りがザラザラする。登録番号5と同様にバチ形の重厚な始刃石斧である。基端の剥離は研磨後のものである。表面側からの強い衝撃により折損。	
10	Ⅲ 区	(7.1)				
56	盛 土	(5.7)				
56		3.0				
		(205)	輝 緑 岩	IV C	表面は入念な研磨を施しているが、裏面はそれほどでもなく、自然面が消えきらざる残っている。破損後はハンマーとして転用され、基端及び両側面、破損部の敲打による潰れが著しい。	

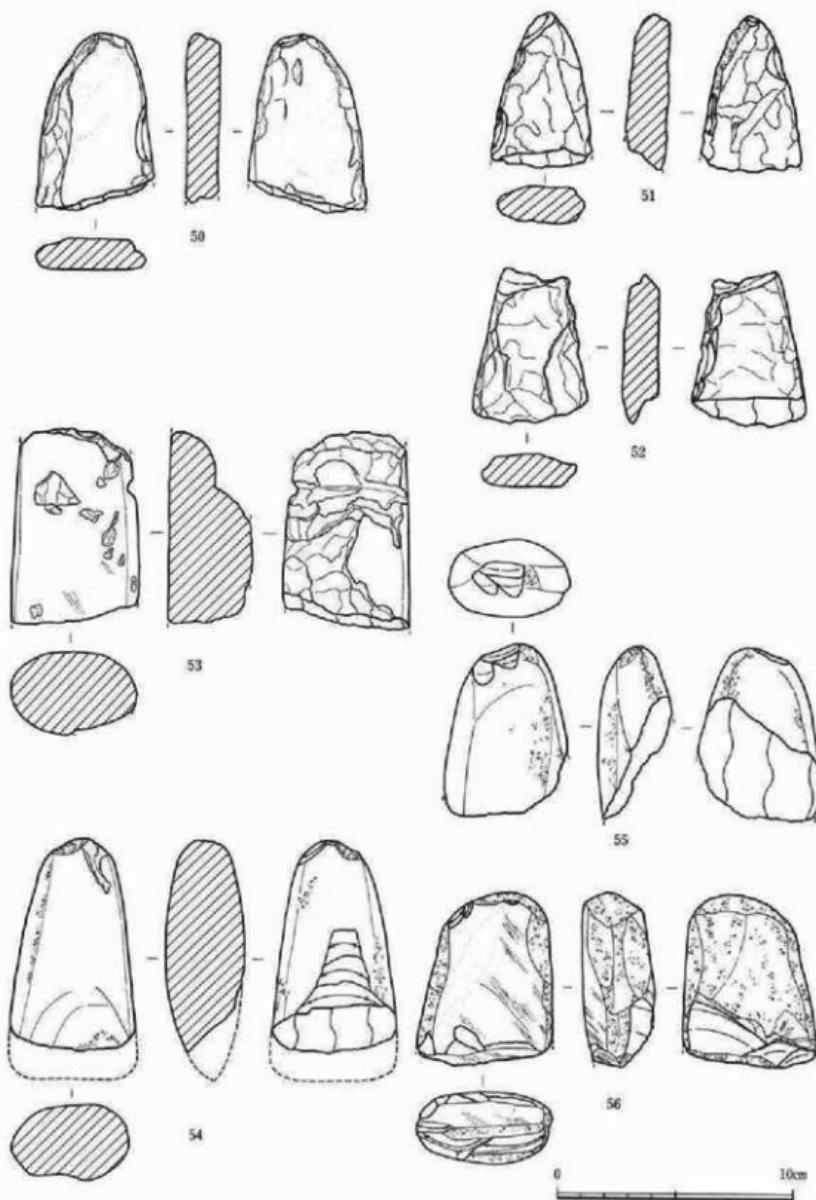


图21 石斧 (8) III・IV類

登録番号 補圖番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)	石 質	形態分類 破損形態	観察事項	
70	Ⅲ 区 盛 土		(4.7) 5.9 3.4 (120)	はんれい 岩	IV C	基端部破片。両側面は敲打調整を施している。基端の潰れは完成後のものである。表面の剥離は破損後のもの。重厚な始刃石斧であることがうかがえる。	
56	Ⅲ 区 盛 土		(4.5) 4.1 2.4 (53)	はんれい 岩	IV C	バチ形の始刃石斧の基端部片。研磨は徹底しておらず、部分的に自然面が残っている。表面側からの打撃により折損している。	
58	Ⅲ 区 盛 土		(6.2) 7.3 3.6 (303)	はんれい 岩	IV C	表裏面、側面とも研磨が入念である。表面側からの衝撃による折損で刃部を欠失するが、かなり重厚な始刃石斧であることが他の資料と比較のうえでわかる。基端の潰れが著しいことから、破損後にハンマーとして使用したことがうかがえる。	
40	Ⅲ 区 盛 土		(9.4) 4.9 2.9 (235)	輝 緑 岩	IV C	研磨を比較的入念に施しているが、裏面に打剥調整痕が残っている。基端部が裏面側からの衝撃で折損。刃先の潰れや右側面の敲打痕、破損部縁辺の磨滅状況から、ハンマーとして転用していたことがうかがえる。使用線状痕はみられない。	
39	Ⅲ 区 盛 土		(7.6) 5.4 2.8 (184)	はんれい 岩	IV C	研磨を入念に施している。表面の左側面よりに調整打削が消えきらざついている。B面の剥離は使用痕であり、その後に砥ぎ直して使っている。片刃的になっているのはそのためである。基部は表面側からの衝撃により折損している。使用線状痕はない。	
1	Ⅲ 区 盛 土		(8.1) 6.2 4.0 (233)	はんれい 岩	IV C	表裏面・側面とも打剥調整により素材づくりしている。基部が折損した後に基端と側面を敲打調整し再利用している。右側面の抉りは柄に固定するためのものであろう。刃先の潰れも激しく、バランスが悪くなつても使いつづけていたことがうかがえる。使用線状痕はみられない。	

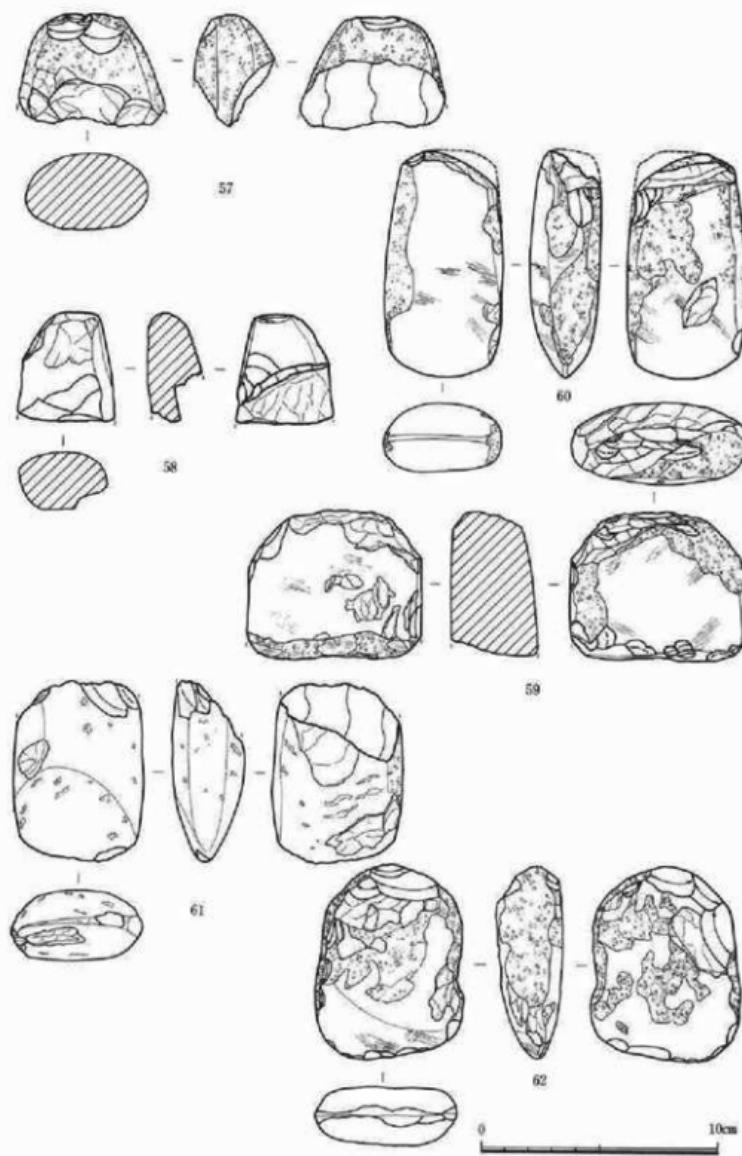


图22 石斧(9) IV類

石斧觀察一覧 00

登録番号 揮因番号 圓版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観察事項
4 63 63	Ⅲ区 盛土		(7.9) 6.3 2.9 (198)	はんれい 岩	IV C	研磨が入念で素材段階の状況が判然としない。基部上方で横折れした後、右側面を中心で打剥調整を施して再利用している。刃先の剥離が著しく、かなり使われていたことがうかがえる。使用線状痕はみられない。
74 64 64	Ⅱ区 G-12 第1層		(6.3) 5.3 3.0 (155)	はんれい 岩	IV C	研磨が徹底している。基部の中ごろで折損、表面側からの強い衝撃によるものである。刃先もかなり潰れているが使用線状痕は観察できない。
65 65 65	Ⅱ区 G-11 第3層		(6.1) 5.5 3.0 (155)	はんれい 岩	IV C	研磨面は風化が著しく手触りがザラザラする。基部の折損と刃部(B面)の剥離が激しく、かなりの衝撃を受けたものと考えられる。刃先は欠失しているが始刃石斧であることがうかがえる。使用線状痕はみられない。
416 66 66	Ⅱ区 I-13 第3層		(5.5) 5.9 2.5 (135)	輝緑岩	IV C	素材段階の状態は判然としない。表面側からの衝撃により横折れしている。表面の剥離はその後に生じたものである。刃先の潰れも著しいが、使用線状痕はみられない。
47 67 67	Ⅲ区 盛土		(7.3) 5.8 (2.2) (140)	輝緑岩	IV E	表面は自然面、側面は敲打調整を施す。裏面は剥落しており判然としない。バチ形の始刃石斧。基端側からの衝撃により裏面が大きく剥離している。刃先の潰れも著しい。使用線状痕はみられない。
57 68 68	Ⅲ区 盛土		(6.7) (3.4) (2.3) (60)	輝緑岩	IV F	重厚な始刃石斧の刃部片。研磨は入念に施している。かなり強い衝撃によりはじとんだものである。使用線状痕はみられない。

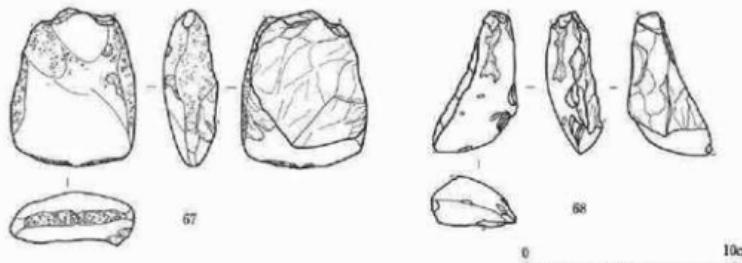
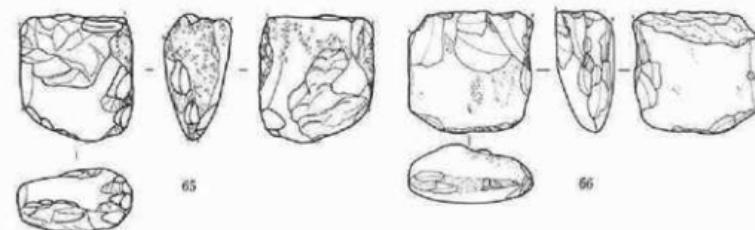
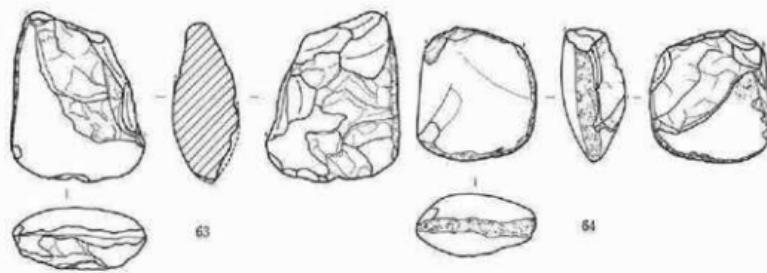


图23 石斧 00 IV类

石斧観察一覧(II)

登録番号 挿図番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	形態分類 破損形態	観察事項
60 69 69	Ⅲ区 盛土	(3.3) (2.2) (1.6) (16)	輝綠岩	IV F		登録番号57と同様な始刃石斧の刃部片。細片すぎて特徴的なことは判然としない。刃部の研磨は徹底している。使用線状痕はみられない。
82 70 70	Ⅱ区 I-11 第3層	(7.5) 6.0 2.4 (160)	輝綠岩	IV C		表面は自然面が残っており、裏面と側面は打剥により素材づくりしている。研磨は徹底しておらず、裏面の一部にみられるのみである。表面側からの衝撃で折損し、刃部の形状は判然としない。
22 71 71	Ⅲ区 盛土	(4.7) (6.2) (1.3) (94)	はんれい岩	IV F		はじけとんだ剥片の一端(右側面)に刃部をつくりだした再生品であるが、他に例を見ない特異なものである。裏面を研磨して附刃しており、比較的エッヂの鋭い刃になっている。現状では石斧以外の機能を有していたものと考えられる。
201 72 72	Ⅲ区 盛土	(4.9) 7.5 3.2 (207)	はんれい岩	IV C		表裏面の一部に自然面を有する。側面は敲打調整を施す。基部中ごろで横に折損。刃部も3回の大きな打撃により消失しているが、残存形態よりIV類に含まれるものである。
3 73 73	Ⅲ区 盛土	(9.1) 3.4 1.2 (70)	結晶片岩	V B		両側面は自然面。表面は若干の打剥調整を施す。裏面は割面。研磨は刃部のみである。刃先は裏面側からの打撃により消失。使用線状痕はみられない。
55 74 74	Ⅲ区 盛土	(6.7) 3.0 1.9 (60)	はんれい岩	V C		V類の典型的な資料。基部と右側面に自然面を残すが、他は打剥により整形している。裏面と右側面に研磨がみられるが、徹底していない。中ごろで横折れし、刃部を消失。
54 75 75	Ⅲ区 盛土	(8.5) 3.0 2.1 (93)	結晶片岩	V C		表面と両側面は自然面がそのまま残っている。裏面は打剥調整を施している。研磨面はみられないが、裏面が磨滅していることや基部中ごろで折損していることから、使用後の状態と考えられる。刃部の形状は判然としない。

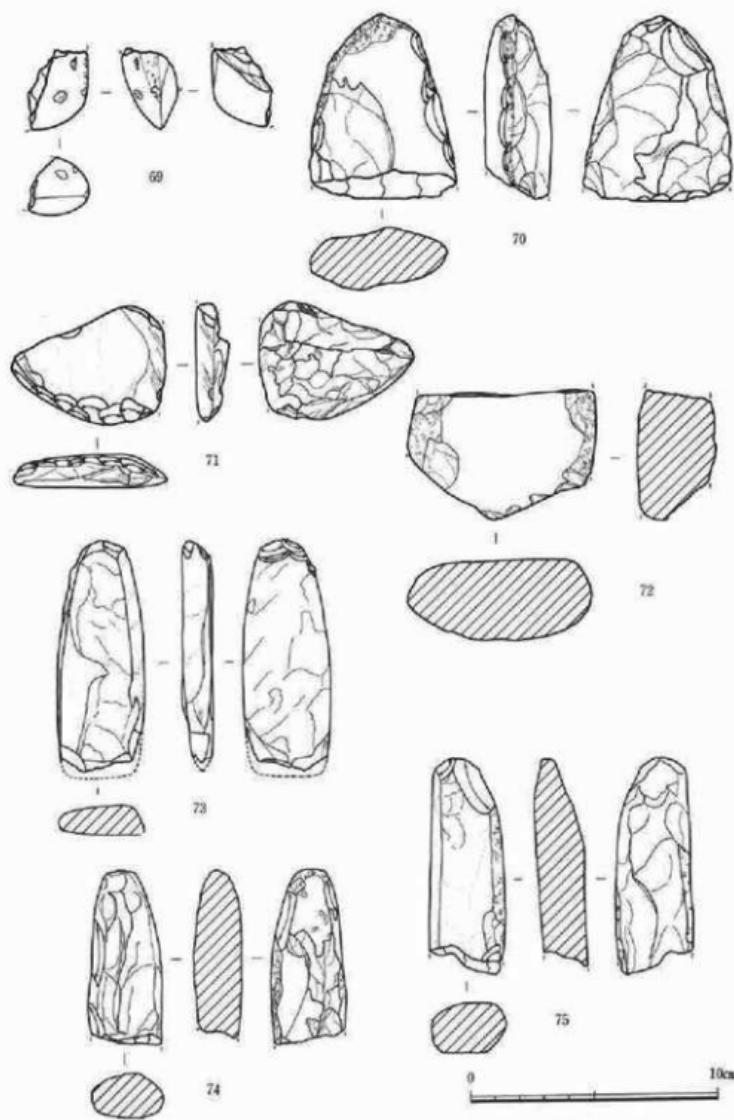


圖24 石斧 (II) IV・V類

(2) 扁平小型利器

今回の調査で4点得られ、それらを下図に示した。いずれもIII区の盛土中からである。76・77・78の3例は形状が石斧に似ている。79の1例のみは形が異なるが、剥片を用いて刃部だけを研磨していることや小型であることから本項で扱う。以下、各標品について簡記する。

76は完形品で、自然の小礫をそのまま利用し、刃部のみ研磨して仕上げている。使用線状痕はみられない。長さ3.3センチメートル、幅2.1センチメートル、厚さ0.6センチメートル、重さは僅か8グラム。輝緑岩製である。

77は結晶片岩の剥片を利用したもので側面と刃部に研磨を施している。刃こぼれはほとんどなく、使用線状痕もみられない。刃部右側の破損は新しい傷である。長さ3.6センチメートル、幅2.4センチメートル、厚さ0.4センチメートル、重さ5グラムである。

78も結晶片岩製で、刃部片であるが76と同じ形狀を有していたものと思われる。使用線状痕は判然としない。現存長2.3センチメートル、厚さ0.2センチメートル、重さ3グラムである。

79は輝緑岩の剥片を利用したもので、上記3例とは形狀が異なり、長軸の一端を磨いて附刃している。切先もつくりだしており、ナイフのような用途が考えられる。軽微な刃こぼれがみられる。長さ2.0センチメートル、幅4.1センチメートル、厚さ0.5センチメートル、重さ6グラムである。

76・77・78と同様な石器は1962年の調査でもA地点から3例出土している。

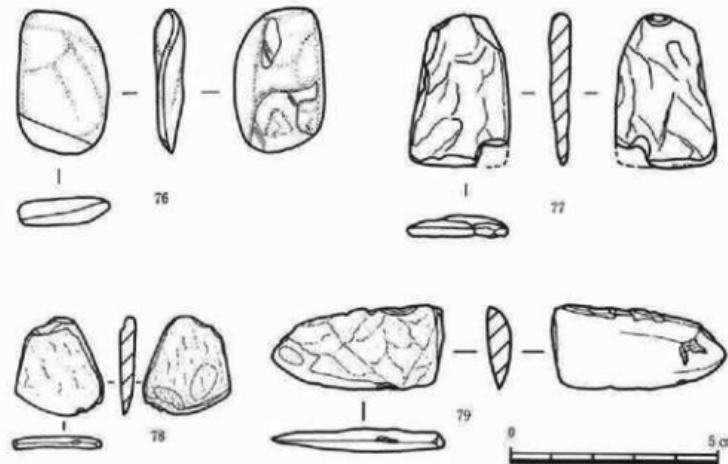


図25 扁平小型利器

(3) たたき石

破片も含めて15点得られた。遺物包含層から出土したものは僅か1例(81)で他は擾乱部からの資料である。石斧と同様に他の遺物との共伴関係が不明で、時期的な位置づけは困難である。各標品については観察一覧に示した。

自然礫を加工施さずにそのまま利用するという性格上、形態的に一定のパターンを有しないことがたたき石の特徴の一つであることや破損が著しく使用された面の状況が判然としないことにより、分類することはひかえた。ただ、80のみは制作時に打削調整を施し、利用しやすい大きさと重さにしたようである。また、今回の出土品に限ってみると、いわゆる洗顔石ケン状を呈するもの、棒状、球状、円盤状になるものといくつかのバリエーションがみられる。

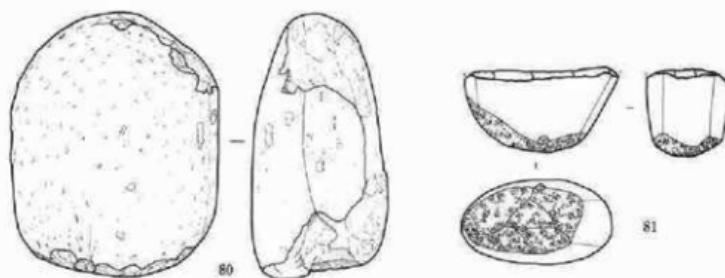
用いられている岩石は砂岩がほとんどであり、94のみ輝緑岩である。本標品は円盤形石器と称しているもので、他の資料とは形態的にも大きな違いがある。使用の状況についてみると、80・81・87のようにすり石との複合した機能を有するものもある。大きくて重量のあるものはほど破損が著しく、ハードハンマーとしての使用度合、すなわち石器(石斧)の素材づくり段階の粗割り用であることがうかがえる。比較的原形を保っている小型軽量のたたき石は最終のトリミング用であることが考えられる。本遺跡のたたき石がすべて石器づくりのハンマーというわけではないが、上記の使用方法はそういった機能を有している資料も含まれているという意味である。

たたき石観察一覧(1)

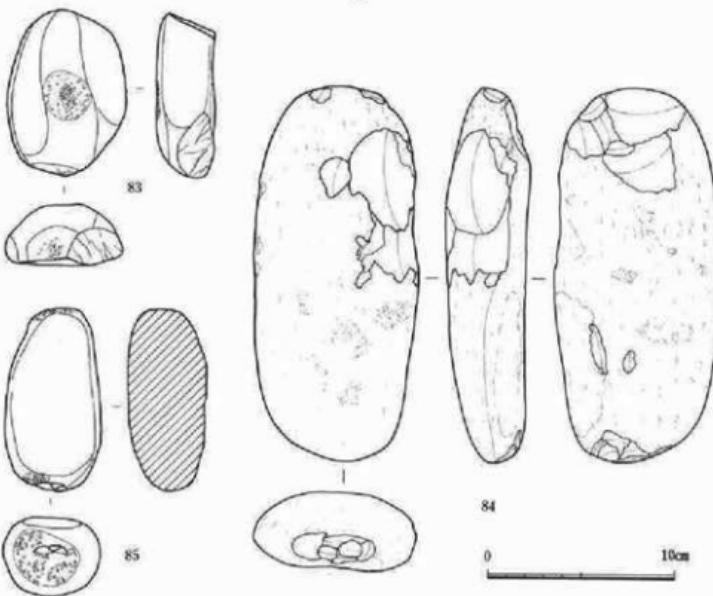
登録番号 標図番号 図版番号	出 土 区 出土層位 量	法 長さ[cm] 幅[cm] 厚さ[cm] 重さ(g)	石 質	観 察 事 項
509 80 80	Ⅲ 区 盛 土	13.5 10.8 7.1 1,572	砂 岩	ほとんど完形。上・下端と両側面に敲打痕を有する。表面と右側面に磨面があり、すり石としても使っていたようである。裏面の剥離は製作時のもので、それによって形と重量を決定している。
223 81 81	Ⅱ区 I-11 第3層	(4.0) 7.6 4.3 (210)	砂 岩	横位に折損。上端は使用による潰れが著しく、六面の敲打痕がみられる。下端にも同様な使用痕があったと考えられる。表裏面が磨面になっていることから、すり石としても利用していたことがうかがえる。
508 82 82	Ⅲ 区 盛 土	(8.5) (8.5) 7.7 (1,060)	砂 岩	斜めに折損。上端付近に浅い抉りが回旋しているが性格は判然としない。下端右側に使用時の敲打によるくぼみがみられる。下端部は全体的に使われたようで敲打痕を有する。

たたき石観察一覧(2)

登録番号 押印番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	観 察 事 項
207 83 83	Ⅲ 区 盛 土		8.4 6.2 2.9 240	砂 岩	表面と上・下端は自然面、裏面は削面。器面全体が手慣れにより磨滅している。表面の中央部に敲打によるくぼみがみられる。右側面の下端側が一部欠失
510 84 84	Ⅲ 区 盛 土		20.4 8.4 4.2 1,093	砂 岩	比較的大きな自然礫を利用している。上・下端および両側面の一部を使っている。特に上端と右側面の打撃が激しく、大きく剥離している。表面に若干の研磨面がみられるが、性格は判然としない。
210 85 85	Ⅲ 区 盛 土		9.7 5.1 4.1 (300)	砂 岩	棒状の礫をうまく利用している。上・下端が敲打により潰れている。特に上端は使用度が高く、一部剥離している。
215 86 86	Ⅲ 区 盛 土		9.2 6.9 4.9 (423)	砂 岩	器面全体が手慣れ様に磨滅している。上端の一部と下端に使用時の敲打痕がみられ、裏面は下端側からの衝撃により大きく剥落している。
219 87 87	Ⅲ 区 盛 土		(6.6) (4.9) 3.8 (223)	砂 岩	破損が著しく、全体の4分の1程度残っている。元來の面が残っている上端と右側面に使用敲打痕がみられることから、周縁部をフルに利用していたと考えられる。表裏面に磨面があり、すり石としても使われていたことがわかる。
203 88 88	Ⅲ 区 盛 土		(4.8) (8.2) (3.9) (219)	砂 岩	激しい使用により上半分が欠落。下端の使用敲打痕が著しく、裏面側に大きく剥離している。折損は左側面からの打撃によるものであることから、両側面、上端も利用していたことがうかがえる。右側面の剥離は新しい傷である。



82



84

85

10cm

図26 たたき石 (1)

たたき石観察一覧 (3)

登録番号 地図番号 図版番号	出土区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	石 質	観 察 事 項
211 89 89	Ⅲ 区 盛 土		2 8 9 170	砂 岩	表面は自然面。裏面は剖面になっているが、全体的に磨滅していることから使用時の破損ではない。上端以外は軽い敲打により潰れている。大きさ・重量等から細部調整用のハンマーと考えられる。
209 90 90	Ⅲ 区 盛 土		(5.6) 6.1 (2.2) (110)	砂 岩	下端部分の破片。現存する下端と両側面に著しい敲打痕を有することから、周縁全面を使用していたことがうかがえる。
221 91 91	Ⅲ 区 盛 土		(10.2) (8.4) (6.3) (653)	砂 岩	かなり激しく使用されたもので、表面・裏面とも大きく剥離し、上端部も横折れにより欠失している。わずかに残っている下端と右端面の一部に使用時の打痕がみられる。
213 92 92	Ⅲ 区 盛 土		(10.4) (7.2) (3.6) (245)	砂 岩	激しい使用による破損形態を示す好資料。上端側からの打撃による緩割れと下端側からの打撃による大きな剥落がみられる。わずかに残った下端部に使用時の歴の敲打痕がみとめられる。
208 93 93	Ⅲ 区 盛 土		6.4 6.2 (3.8) (239)	砂 岩	現存する形は半球状を呈するが、元来は球状をなすもので、使用時の打撃により半欠している。その後も使用されており、縁の部分が敲打により潰れている。
507 94 94	Ⅲ 区 盛 土		6.0 7.3 1.8 110	輝 緑 岩	扁平な礫を利用している。周縁部がフルに使用され、表面側と裏面側への剥離が著しい。いわゆる円盤形石器になるものと考えられるが、1例のみの出土であり、機能の点から本項に含めた。

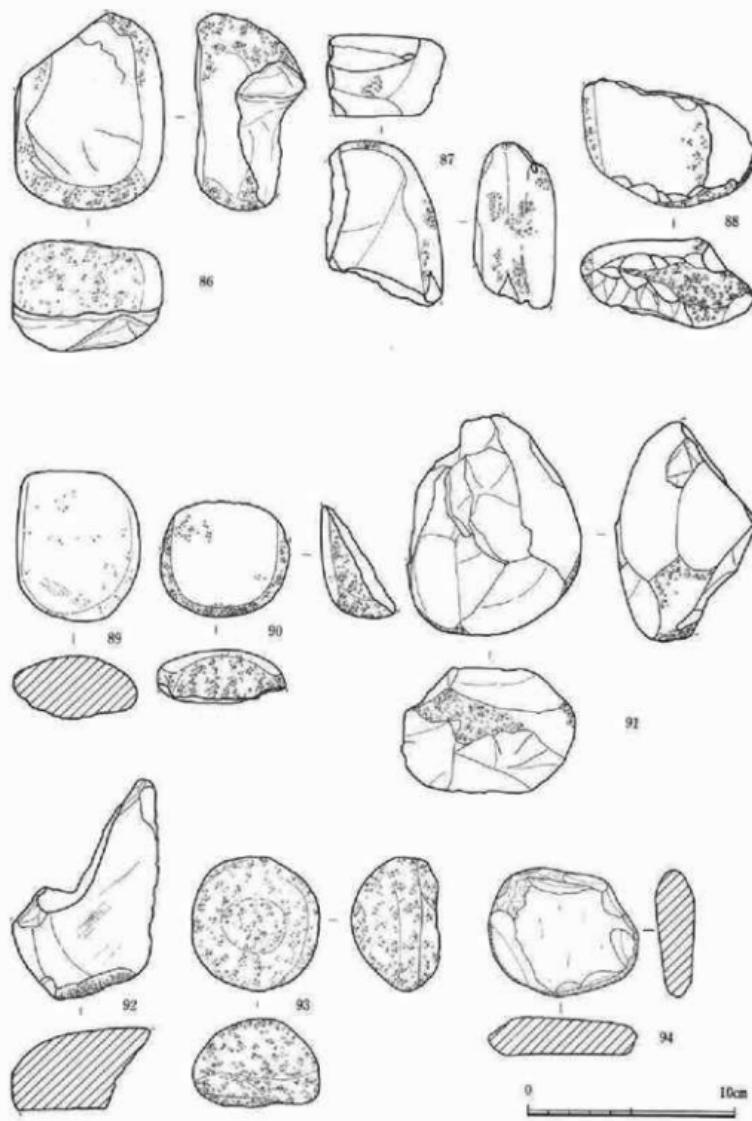


図27 たたき石 (2)

(4) 小 結

以上、石器について簡単に述べた。ここでは前項で触ることのできなかった石材の产地推定に関する問題の一端を考えてみたい。また、今日までの調査成果をもとに石斧の編年的位置づけを試み、むすびとしたい。

本遺跡の地形・地質的環境については第2章に詳述されている。それからすると、遺跡地一帯は基盤が新生代第三紀の島尻層群と称される泥岩（俗称クチャ）や細粒砂岩（俗称ニービ）などからなり、その上部に琉球石灰岩、さらにその風化土（俗称島尻マーデ）がのっているという沖縄本島中・南部の一般的な地質構造を呈している。このようなことから、発掘調査において琉球石灰岩以外の岩石をすべて採取し、県立教育センターの大城逸朗氏に石質同定を依頼した。その結果、はんれい岩・角閃岩・角閃ヒン岩・輝綠岩・結晶片岩・礫質砂岩・砂岩・細粒砂岩・チャートの9種類の岩石と軽石・石英が確認された。それらの岩石と器種および石材（片）の関係を表4と表5に示した。石器は僅か3器種であるが、石斧のなかに石材として出土のない角閃岩・角閃ヒン岩製が各1点ある。

そのことは両者とも製品として遺跡に持ち込まれた公算が大きい。石斧の主体をなす輝綠岩とはんれい岩も石材は目立たない。ただ、たたき石（ハードハンマー）があることから遺跡でも石斧づくりが行われていたことがうかがえる。ちなみにたたき石はほとんどすべて砂岩製で、石材としても砂岩が群をぬいでいる。

さて、これらの岩石のほとんどが遺跡地近隣で入手することができないものであることから産出地の問題がある。それは単に産地推定にとどまるものではなく、当時の人々の行動範囲さらには経済交流の問題の一端を究明するうえでかなりのウエイトを占めるもと考えられる。

しかし、沖縄における今日までの考古学研究において、その問題に関する詳しい論考はみられない。

表4 器種と石質の相関

石質	器種	石斧	扁平小型利器	たたき石	計(比率)
火	はんれい岩	20	—	—	20(22.7)
成	角 閃 岩	1	—	—	1(1.1)
岩	角閃ヒン岩	1	—	—	1(1.1)
変	輝 緑 岩	34	2	—	36(40.9)
成	結 晶 片 岩	11	2	—	13(14.8)
岩	礫 質 砂 岩	1	—	—	1(1.1)
堆	砂 岩	1	—	15	16(18.3)
	計	69	4	15	88(100)

表5 石材（片）と石質の相関

石質	I	II	III	計(比率)
火成岩	はんれい岩	—	2	15 17 (1.0)
変成岩	輝 緑 岩	2	4	14 20 (1.1)
	結 晶 片 岩	21	7	317 345 (19.6)
堆積岩	礫 質 砂 岩	—	—	2 2 (0.1)
	砂 岩	72	33	1,095 1,200 (67.9)
	細粒砂岩	1	—	172 173 (9.8)
	チャート	3	1	4 8 (0.5)
	計	99	47	1,619 1,765 (100)

沖縄における地質学の調査研究がかなり進んでおり、前記の問題究明に活用できる資料が数多く出されている。

なかでも『地質分布図』¹²は露頭岩の所在がひと目でわかるようになっているが、考古学的な観点からの産地推定に利用するためにはより細かな分布状況の把握ができる資料が必要になってくる。その理由のひとつとして、沖縄の遺跡から出土する石材はほとんどすべてが転石（河原石）で、露頭岩から採掘してまで石器の材料を求めるることはなかったようである。すなわち、河川や海岸など転石の採取できる場所を詳細にチェックすることによって原材料供給地がかなりしづらこんでの産地推定につながるものと考えられる。

残念ながら現時点では転石の採取できる場所すらも把握されてなく、今後の課題として『転石分布図』の作成が急務になると思われる。

次に今回の調査で得られた石器のなかでも特に多い石斧について形態的な観点からある程度の総年の位置づけを試みる。沖縄における考古資料の編年研究は土器以外についてほとんど手つかずの状態である。石斧に関しては例外ではなく、そのネックになっている最大の要因は遺構内での一括出土、すなわち厳密な意味での共伴資料が少なすぎることである。最近の調査例ではシヌグ堂遺跡・仲原遺跡など堅穴住居址内からの一括資料があるが、時期的に限定されており、本遺跡の時期の一括資料はほとんど皆無である。

遺跡の時期決定に最も有効な手段は、現在のところ土器編年によるものである。本遺跡の土器については次項で述べているとおりで、それからすると伊波・萩堂式土器が圧倒的に多く、他に大山・室川・室川上層式土器や面繩束縛・嘉德Ⅰ式土器などが若干得られている。それらの土器は高宮編年の前IV期・前V期にすべて含められ、ほとんどが壊乱部からの出土でありながら他の時期の土器の混在はみられない。そのことから石斧に関しては同様で、すべて前IV・V期に所属するものとして扱うことができる。

今回は石斧の大きさ・重さに分類の視点をおき、5類に大別した。全体的な構成は本遺跡の南3キロメートルに位置する室川貝塚¹³のそれと酷似している。それらを類別にみると、I類とした小型のバチ形石斧は嘉手納貝塚や仲宗根貝塚など伊波・萩堂式土器の時期に含められ、IV類とした重厚な始刃石斧は赤犬子遺跡・古宇利仲原遺跡・シヌグ堂遺跡¹⁴に多いことから前V期の所産であることが考えられる。他のII・III・V類については今のところ限定した時期に位置づけることは困難であり、今後の課題とする。1962年に発掘調査が実施された本遺跡の成果との比較は第4章で述べることにする。

＜注文献＞

注1. 多和田真淳・高宮廣衛・新田重清・嵩元政秀「知花遺跡発掘調査概報」「知花遺跡群」
沖縄県教育委員会 1978年3月

注2. 木崎甲子郎編図「奄美・沖縄地質図」「沖縄大百科事典」付録 沖縄タイムス社 1983
年5月

- 注3. 金武正紀・比嘉春美ほか『シグ堂遺跡－第1・2・3次発掘調査報告』沖縄県教育委員会 1985年3月
- 注4. 当真嗣一・上原静『伊計島の遺跡－神山遺跡・仲原遺跡確認調査概報』沖縄県教育委員会 1981年3月
- 注5. 高宮廣衛「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」「南島考古」第6号 沖縄考古学会 1978年12月
- 注6. 高宮廣衛ほか「室川貝塚発掘調査概報」「沖国大考古」第2号～第6号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1978・79・80・81・82年3月
- 注7. 新田重清・嵩元政秀「嘉手納貝塚発掘報告」「文化財要覧」琉球政府文化財保護委員会 1960年3月
- 注8. 多和田真淳・嵩元政秀・知念勇・安里嗣淳「仲宗根貝塚第一次発掘調査概報」「仲宗根貝塚」沖縄県教育委員会 1980年3月
- 注9. 高宮廣衛・多和田真淳「読谷村赤犬子遺跡調査報告」「文化財要覧」琉球政府文化財保護委員会 1961年3月
- 注10. 金武正紀「古宇利島の先史遺跡調査概報」「南島考古」第4号 沖縄考古学会 1975年9月
- 注11. 注3に同じ
- 注12. 注1に同じ



圖版13 石斧(I) I類 (上段表面、下段裏面)



13



14



15



16



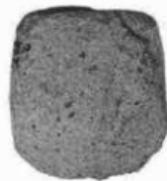
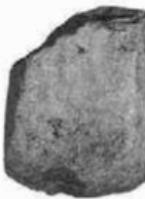
17



18



圖版14 石斧(2) II類 (上段表面、下段裏面)



圖版15 石斧(3) II類 (上段表面、下段裏面)



25



26



27



28



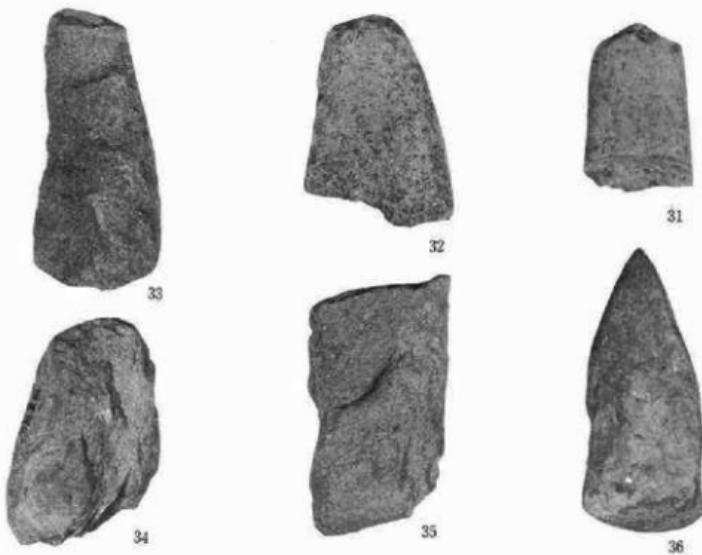
29



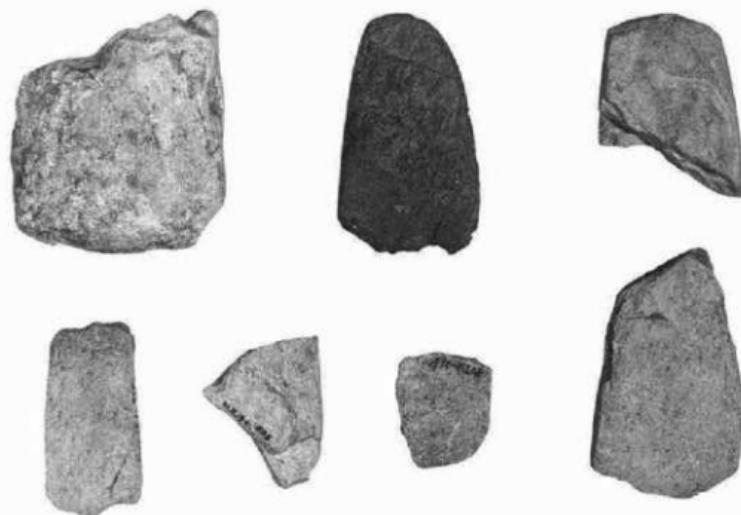
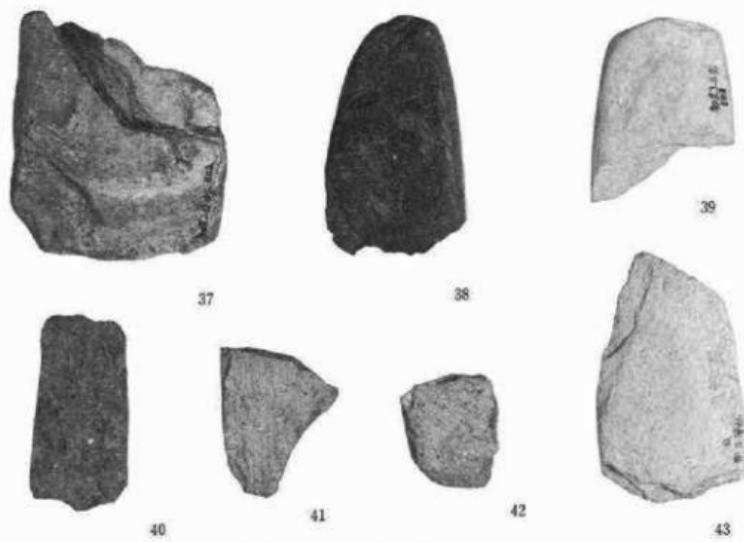
30



圖版16 石斧(4) II類 (上段表面、下段裏面)



圖版17 石斧(5) II・III類 (上段表面、下段裏面)



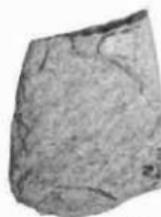
圖版18 石斧(6) 三類 (上段表面、下段裏面)



44



45



46



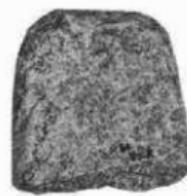
47



48



49



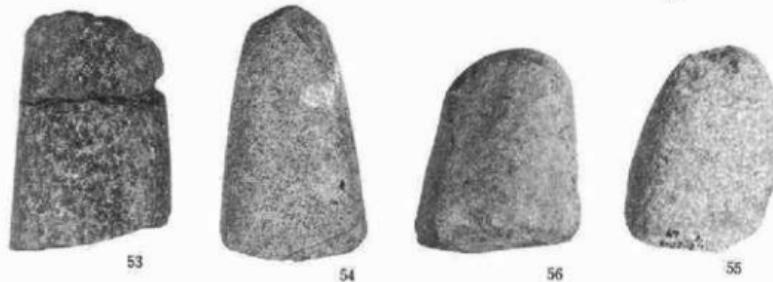
圖版19 石斧(7) 田頤 (上段表面, 下段裏面)



50

51

52



53

54

56

55



圖版20 石斧(8) III·IV類 (上段表面、下段裏面)



57



58



61



60



59



62



圖版21 石斧(9) IV類 (上段表面、下段裏面)



63



64



65



66



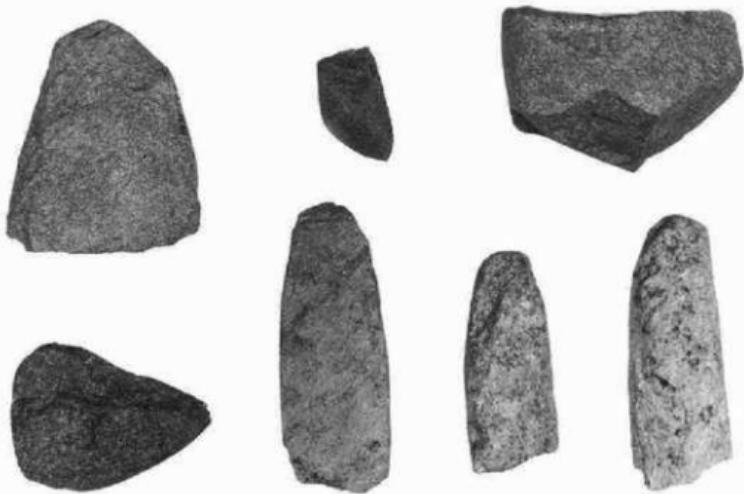
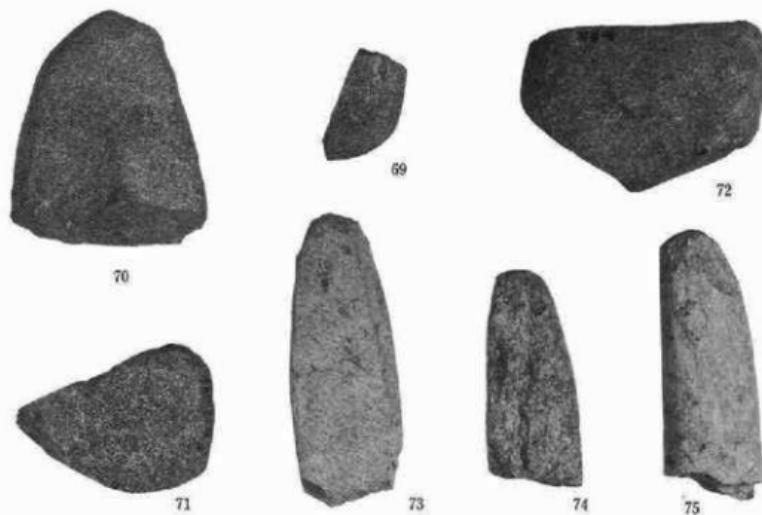
67



68



図版22 石斧 40 IV類（上段表面、下段裏面）



圖版23 石斧(II) IV・V類 (上段表面、下段裏面)



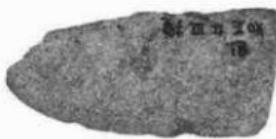
76



77



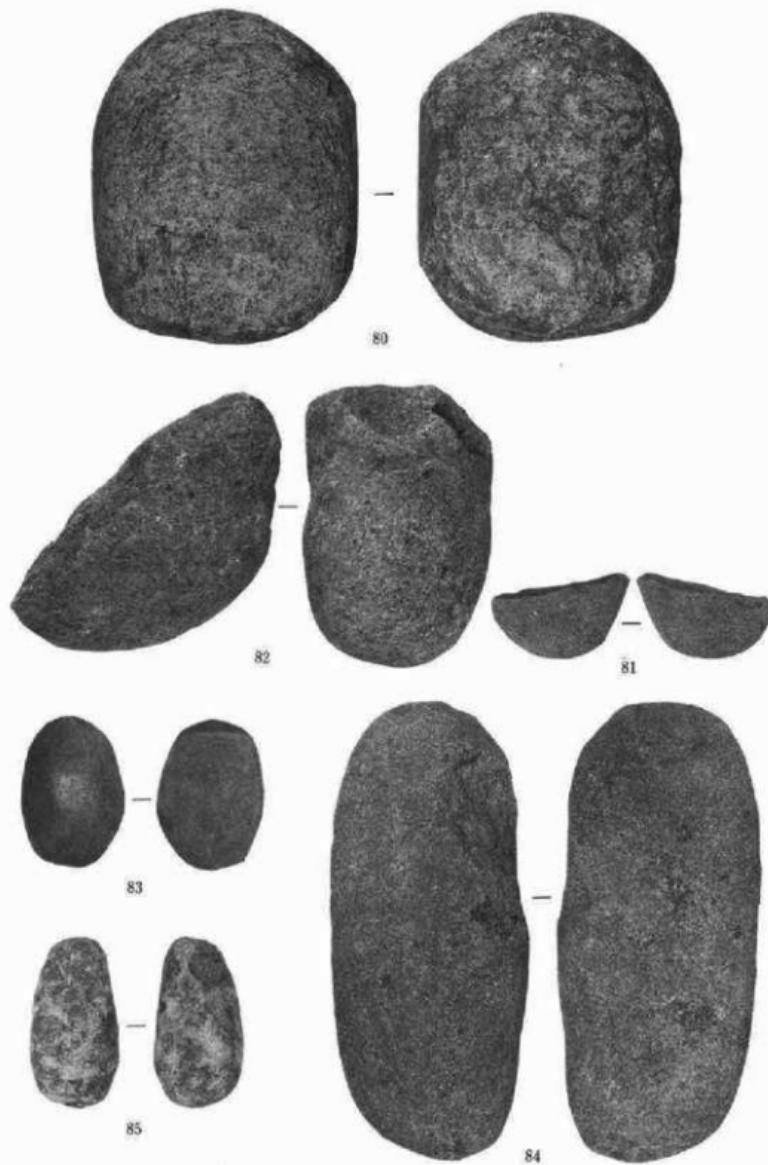
78



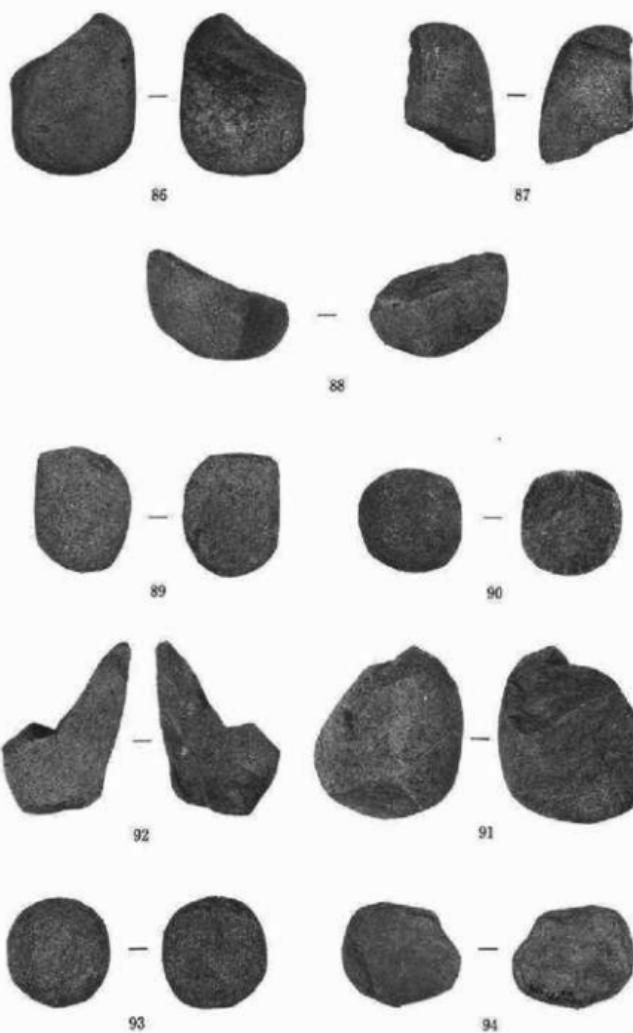
79



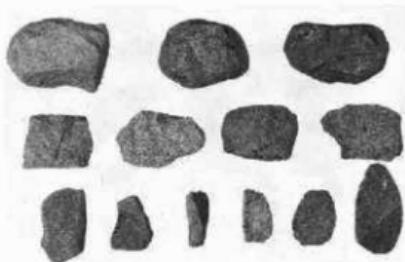
图版24 扁平小型利器（上段表面、下段背面）



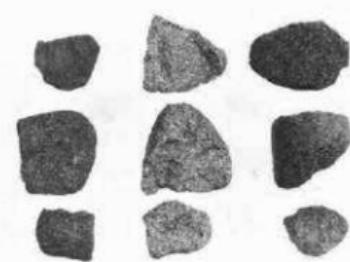
図版25 たたき石 (1)



図版26 たたき石 (2)



輝綠岩



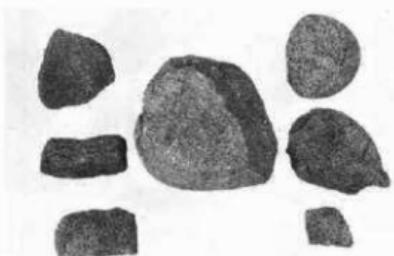
はんれい岩



結晶片岩



砂岩



礫質砂岩



チャート

図版27 石器片・石材

4. 土器

本遺跡で得た土器は、4,381点である。そのうち口縁部が364点、胴部が3,952点、底部が65点である。

しかしどとんどが搅乱した層から出土したもので、小破片が多く復元して全形が窺えるものは含まれてない。

口縁部および文様等の特徴から、型式判断の可能な資料は、型式毎に分類を行なった。

又無文の胴部、底部のように型式判断の困難なものは、資料に含まれる胎土・その他混入物の観察で分類を試みた。表6及び表7に示した通りである。

出土した資料は、大きく沖縄の土器と奄美系の土器とに分けられる。

沖縄の土器は、①伊波式土器 ②荻堂式土器 ③大山式土器 ④カヤウチバンタ式土器 ⑤室川式土器 ⑥室川上層式土器の6型式があり、奄美系の土器としては ⑦面繩東洞式・嘉徳I式土器の2型式が認められる。

表6 型式毎の土器一覧

型式	出土区		I 区			II 区			III 区		計
	層位	1層	2層	1層	2層	3層	遺構	盛土			
沖 縄 の 土 器	伊波式土器	19	7	7	0	13	0	45		91	
	荻堂式	30	4	3	1	3	3	117		161	
	大山式	0	0	3	0	3	0	31		37	
	カヤウチバンタ	6	8	0	0	0	0	10		24	
	室川式	1	0	0	0	2	0	15		18	
	室川上層式	3	1	0	0	0	0	19		20	
奄 美 の 土 器	面繩東洞式	0	0	0	0	4	0	1		5	
	嘉徳I式	0	0	0	0	3	0	2		5	
小計		59	20	13	1	28	3	240			
合計		79		45				240			364

以下土器について略述する。尚、分類は沖国大考古2号「室川貝塚発掘調査概報」¹¹、高宮廣衛氏「沖縄諸島における新石器時代の編年試案」¹²を参考とした。

(1) 伊波式土器

石川市伊波貝塚より出土の土器を標式とする。

一般に深鉢形で、口縁は外反し胴部がわずかに張る平底の土器である。口縁が開くために器の最大径は口縁にある。胎土には、石英、チャートなどを含む。

文様は胴上部及び口唇部に施される。文様は次の3種に大別できる。¹³

第1種 口縁部（上段）、および胴上部（下段）に水平方向に文様を施し、両者の間（中段）を無文とするグループ。

第2種 中段の空白部を、文様で埋めるグループで更に次の5種に細分できる。

I 斜沈線文、縱位沈線文で埋めるグループ

II 羽状文、綾杉文で埋めるグループ

III 上段の文様を省略し、口唇直下に直に中段、下段の文様を配すグループ

IV 銀巻文で埋めるグループ

V 斜行文で埋めるグループ

第3種 無文の伊波式土器

以上の基準でもって、本遺跡の伊波式土器を検討してみる。

第1種

中段を無文とするもので95～115に示した21点がこれに属する。

21点中、上段及び下段の文様を有するものは1点だけで、他の資料は上段か下段のいずれかを欠失する。

文様を見ると、疑似点刻文1点を含め、点刻文が19点で最も多く、連点文1点、短沈線文1点、長沈線文1点と続く。

95～111は、叉状工具を使用して、点刻文が2条1組あるいは、2組施されたものである。

口唇部を有するのは8点有り、その内104・106・107は、単範による刺突文が認められる。

112は、低平な山形口縁を有するもので、本種で唯一文様の全景が窺える資料である。

口唇には単範による短沈線文、口縁部は上段および下段にそれぞれ2組の連点文が施される。

施文は浅く、又上下間の文様帶の間隔が、幾分せまい感を受ける。

器面の調整には、撫での手法が用いられ、擦痕が覗られない。

焼成は普通、色調は暗褐色を呈す。

113は口縁の資料で、口径は18センチメートルを推算する。上段の文様は口唇から1センチメートル程の箇所から始まり、叉状工具による横走する2組の長沈線が施される。施文は深く、明瞭である。器面の調整、焼成は共に良好で、色調は赤褐色を呈す。

114は、短沈線文が施された資料である。

115は、山形口縁の頂に近い資料である。

口縁に沿い、単範による疑似点刻文が1組施されているが、文様は不規則で対にならない。又施文は強い力が加えられ、深いために間は双方から押上られるように盛り上がり凸帯状となる。器面には、石英、千枚岩の微粒が観られ、その保持も悪い。

第2種のI

中段を縱位か斜位の文様で埋めるもので、114～128に示した13点が得られた。

その内縱位沈線文が1点、斜位沈線文が12点である。13点は全て口唇と上段の文様帶の部分を欠失する。

下段の文様が認められるのも、わずかに5点だけである。

116～124は、3本あるいは4本の斜沈線を1組とした組帶文であろう。

116～120、122は下段の文様が認められる。116は、先端の鋭い単範で疑似点刻文を、後者2点には、1条の刺突文が施される。119・121・123は・組帶文の内をさらに細沈線文で密に埋めている。

127は、単範の斜位点刻文が2条認められる。比較的厚い土器で口唇で9ミリメートルを測る。焼成は良好。器面の調整も擦痕が認められず良好。

第2種のII

中段を綾杉文、羽状文で埋めるもので129～132で示した4点が得られた。

129は、中段の文様が残存する資料で、文様は横位の連点文を一条施し、その上下に斜線を描き、羽状文を構成する。器厚は5ミリメートルと薄い。焼成は不良で器面の保持は悪い。I区2層からの出土品である。

130は、低平な山形口縁の資料である。口唇の文様は山形頂部の左側のみに施され、単範の凹線文を一条施す。口縁部も単範の文様で、上段は3条の凹線文が施され、中段には同種文で、綾杉文が描れるが施文はラフである。

131は、中段の1部と下段の文様が残存する資料である。

中段に単範による羽状文を施し、下段に2条横位沈線文を施す。沈線は、いずれも深く明瞭である。器面は、撫での仕上げで擦痕もなく、滑らかである。

焼成良好で、色調は赤褐色を呈す。

132は、中段のみの資料である。破片の中央部に右傾する沈線が2組認められる。施文は浅く不明瞭である。

第2種のIII

上段の文様を省略するもので、133、144で示した2点だけである。

133は、口唇が丸味をおび、ほぼ直口になる口縁の資料である。文様は、細線による縱位の羽状文から始まる。下段の文様帶以下は、破損しているが列点文の一部が認められる。

焼成は、堅練で良好。赤褐色の色調を呈す。

134は、幾分反りぎみの口縁の資料で、口唇部は舌状を呈す。

文様は4本の右傾の斜線と、左傾の斜線が認められる。

第2種のIV

中段に鋸歯文を施すもので、135～137で示した3点である。

136、137は、口唇を含む口縁部の破片で、135は口唇を欠失する。いずれも上段は点刻文が施され、中段に沈線の鋸歯文を施す。

136の口唇には、単覽による刺突文、137は叉状工具を使用した点刻文が施されている。

以上の3点については文様の構図から観ると、荻堂式に含まれるか判断に迷ったが、施文の特徴から本項に含めた。

第2種のV

文様の中段を斜位の押し引き文で埋めるもので、138の1例だけである。

138は、中段の文様帶のみが残存する資料である。

文様は、単覽による沈線を縱位に2本、その下端部には同種文の斜沈線が2本認められ、右上部はかなり空白部分を造り出している。

器面の調整は撫でが徹底され焼成良好。赤褐色を呈す。

第3種

無文の伊波式土器である。139に示した1点が得られた

本資料は、やや反りぎみの口唇の破片で、口唇部は丸味をおびている。器面は表裏とも撫で手法でまとめられ滑らかである。

胎土には石英やチャートの微砂粒が含まれ、色調は赤褐色を呈する。焼成は良好で堅緻な土器である。

(2) 荻堂式土器

中城村荻堂貝塚より出土の土器を、標式とする。

一般に深鉢形で、口縁部が内側に傾斜し絞まる傾向があり、口径は胴の最大径と同じか、幾分小さい平底器形の土器である。口縁の山形突起が外面で瘤状に膨らむのも特徴の一つである。

胎土には、石英、チャートなどを含む。

文様は、伊波式同様、胴上部、口唇に限られる。

胴上部に施された文様は、次の5種に大別される。

第1種、横位の沈線文、連点文と鋸歯文を組み合わせるもの。鋸歯文の位置で、つぎの三つに細分できる。

- I. 文様帶の中間のみに鋸歯文を施すもの。
- II. 文様帶の中央部及び最下段に鋸歯文を施すもの。
- III. 文様帶の最下段のみに鋸歯文を施すもの。

第2種、横走する文様の最下段に、斜沈線又は、斜め方向の刺突文を施すもの。

第3種、口縁の文様が水平方向の平行線文や連続点文などに終始するもの。

第4種、凸帯文を貼付するもの。

第5種、文様を有しないもの。

以上の基準で、本遺跡の茨堂式土器を検討してみる。

第1種

140～178で示した38点は、横位の連点文、沈線文に鋸歯文を組み合わせるものである。その内、鋸歯文の位置が判断できたのは僅かに5点である。残りは鋸歯文は認められるものの、小片のため他の文様との関係が不明確である。I、IIの資料は得られてない。

140～144は、文様帶の最下段のみに鋸歯文を施すもので、いずれも単範、叉状工具による横位文の下に鋸歯文が施される。

140は、今回の調査で得た資料の中で、比較的大型口縁破片である。図上での復元を試みた。口径は15センチメートルと推定され、山形口縁をなし、山形頂部には瘤状突起を有する。

施文は、幅広の単範が使用され、先ず上段に6条の押し引き文を施し、下段には沈線のラフな鋸歯文を描いている。

押し引き文は、口唇に1条、瘤状突起外面にも1条認められ、突起の直下には、縱位区画文3条が施される。左端の鋸歯文直下には、焼成後に外面から径7ミリメートル程の小孔が穿たれている。

焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。

第1種で細分できないもの

鋸歯文は確認できるが、細片のため横位文との組み合わせが不明確なもので、146～178に示した34点である。

文様を施すのに使用した工具で観ると、145～169は叉状工具、170～178は単範（173、178は半截竹管）が使用されている。

第3種

文様帶の最下段に斜沈線等を施すもので179～182に示した4点である。

179は、胴部の資料で、文様は横位の2組の点刻文が施され最下段には、叉状工具による斜線が2組観られる。

180は、口縁の資料で幅広の単範使用の押し引き文を2条施し、最下段にはやはり、単範の斜線が施されている。

181も胴部の資料で、最下段のみが残存する。幅広の単範が使用されたラフな斜線が認められる。

182は、口縁部の資料である。文様は先ず横位の連点文を1組施し、次に左傾の連点文を施す。更に連点文が認められる。以下破損の為文様の展開が不明であるが、斜位の文様が加わる為、本項に含めた。

第5種

凸帯文を貼り付けたもので、183～186に示した4点である。

183は、口縁の資料である。口唇の下方約1センチメートルの箇所に断面が方形の凸帯を貼り付け、この上下に連点文が1組づつ施されるが、連点文は押し引きに強弱があり、拓影では点刻文に見える。赤褐色を呈し焼成は良くない。

184は、口縁を欠失する胴部資料である。断面が方形の凸帯を貼り付け、その上面と直下に押引き文が4条認められるが、以下破損の為不明である。

色調は、黒褐色で、焼成は不良。

185は、口唇下約1センチメートルの箇所に断面が三角の凸帯を貼り付けただけで、他の文様は認められない。表裏面には横位の擦痕が残存し、赤褐色を呈する。焼成の良い土器である。

186は、断面が方形の凸帯が貼付され、その上面には刻文が施される。凸帯の上方は押引き文が認められ、下方は鋸齒状文が施される、茶褐色で焼成良好。

種不明の荻堂式土器

187から213で示した28点は、文様の特徴から荻堂式に属するものではあるが、小破片のため、文様の全体的状況がわからず、これまで述べてきた5種のいずれかに属するのか判断できない。

口縁部の形態で観ると、山形頂部が①肥厚するもの、②肥厚しないものとに大別できる。

① 山形頂部が肥厚するもの (187～194)

山形頂部が肥厚を見せるのは、178～194の7点で、これは肥厚の形態から更に下記の2種に細分される。

◎山形頂部の肥厚が発達し、瘤状となるもの。(187、188、189、192、193) その内188、189、193の3点は、肥厚した瘤面に縦位の凹面を形成する。187は、V字状の肥厚を見せる。

◎山形頂部の肥厚が微弱なもの。(190、191)

191は、口唇に1条の列点文、頂部から2条の区画文が施される。区画文からは口唇に沿い左右に1条の列点が平行する。

② 山形頂部が肥厚しないもの (195～201)

山形頂部が肥厚しないものは6点で、これは頂部の直下に区画文を有するもの、区画文を有しないものの2種に大別できる。

区画文を有するものは、195、196、198の3点で、いずれも横位文を頂部直下の沈線で区画する。

区画文を有しないものは、197、199、200、201である。水平方向の連点、押し引き文に終始する。

202～213は、口唇を欠失する胴上部の資料である。単範を使用した荻堂式の特徴の横位文が施される。

(3) 大山式土器

宜野湾市大山の大山貝塚出土の土器を標式とするもので、本遺跡では31個が得られた。口縁部に施された文様から、次の5種に大別される。

- 第1種 横捺刻文や横位押引文に終始するもの。
- 第2種 第1種の文様に、横位沈線文を加えたもの
- 第3種 第1種の文様に、斜行文を加えたもの
- 第4種 第1種の文様に、羽状文や綾杉文を加えたもの
- 第5種 凸帶文を貼り付けたもの

以上の分類基準で、本遺跡の大山式土器を検討してみる。

第1種

横捺刻文や、横位押引き文に終始するもので、215～222に示した8点が得られた。

215・216・220・221の4点は、横捺刻文が施されるものでいずれも口縁部の資料である。4点ともほぼ直口の器形になると思われる。

216は、口唇部が幅広く肥厚を呈している。横捺刻文は、215が3条、216が4条施される。残り2点は、文様中途で破損しているが、これらも3～4条が施されたものと思われる。色調は、215、216が茶褐色、220が暗褐色、221は赤褐色を呈する。

焼成はいずれも良好である。

217・218・219・222に示した4点は押引き文が施されるもので、217・218・219は口縁部、222は胸部の資料である。

口縁資料はいずれも直口で、217と219は若干の比厚を呈する。218は器厚が1.3センチメートルを測る重量感のある土器である。押引き文の条数の確かなものは、218の1点で3条認められる。

他の3点は、文様帶中途で破損し不明、また押引きは、217・222の間隔が長いものと、219のような間隔が短いものの2種が認められる。

色調について観ると、217・219・222は暗褐色、218は赤褐色で、焼成は222は不良、他の3点は良好の部類に属する。

第3種

横捺刻文に斜行文を加えたもので、214・223の2点を得た。

214は、口縁部が大きく外反する器型になる資料である。文様は1条の横捺刻文をめぐらし、次に左側の押引き文を密に施す以下破損の為不明である。

表裏ともにナデ調整が行われ、擦痕は認められない。

色調は赤褐色で、焼成は良好。

223は、直口の口縁資料である。文様は先ず、横捺刻文を1条施し、次に右側の細線を等間隔に描き、そして幅3ミリメートル程の凹線を施す。さらに細線の一端が廢れるが以下欠失のため、文様の全形は不明、暗褐色で焼成の良い土器である。

第5種

凸帯文を貼付けたもので、224～229の6点が得られた。いずれも胸部の資料である。

224～226の3点は、断面が方形の凸帯を貼付けた資料で、224は凸帯の上下に押引き文を1条ずつ施す。

225は、凸帯上面に押引き文を施す。

凸帯の上方に1条、下方に2条の押引き文が認められる。

226も凸帯上面に、押引き文が認められる。3点とも色調は暗褐色で、焼成は普通。

227～229の3点は、断面が3角状の凸帯が貼り付けられたものである。いずれも凸帯には、刻文が施されている。227は凸帯下方にも刻文が認められる。

3点とも焼成の良い土器で、色調は赤褐色を呈す。

(4) カヤウチパンタ式土器

一般に口縁が花鉢状に肥厚する深鉢形土器で、沖縄市室川貝塚でヴァリエーションのあることがわかった。⁶⁶ 本遺跡でも、大山期、室川上層期に属するのが得られた。

230・231・232に示した3点が、大山期に属する口縁資料である。

230・232は、3センチメートル前後の幅広い肥厚帯を有するもので、いずれも胎土は粗で器表面には、磁鉄鉱石英の混入が観られ器面の保持は悪い。色調は茶褐色を呈す。

231は、肥厚の幅が1センチメートルと短く、破損した断面からは大量の石英粒が観られる。

器面は表裏ともナデ仕上げだが、横線上の擦痕は消えきってない。色調は黒褐色を呈す。

233～235は泥胎質で器表面が、アバタ状を呈する室川上層期のものである。

233、234は、同一個体で肥厚帯の中央に幅広の窓で押引き文を1条施す。

肥厚帯直下に斜め沈線文が認められるが、破損の為、全景は不明

(5) 室川式土器

沖縄市室川貝塚出土の土器を、標式とする。⁶⁷

一般に平口縁の、径の小さい平底の深鉢形の土器。口縁部を肥厚又は疑似肥厚させ、口唇部を誇張するのが特徴である。胎土は、石英の他に石灰質砂粒や貝片が観られるものもある。

本遺跡では、19点を得た。口縁の形態から次の3つに大別できる。

① 口唇が丸味を帯びるもの 236、241

236は、口唇部だけの小片で器面に石英、磁鐵鉱が認められる。

241は、口縁で僅かに肥厚するが、焼成が悪く剥げ落ちる。断面には石灰質の砂粒が認められる。暗褐色の色調を呈す。

② 口唇が幅広く外傾するもの 239、240

145は、口唇が丸味ある肥厚形態に属し、外傾する資料である。器面には石英の粗粒3ミリメートル前後の石灰質の粗粒も認められ、ザラッとした手触り。暗褐色の色調で、焼成は良好。

143は、口唇が鋭角に曲折し、三角状の肥厚を観せる。

③ 断面が三角形を呈するもの 237、238

237は、口唇下に断面三角形の裾広の凸帯を有する。肥厚上下面に横捺刻文が施される。

238は、口唇の右端に細い点刻文が施される。いずれも暗褐色を呈し、焼成は良好。

(6) 室川上層式土器

本型式も、室川貝塚出土の土器を標式とする。^{※6}

器面がアバタ状を呈し、バラエティーに富む口縁の形態に特徴を有する。本遺跡では、20点得られた。

242は、丸味のある幅広の口唇を有し、頸部から口唇にかけて大きく外反する資料である口唇に限り、深い1条の押引き文を施す。焼成は良好で黄橙の色調を呈す。

243は、口縁の断面が三角状に肥厚し、器面のアバタ状が最も著しい。肥厚帯の上下にそれぞれ1条の押引き文を施す。下段は特に深く施される。焼成は悪い。

244、247は、口縁の断面が台形状に大きく肥厚する。244は、肥厚帯が0.8センチメートルを測る。247は、肥厚帯の中央に押引き文が深く1条施される。

245、246は、口縁の外側が特に丸味をおびて脹む。

244は、押引き文が認められる。焼成は悪く器表面が剥げおちる。246は無文で、焼成は良好で、色調は黄橙を呈する。

(7) 奄美の土器

奄美で型式設定されたものを、ここで一括して扱った。249～258に示した10点が得られた。

これらは、石英、チャートの微砂粒を含み、色調は赤褐色や暗褐色を呈す。いずれもナデの調整が行われており、察痕の残存が認められるが焼成良好である。

1,249・252・254は、斜位、横位に爪形の文様が施された。面繩東洞式か、嘉徳I式Bのいずれかに属する資料。小破片の為明らかではない。

2,253・255～257の4点は、斜位・横位の爪形文の間に沈線が加わり、嘉徳I式Aに属する。

3,260は、斜線の間に刺突文が施される。同種工具で口唇にも刺突文が施される。嘉徳I式土器である。

(8) 無文胴部について

今回の調査では、無文の胴部破片が4,027点出土した。

これらは口縁部や、有文胴部との接合が不可能なもので、前記のいずれの型式に属するのか不明のものである。

本項ではこれらの胎土に含まれる混入物を、下記の7種に分類し、型式推定を試みた。

A. 石英・チャートの微砂粒を含むもの 伊波式、荻堂式、東洞式、嘉徳I式

B. 石英・チャートの粗粒を含むもの 伊波式、荻堂式

C. 石英・チャートの粗粒に、金雲母を含むもの 奄美系

D. 石英・チャートの粗粒に、少量の磁鐵鉱を含むもの 大山式、カヤウチパンタ式

表7 土器出土状況

混入物 及び部位	層位	出土区		II 区			III 区		計
		1層	2層	1層	2層	3層	遺構	盛土	
A	胴部	0	6	2	0	9	3	28	48
	底部	0	2	4	0	0	0	11	17
B	胴部	110	191	125	0	439	23	2,878	3,766
	底部	0	3	6	0	7	0	30	46
C	胴部	0	0	3	0	0	0	4	7
	底部	0	0	0	0	0	0	0	0
D	胴部	0	3	0	0	0	3	23	29
	底部	0	0	1	0	0	0	1	2
E	胴部	1	31	2	0	0	0	53	87
	底部	0	0	1	0	0	0	1	2
F	胴部	0	0	0	0	0	0	14	14
	底部	0	0	0	0	0	0	0	0
G	胴部	0	0	1	0	0	0	1	2
	底部	0	0	0	0	0	0	0	0
計		111	236	145	0	445	46	3,044	4,027
		347		636				3,044	

- | | |
|--------------------------|-------|
| E. 胎土が精選され、少量の石灰岩砂粒を含むもの | 室川上層式 |
| F. 石灰岩質の砂粒や、貝片を含むもの | 室川式 |
| G. 多量の粗粒石英と微量の千枚岩薄片を含むもの | 宇佐浜式 |

以上 7種の分類による出土状況を表 7 に示した。

各種の出土量について観ると、B タイプが 3,766 点が圧倒的に多く、次に E タイプ 87 点、A タイプ 48 点、D タイプ 29 点、F タイプ 14 点、C タイプ 7 点、G タイプ 2 点と続く。

以上の順位は、名型式毎の出土状況とほぼ一致している。

(9) 底部資料について

底部の資料は、65 点出土した。

全て平底に属し、丸底や尖底は得られなかった。底部の完全なものはなく、形状の明確なもの 14 点を 39 図に示した。又これらの底部資料は、その形状により下記した模式図のように大別できる。

1. 脊部へ直接的に移行するもの

261、263、265

底部模式圖



2. 脊部へ移行する立ち上がりが、緩やかなもの

266、267、268、269、270

271、272

3. 脊部へ移行する立ち上がりが、微弱なくびれを呈するもの

259、260、262、264

以上の 3 種である

無文洞部資料を分類した基準で、底部片についても分類を試みた。結果は、表 7 に示した通りである。

表に依ると、B タイプに属するのが 46 点で圧倒的に多く、次に A タイプに属するのが 17 点、D タイプ 2 点、E タイプ 2 点で、地に該当するものはなかった。

図示した 14 点について観ると、260、272 は A タイプ、259、261～264、266～268、270、271 の 9 点は B タイプ、265 は E タイプ、269 は D タイプに属する。

底径可能なもの 8 点について調べてみた。その結果最小は 4 センチメートルで 1 点、最大は 10 センチメートルで 1 点が得られた。残り 6 点は、6 センチメートル以下である。

(10) 小 緒

奄美の 2 型式、沖縄の 6 型式を加えて計 8 型式 4,381 点の資料を得た

しかしそよそ 80 パーセントにあたる 3,464 点が、攪乱した層から得たもので、口縁資料に至っ

ては364点中313点が擾乱層から出土したものである。したがって、層位・レベルによる型式毎の出土傾向は、明確にできなかった。

出土した資料の型式を見ると、口縁資料の量も多いのが荻堂式である。全体の49パーセントの出土量を示し、次に伊波式20パーセントである。両者を併せると69パーセントを占める。胎土分類でも両型式に属すと思われるタイプA、及びBが、全体の95パーセントを占めている。

この傾向は、表9で示した高宮氏の暫定編年表の前IV期^{注9}の状況を示している。

注1 高宮廣衛ほか「沖国大考古」2号～6号 沖縄国際大学文学部考古学研究室

1978年・79年・80年・81年・82年・3月

注2 高宮廣衛 「沖縄諸島における新石器時代編年(試案)」南島考古6号

沖縄考古学会 1978年12月

注3 注1と同じ

注4 //

注5 //

注6 //

注7 //

注8 //

注9 注2と同じ

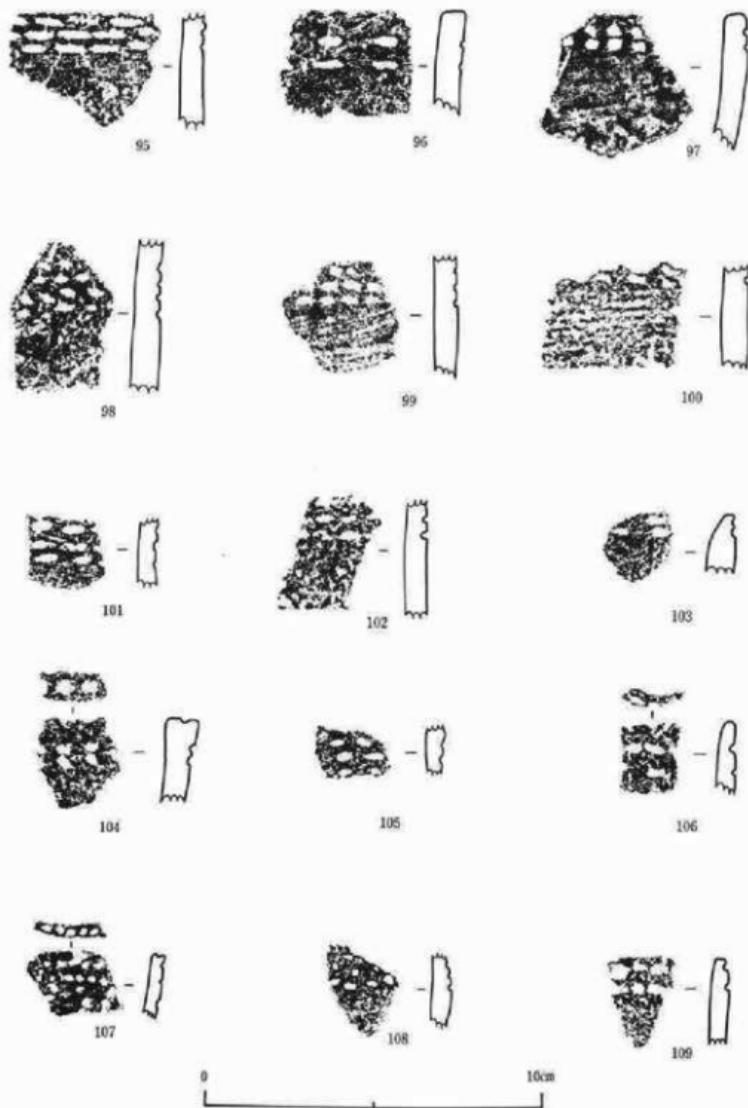
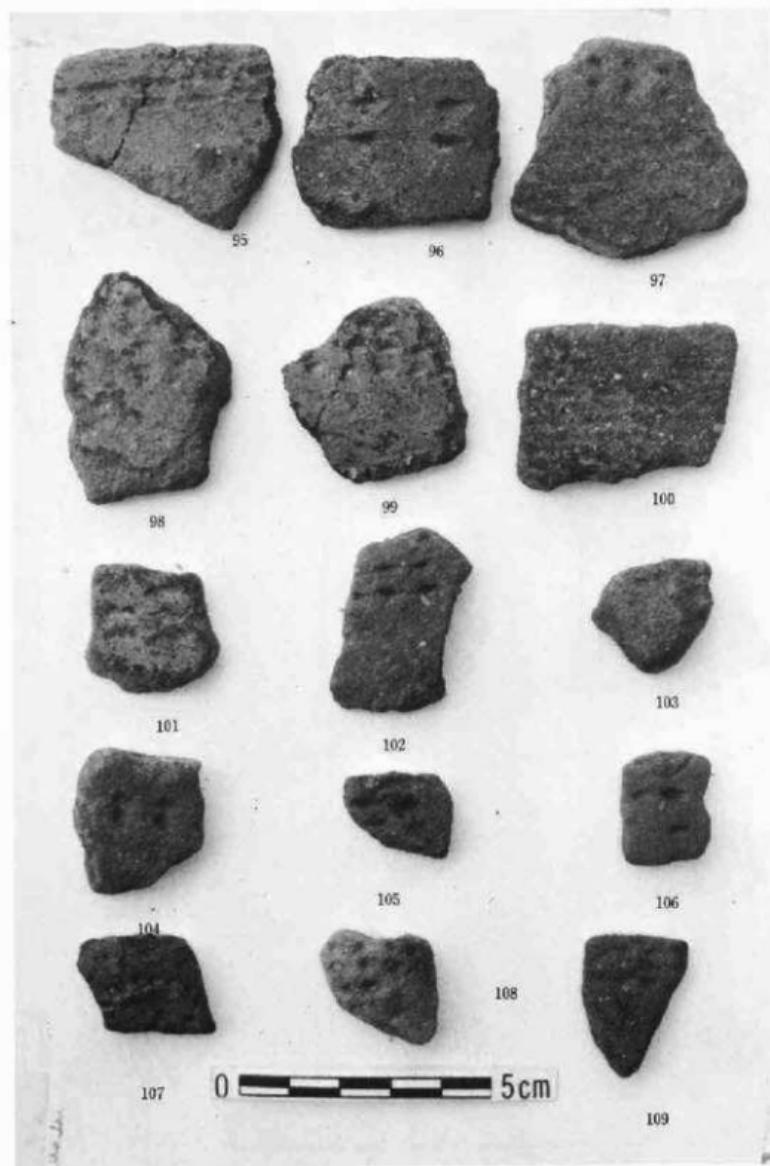


図28 伊波式土器



圖版28 伊波式土器

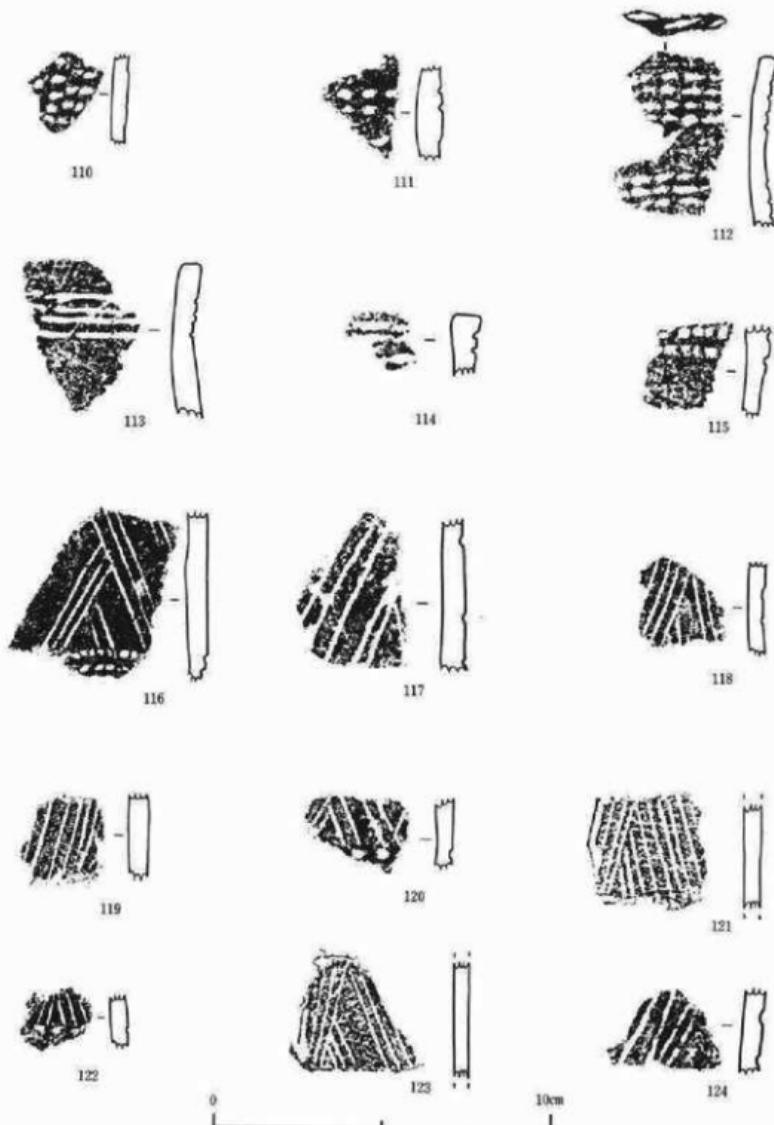
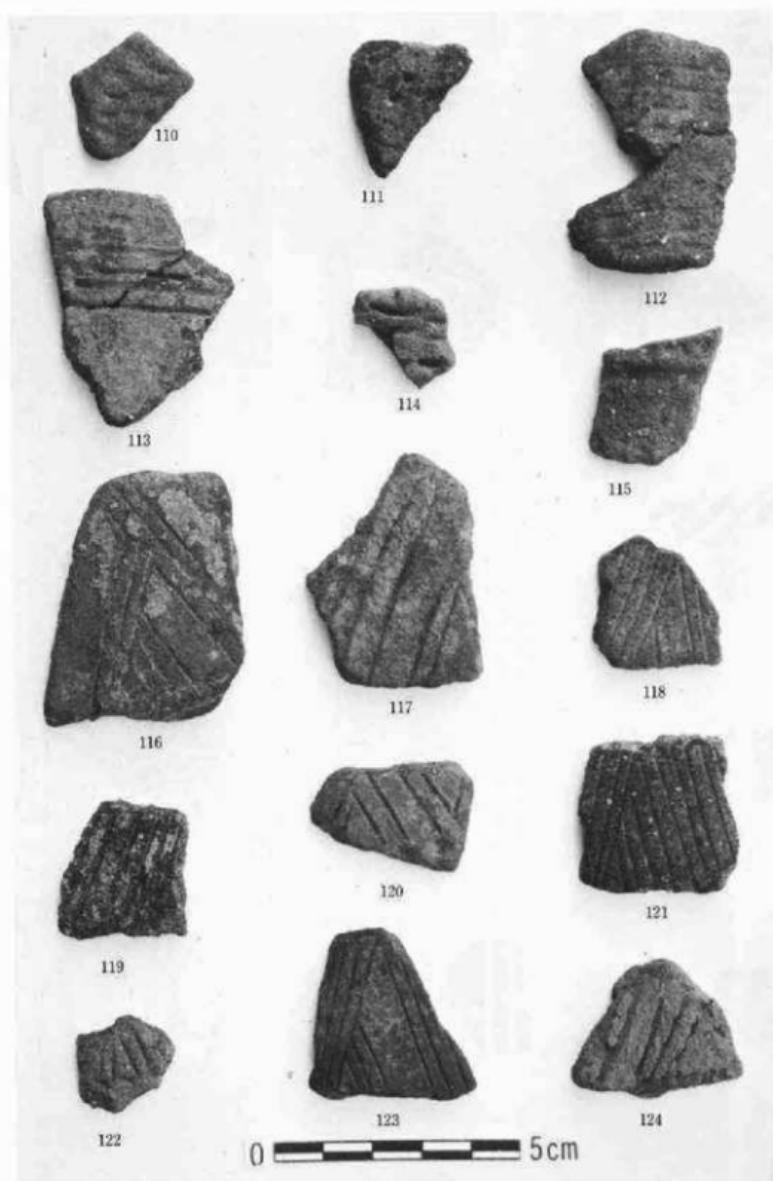


圖29 伊波式土器



图版29 伊波式土器

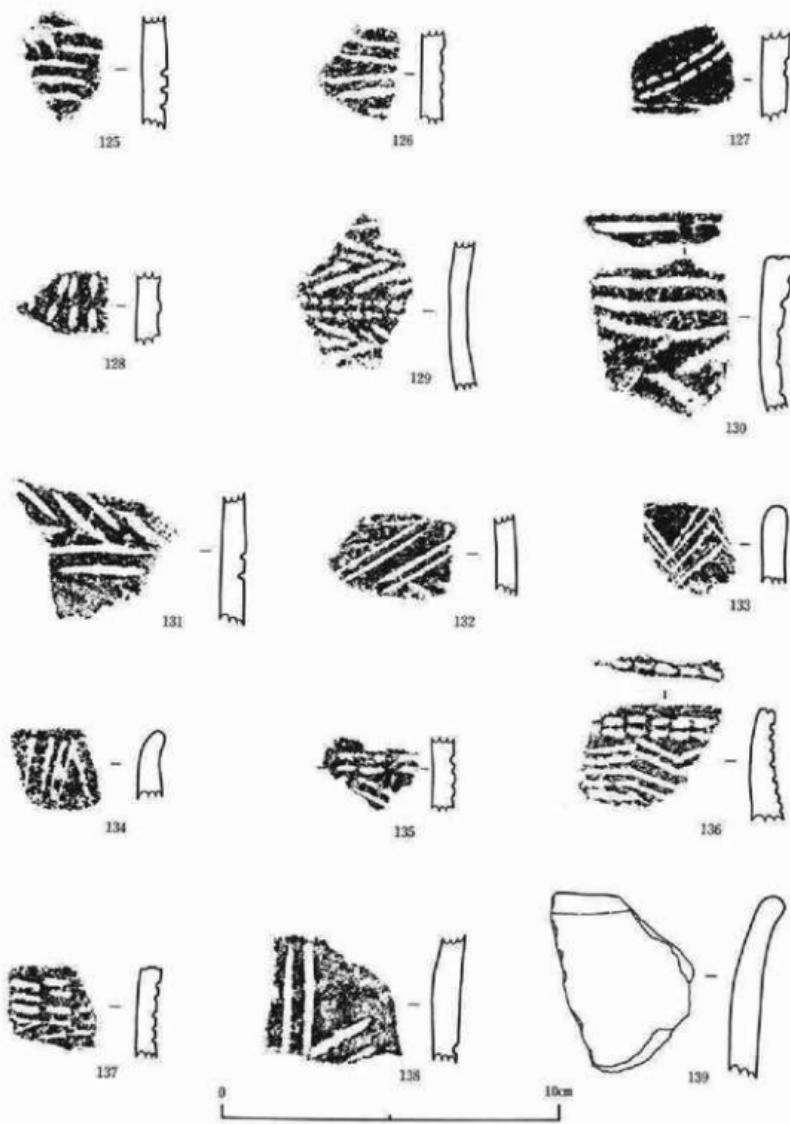
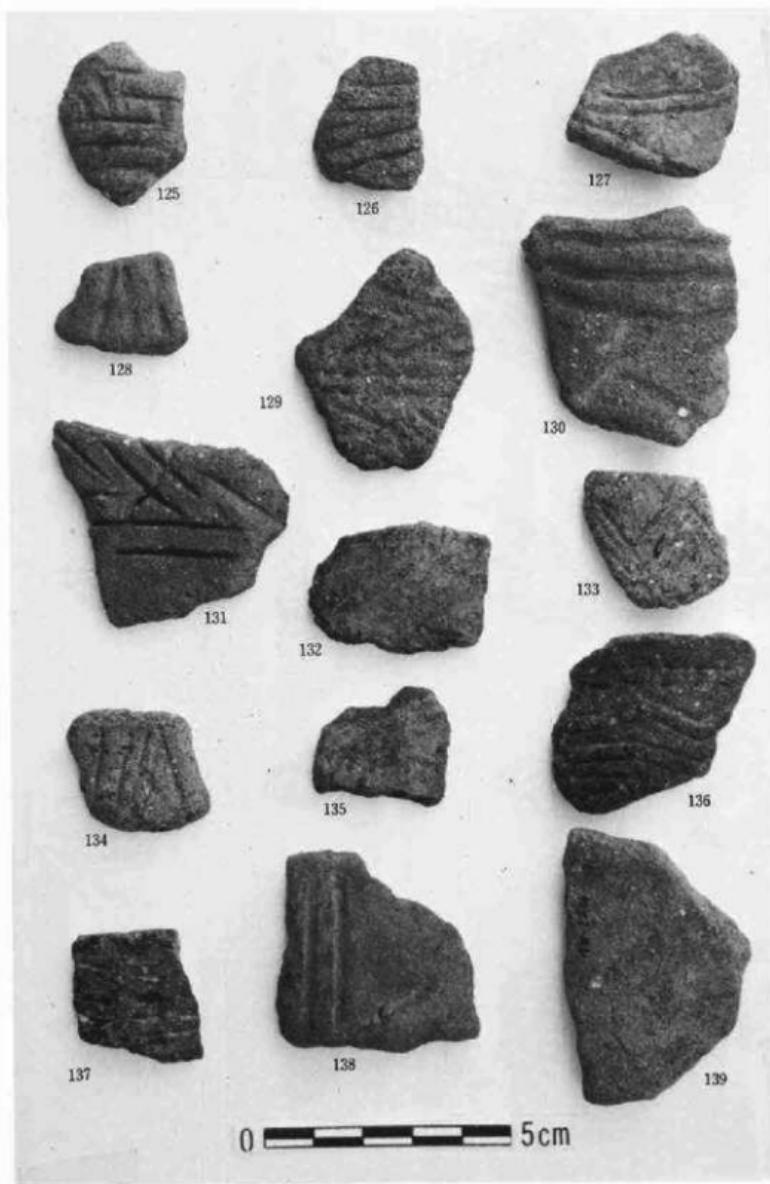


圖30 伊波式土器



图版30 伊波式土器

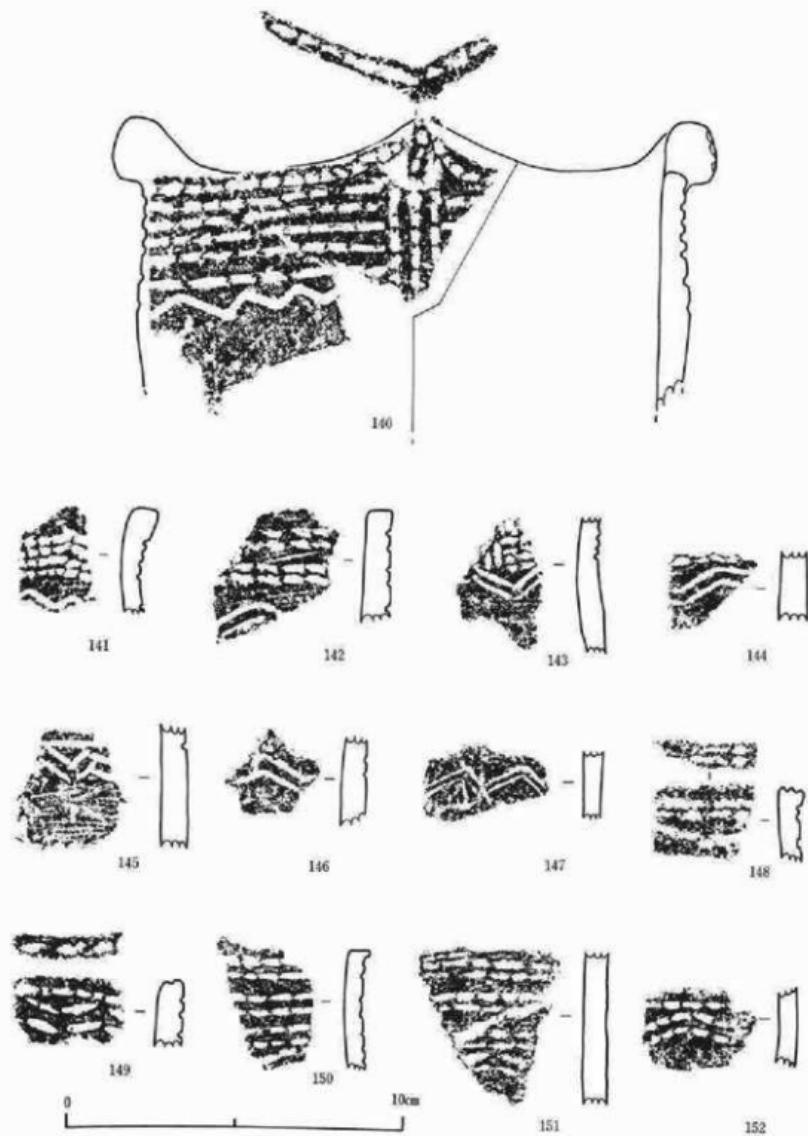
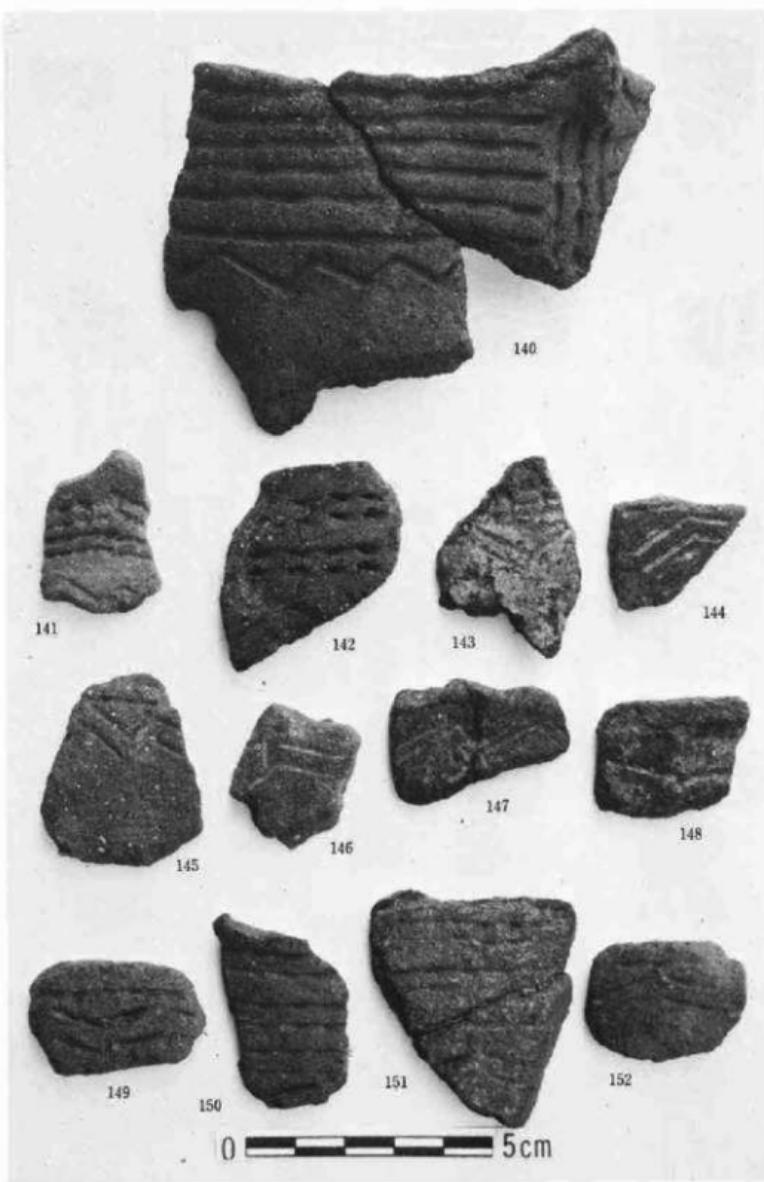


图31 荻堂式土器



图版31 荷堂式土器

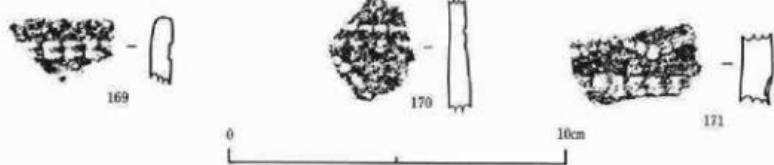
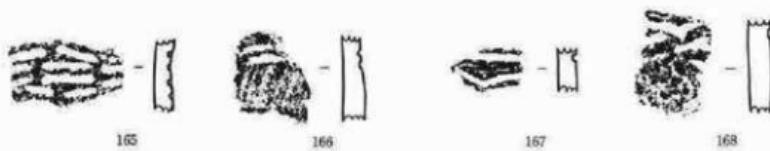
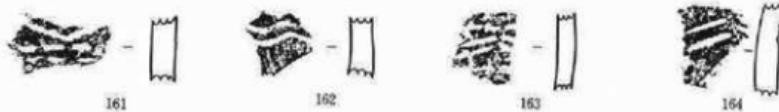
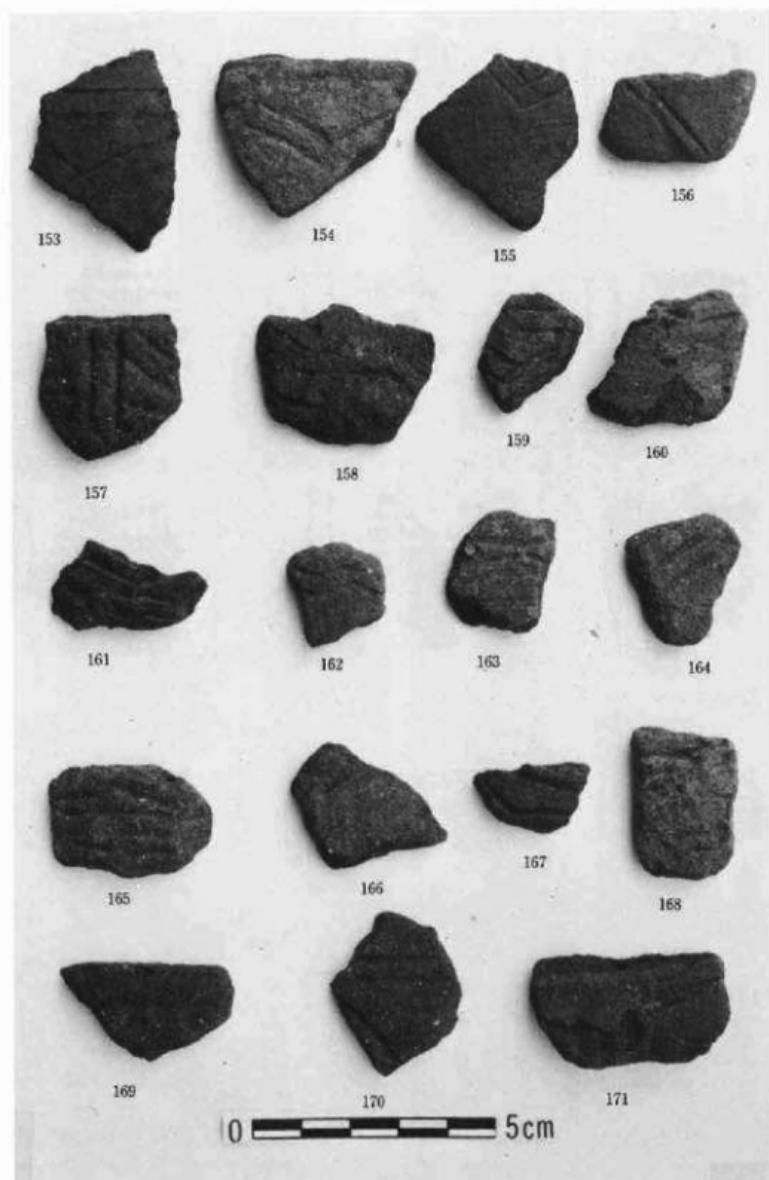


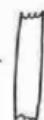
图32 荷堂式土器



図版32 荻堂式土器



172



173



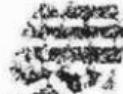
174



175



176



177



178



179



180



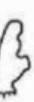
181



182



183



184



0



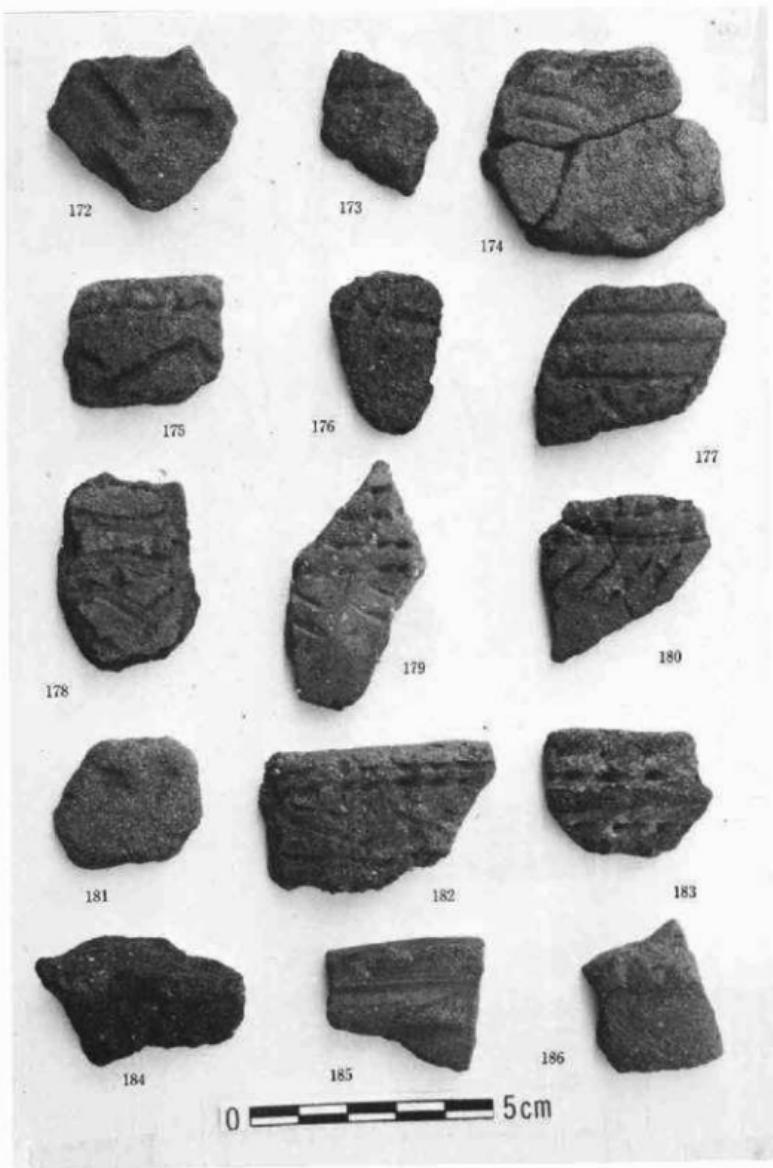
185



186



图33 荻堂式土器



图版33 荐堂式土器

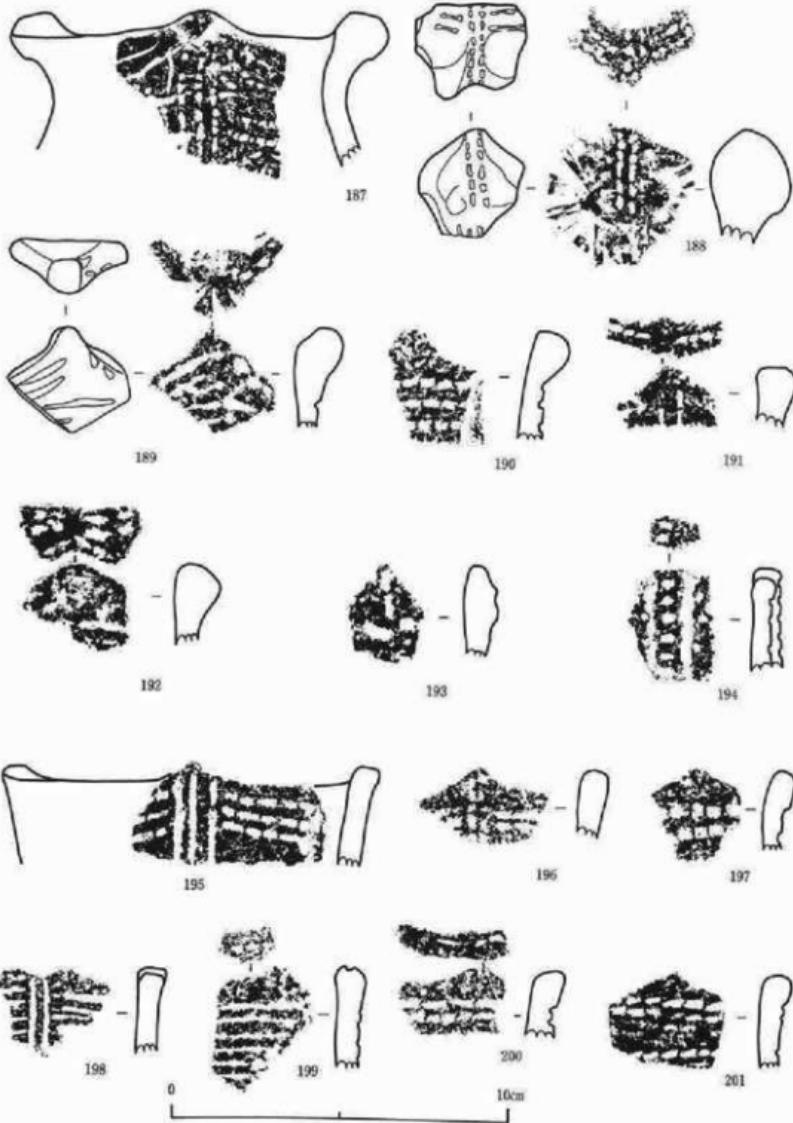
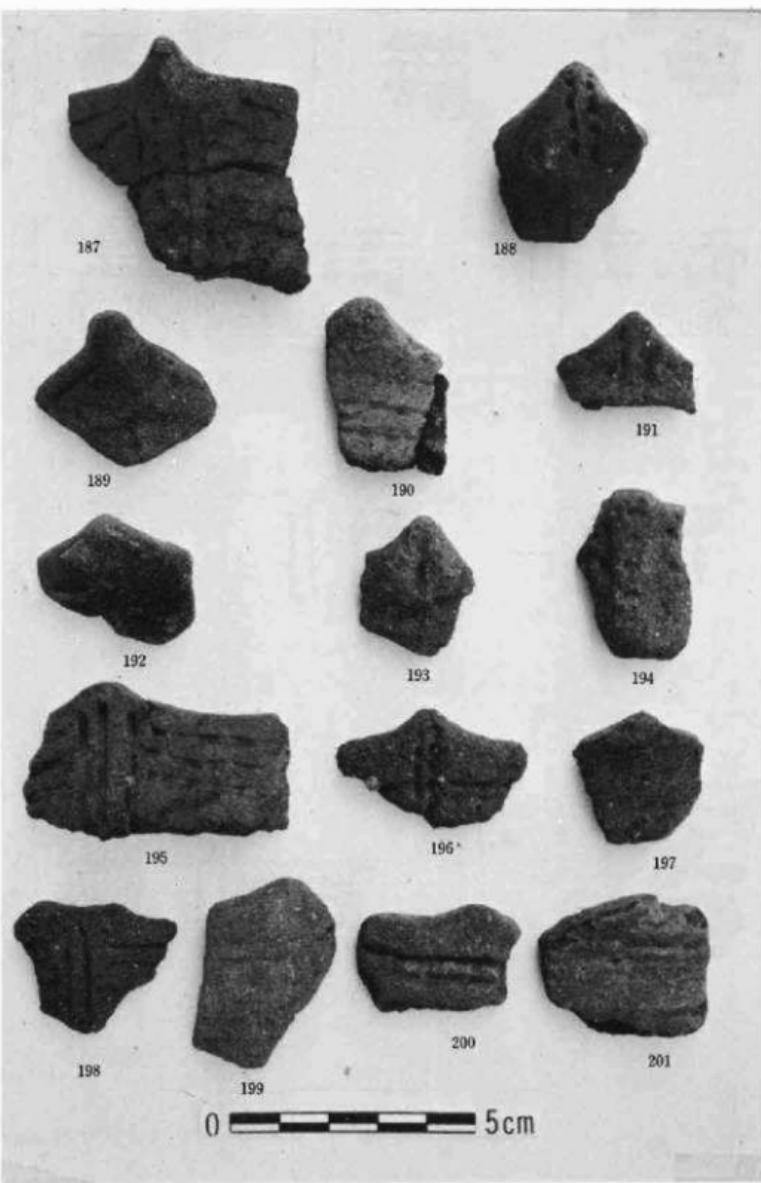
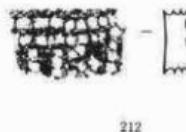
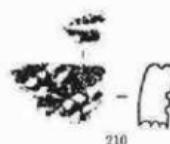
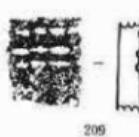
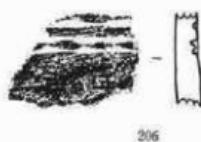


图34 荟堂式土器



图版34 荟堂式土器



0 10cm

图35 荐堂式土器



202



203



204



205



206



207



208



209



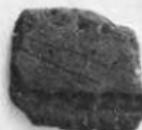
210



211



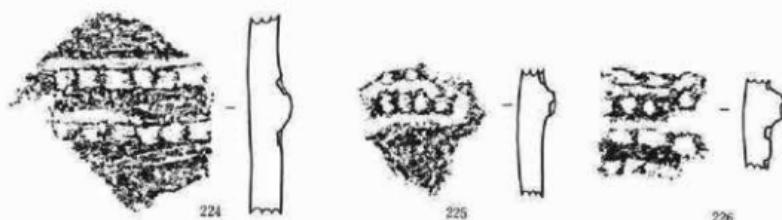
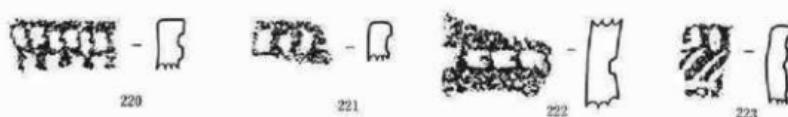
212



213

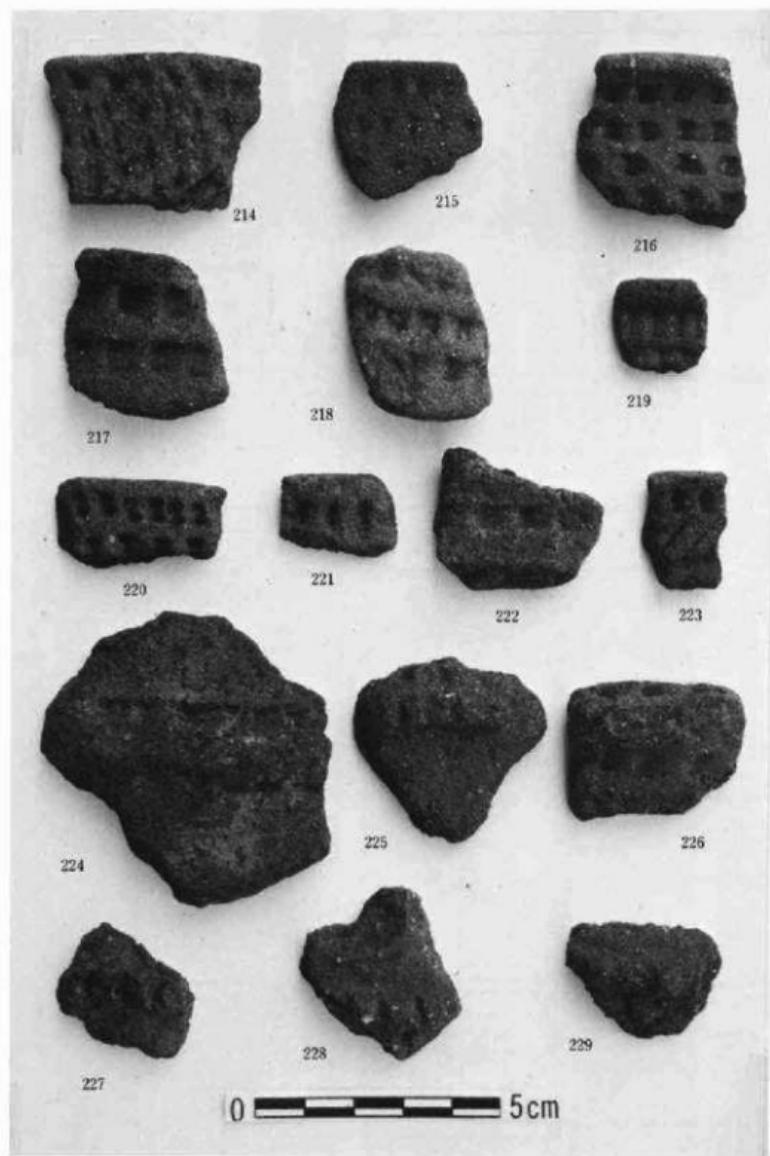


图版35 荟堂式土器

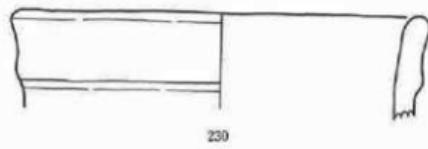


0 10cm

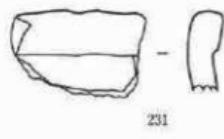
図36 大山式土器



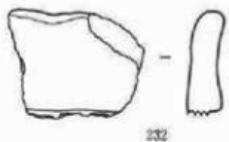
圖版36 大山式土器



230



231



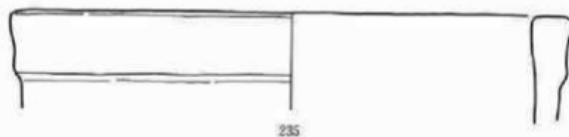
232



233



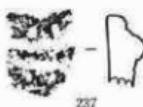
234



235



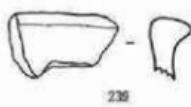
236



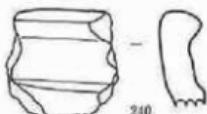
237



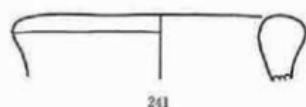
238



239



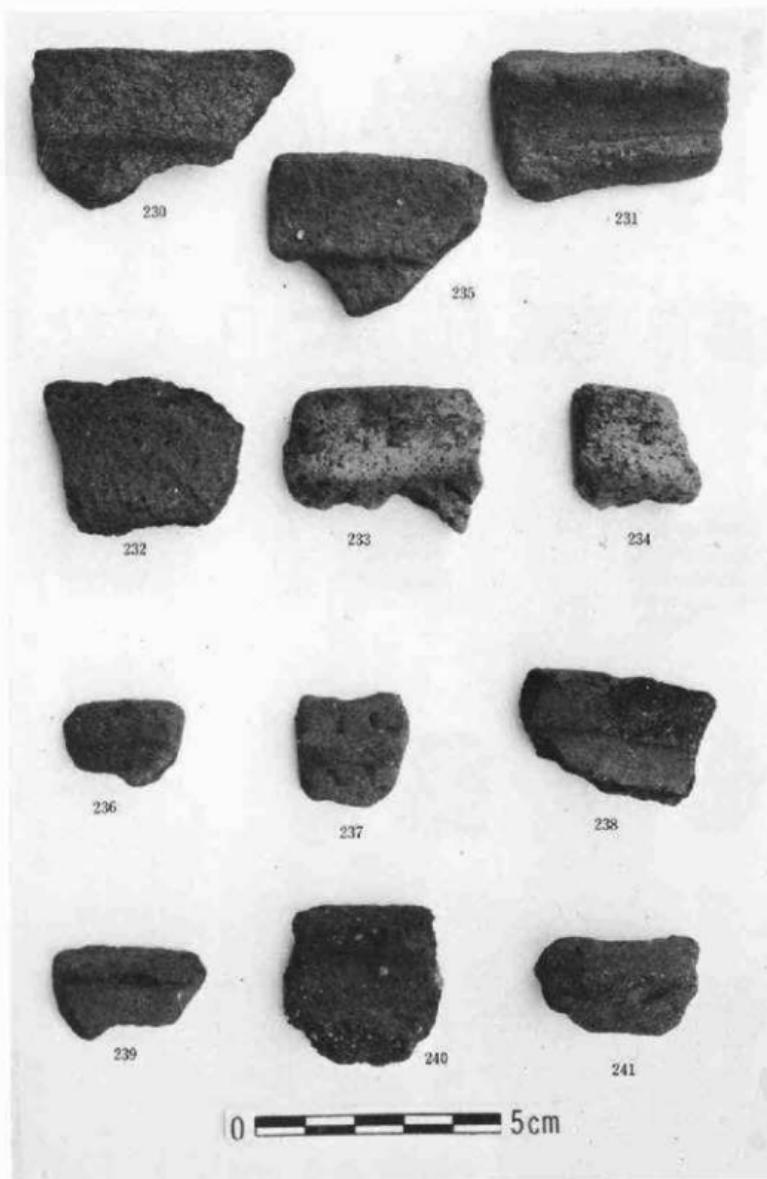
240



241

0 10cm

図37 カヤウチパンタ式 (230~235) 室川式土器 (236~241)



図版37 カヤウチパンタ式 (230~235)、室川式 (236~241)

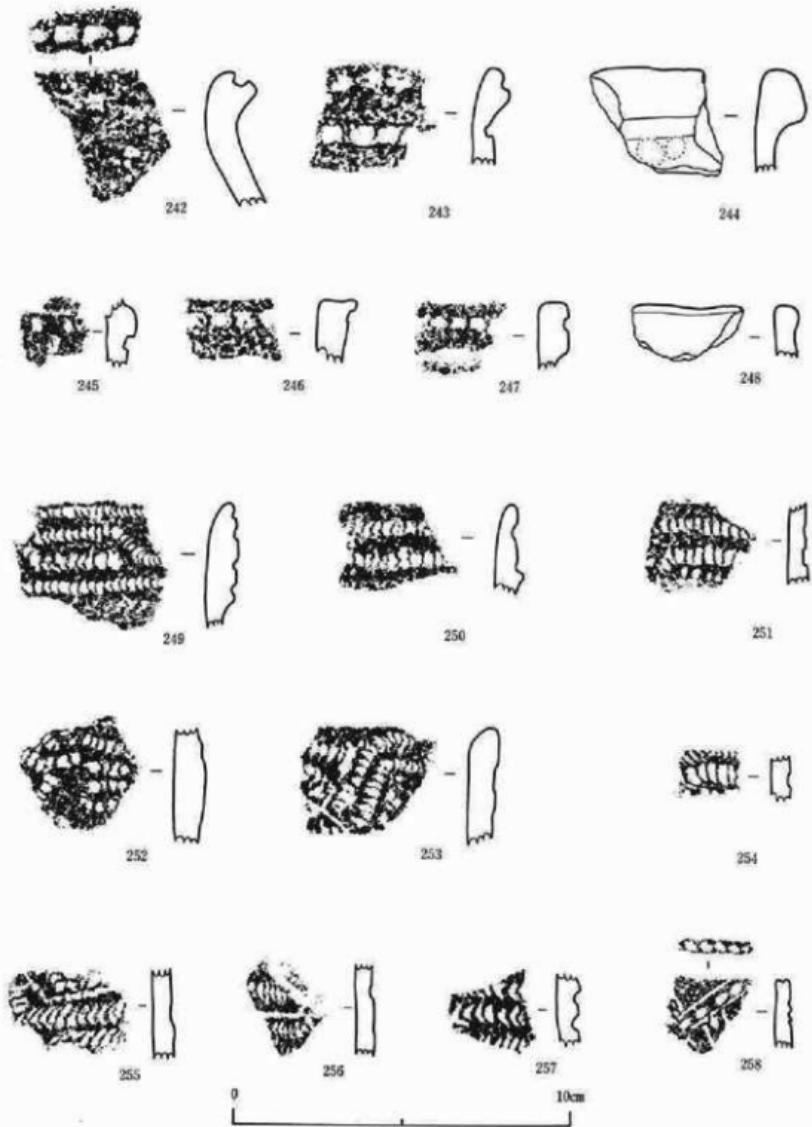
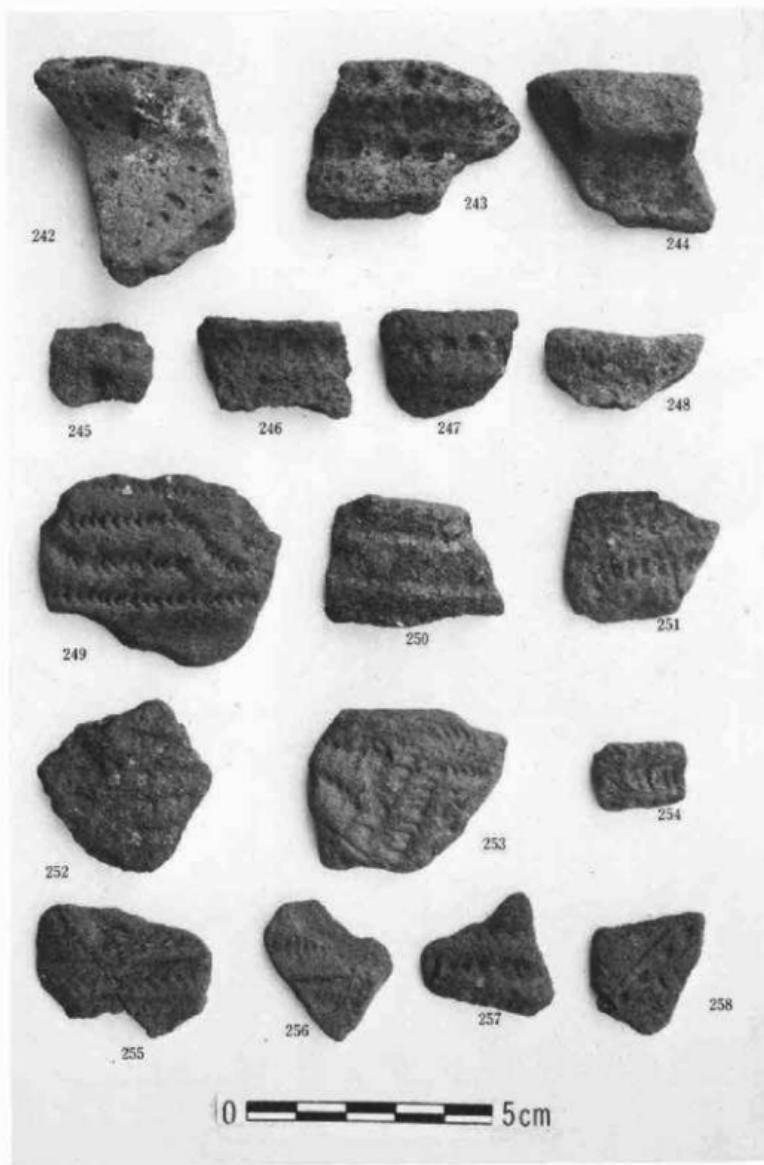


图38 室川上層式 (242~248) 奄美系土器 (248~257)



図版38 室川上層式 (242~248)、奄美の土器 (249~258)

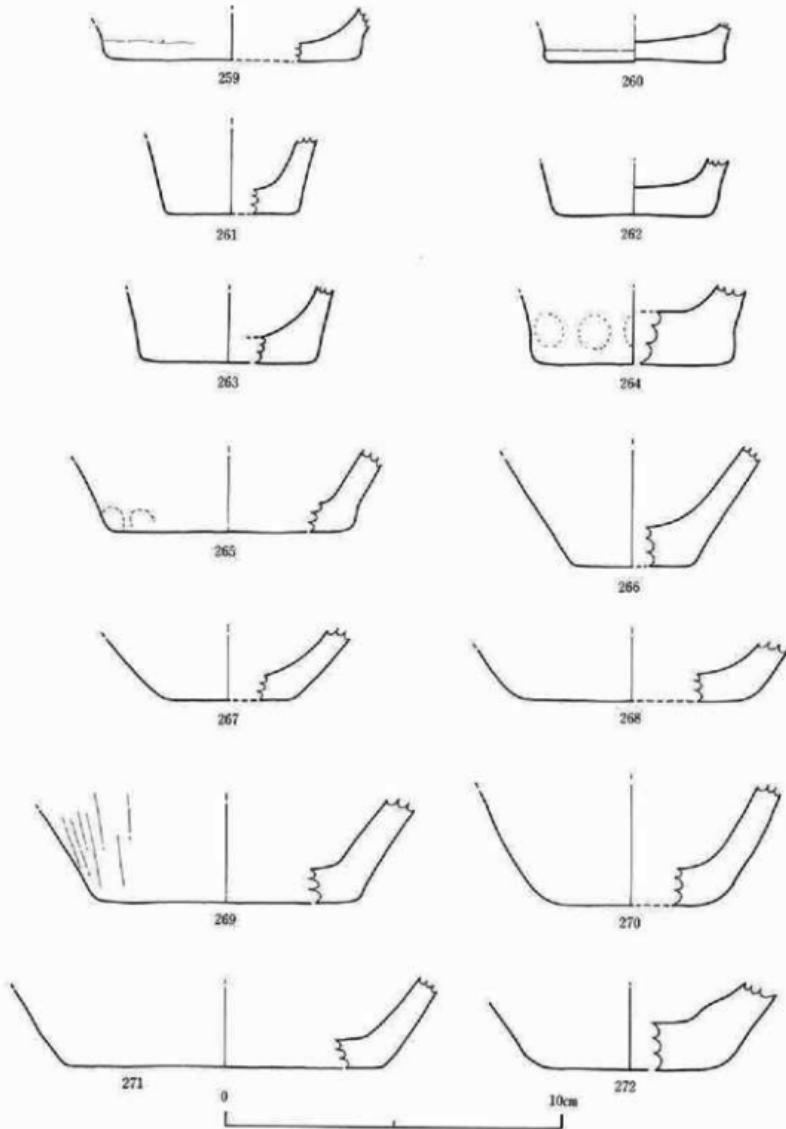
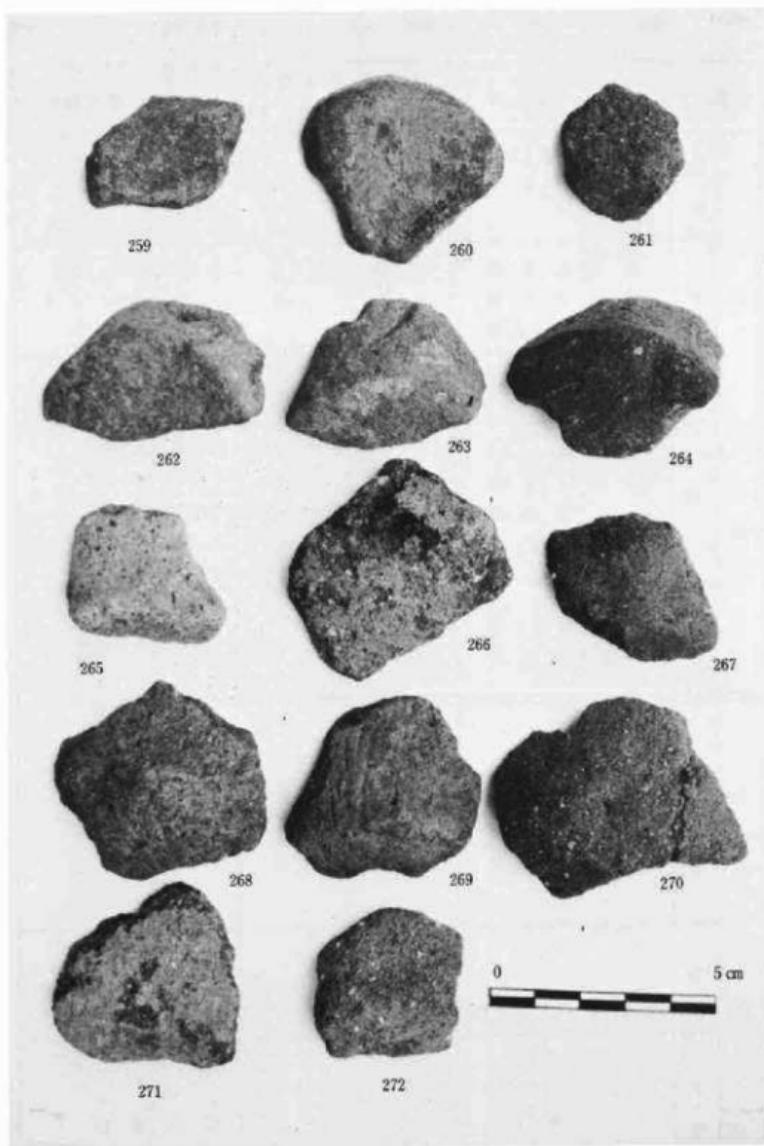


図39 底部



圖版39 土器底部

表8 沖縄諸島における新石器時代の編年（試案） 1978年 高宮廣衛氏作成

時期区分		土 器 型 式	沖縄諸島発見の 縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前 期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	} 爪形文土器	
	II	曾畠式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畠式土器 条痕文土器	曾畠式（渡具知東原） $4880 \pm 130y.$ B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） $3370 \pm 80y.$ B. P. 伊波式（室川） $3600 \pm 90y.$ B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる
後 期	I	?	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャングラー式土器		アカジャングラー式は成 川式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器

第4節 自然遺物

本遺跡から出土した自然遺物として、貝類遺存体と動物遺存体があげられる。以下これらの自然遺物について記述する。

1. 貝類遺存体

本遺跡から出土した貝は、32科57種で、1,085個体出土した。

出土した貝を地区・層位別に分類集計したのが表9である。

分類は科別にまとめ、棲息地を記号で示した。

計測については、完形貝や殻頂部を有する貝を1個体とした。

貝の殻長・殻高・重量を計測し、貝種別に最大貝・最小貝・平均的大きさの貝の計測値を示した。

貝はI区・II区・III区から出土した。

I区では1層から50個体、II区では1層・2層・遺構から出土しているが、出土量は少なくわずか10個体の出土である。III区盛土からの出土量は非常に多く、全出土量の約95%を占める。

表9 出土貝の地区別比較

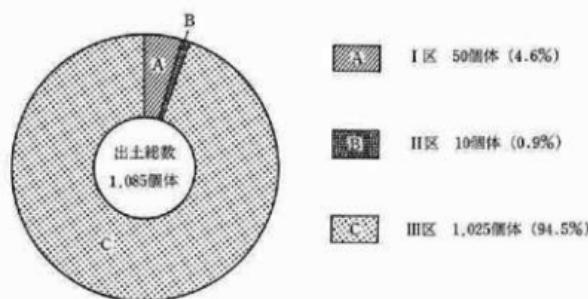


表10 地区・層位別主体貝の構成比較

主要貝	地区 層位 個体数	I区				II区				III区				計	
		1層 個体数	比率 %	1層 個体数	比率 %	2層 個体数	比率 %	遺構 個体数	比率 %	盛土 個体数	比率 %	個体数	比率 %		
アラスジケマンガイ		3	0.3			1	0.1			426	39.8	430	40.9		
カワニナ		36	3.4			2	0.2			340	31.8	378	34.8		
オキナワヤマタニシ		1	0.1	2	0.2					46	4.3	49	4.5		
出土個体数		50	4.7	6	0.6	3	0.3	1	0.1	1,010	94.4	1,070	100		

I区1層出土貝の最少推定個体数（以下、最少推定は省略）は50個体で、全出土量の4.6%である。そのうちカワニナが36個体の出土で、I区出土量の72%を占める。次いでアラスジケマンガイが3個体で、他は1個体ずつの出土である。

棲息地別にみると、淡水・河川の砂礫底に棲息している貝（カワニナ）が72%、浅海の砂底に棲息する貝が7個体で13%、陸産貝が2個体で4%の出土である。

II区出土の貝は10個体で、全出土量の1%弱と非常に少ない。

1層で6個体（0.5%）、2層で3個体（0.3%）、遺構から1個体（0.1%）の出土である。

1層出土貝6個体のうち、オキナワヤマタニシが2個体、アフリカマイマイが2個体、ツヤギセルが1個体と、陸産貝がほとんどで、II区1層出土貝の83%を占める。

2層出土の貝は3個体で、うちカワニナが2個体、アラスジケマンガイが1個体である。

遺構から、クモガイが1個体出土した。

III区出土の貝は最も多く1,010個体で、全出土量の約95%を占める。

アラスジケマンガイが426個体、カワニナが340個体と多量に出土しており、この2種の貝で、III区出土貝の約76%を占める。他にオキナワヤマタニシ（46個体）やツヤギセル（16個体）等の陸産貝が目立つ。

棲息地別に見ると、浅海の砂底に棲息する貝が451個体で44.7%、次いで淡水・河川（砂礫底）に棲息する貝が367個体で36.3%、陸産貝が79個体で、7.8%の出土である。

表11 貝殻の出土状況

科名 種名	種 名	地 区	I区		II区		III区		平均		棲 息 地
			1層	2層	遺 構	底 土	長 径	幅 径	厚 度	長 径	
1 ツタノハダイ科	オオベニコウガダイ						1				D - g
2 ニュウテンサザエ科	ショウセンサザエ/面	/1					2 5.5	6.9	682	5.3	F2/26-g-h
3 ノリ	ヤコウガイ						1				H - 深・穴
4 ノリ	カシギタ						6 2.2	1.8	3.9	1.7	E - g
5 アマオブネガイ科	ニシキアマオブネ						4 2.1	2.4	5.3	2.5	E - g
6 ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	1	2				46 2.9	2.7	3.2	1.8	A
7 ノリ	オオミオカタニシ						2 1.6	1.6	0.5	1.6	B
8 トゲカワニナ科	トゲタカワニナ						1 1.2	2.3	0.7		B
9 ノリ	タイソウカワニナ						1 1.2	3.3	1.6		B
10 カワニナ科	カワニナ	36		2			340 1.4	3.0	1.7	0.8	B - e
11 カワニナ科	イトカケヘナタリ						1 1.1	1.2			D - b
12 ノリ	ウリニア						10 1.4	3.5	3.2	0.8	D - a-b
13 オニゾンノガイ科	カヌリカニモリガ						1 1.3	3.2	1.5		D - g
14 ノリ	タツノミカニモリガ						5 1.5	2.8	2.3	1.5	E - g
15 ノリ	スイショウガ						7 2.0	6.1	27.2	3.3	G - d
16 ノリ	オハグロガイ						9 1.9	4.0	3.5	1.8	D - e
17 ノリ	マガキガイ	1					2.6	2.9	13.2		D - F20 - d
18 ノリ	スイジガイ		1	1							H - d
19 タマガイ科	ホウシュノタマガイ						1 2.0	2.2	2.6		E - d
20 タカラガイ科	ハナビクダカラガイ						2 2.0	2.6	3.3		D - g-h
21 ノリ	ヤクシマダカラガイ						3 2.1	3.2	25.6	1.9	E - g
22 ノリ	ホシダカラガイ						2 -	6.6	-		G-H-d-海上

社名	種類	地 区		I区		II区		III区		最 大 値		最 小 値		平 均 値		地 点 地
		1期	2期	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	
23 フジワガイ科	ホトトギス							2								G - 東
24 オルムシコブハイ科	イボヨウハイ	I						13 24 19								G - 西
25 イモガイ科	マダライモガイ							1 26 40	既石化							E - 西
26 *	ササガタイモガイ							1 13 25	既石化							D - 西
27 タグマキガイ科	マダラタグマキガイ							1 11 36 14								F10/50 - b
28 ホセムガイ科	ツバギセム	I	I					16 07 28 05	05 23	03 06	25~26	04~05				A
29 *	リュウキウガムガイ							1 08 18 01								A
30 コナマイマイ科	オオカサトイマイ							2 15 06 02	12 05	01						A
31 オナジマイマイ科	イトマンツツイマイ							1 21 13 08								A
32 *	トウガラシソママイ							1 06	01							A
33 アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ							5 22 31 13	11 19	0 3 15~16	23~25	04~05				A
34 ナンバンマイマイ科	シエリマイマイ							6 27 22 20	26 22	1 8 27	22	1 8				A
35 *	カブレンマイマイ							1 27 30 43								A
36 フネガイ科	エヌガイ			1/3/4	48	27	50	37	19	17 40~45	21~24	20~30	D - g	に付着		
37 *	リュウキウガムガイ	0/1/0/1		9/13	73	44	27.4	45	30	63 55~65	35~40	15~25	E - d			
38 ウゲイスガイ科	アコヤガイ							1								D~F10-gに付
39 *	タロチャウガイ							1								
40 イタヤガイ科	シナイタヤ			0/1	45	43	45	40								F10/30 - c
41 *	ヒオウギガイ			0/1	29	29	23									D~F10 - g
42 シジミガイ科	シレナシシミガイ			20/25	71	62	30.4	38	36	9.6	56	50	15			B
43 フキガイ科	ウラキツキガイ			0/1	25	24	21									E - d
44 シャコガイ科	ヒメシャコ	1/0			1/3	9.6	6.1	47.0								D~F5 - gh
45 テルガイ科	リュウキウガムガイ			1/3	47	5.2	17.9	27	27	1.6	31	32	29	E - d		
46 *	カツラガイ			2/2	52	5.8	26.1	33	3.5	7.6 3.8~4.4	35~4.5	8~17	E - d			
47 マルスダレガイ科	ショウセンハマグリ	1/0		6/9	57	4.9	25.9	53	47	15.2	56	48	15.2	I - d		
48 *	ハマグリ	1/0		3/2	41	5.5	31	27	2.8	33~34	28~29	25~35	C - d			
49 *	イオウハマグリ			3/6	23	21	1.6	20	17	0.9	22~23	19~21	1.0~15	D - a		
50 *	ホソスジイミガイ			0/1	33	24	2.4									E - d
51 *	アラスジママンガイ	3/3	0/1	3/3	42	3.4	12.1	18	1.7	1.0	28~35	23~28	25~6.0	E - d		
52 *	スダレハマグリ			2/1	45	3.5	2.7	30	2.6	2.3						E - d
53 *	オノカガミガイ			0/1	3.6	2.6	2.5									E - d
54 チゾリスオガイ科	イノハマグリ			1/3	27	2.1	23	26	2.1	1.8						D上部 - d
55 ナミコガイ科	リュウキウナミコガイ	1/0		0/1	17	1.3	0.4									D - 稚いd
56 リュウキウクスガイ科	ヌメオガイ	0/1			24	1.5	0.5									C - a
57 ニッコウガイ科	リュウキウシラトリガイ				1/1	32	2.3	1.5								E - e
総 片					3											
合 計		50	6	3	1	1,010		延 距	計				1,070			

個体数：二枚目は左盤／右盤で表示し、合計では、その多い方を最少個体数とした。

計測値：物長・幅高ともmm単位で表示した。

地 点 地：記号化して表示した。

地 点 地の記号

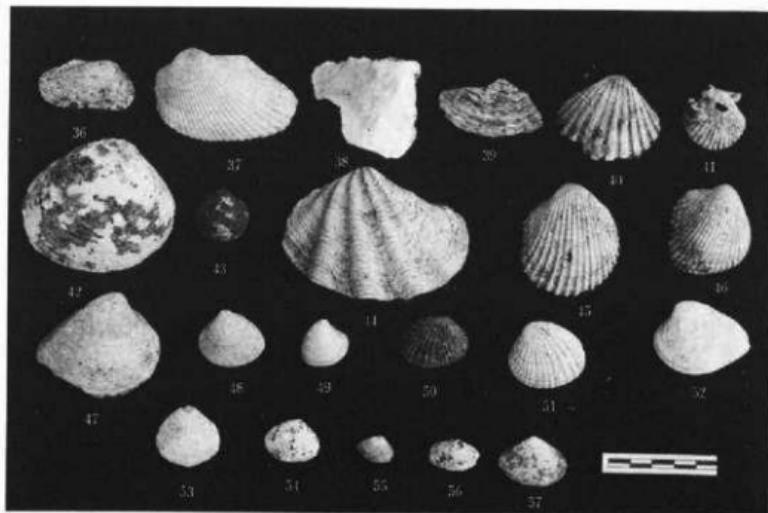
A 海 上	F 水 深 m	a 高 底	e 砂 地 底
B 汎水・河川	G 潮 間 高 下	b 砂 地 底	f 石 砂 地 底
C 内 海	H 磯 砂 地	c 细 砂 地 底	g 砂 地 底
D 山 間 峡	I 砂 地	d 砂 地 底	h 砂 地 底
E 河 流			

* 水深5m → F5

水深2m～水深20m → F2/20



図版40 貝類遺存体



図版41 貝類遺存体

2. 動物遺存体

(1) 魚類

本遺跡から、メジロザメ科・フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科等の魚骨が出土した。

出土した魚骨は非常に少なく、ほとんどIII区盛土からの出土である。

出土骨は科別にみると、ブダイ科の骨が多い。

表12 魚貝の出土状況

目・科・種名		部位	地区		I 区	III 区	最少推定尾数
サメ目	メジロザメ科		椎体	層位	1層	2層	
	齒				1 1	1	
スズキ目	フエフキダイ科	前上顎骨 R L				1 1	1
	ベラ科	下咽頭骨				1	1
	ブダイ科	前上顎骨 R 齒骨 R				4 1	4
	(ナンヨウブダイ)	上咽頭骨 L			1		1
		椎体		2	1	4	
目・属・科・種 不明		尾部棒状骨 下				1	
		針部				2	
		關節骨 R				1	
		部位不明 小片				8	

(2) 爬虫類

本遺跡出土の爬虫類は、カメ目のウミガメ科とリクガメ科で、いずれもIII区盛土から出土した。

ウミガメ科の中板骨は、厚味も同等で、同一個体の骨と思われる。

(3) 鳥類

トリの骨が2点出土した。1点は椎体で、1区の1層から出土しており、もう1点は脛骨でIII区の盛土から出土した。脛骨は、ワシかタカと思われるトリの右脛骨の遠位部であるが、破片のため種名の確認が困難である。

表13 爬虫類のカメ目の出土状況

科名	部位名	地区・層位	
		III区盛土	
ウミガメ科	中板骨 小片	10	
	部位不明 小片	1	
リクガメ科	指骨	1	
	背甲板 小片	2	

(4) 哺乳類

(i) 齧齒目

ネズミとマンガースの骨が出土した。いずれもIII区盛土からの出土である。

(ii) クジラ目

イルカの頭蓋骨細片が1点、III区盛土から出土した。

(iv) 海牛目

ジュゴンの骨が9点出土した。すべてIII区盛土から出土しており、同一個体の骨と思われる。

(v) 偶蹄目

イノシシ・ウシ・ヤギの骨が出土した。

イノシシの骨の出土量は、出土獸骨中最も多いので、「イノシシの骨 出土状況」(表14)を設けた。部位が明瞭な骨では、尺骨や上腕骨が多く、地区・層位別にみると、III区盛土から最も多く出土した。

表14 イノシシの骨出土状況

部 位	層 位 部位の左右	地 区		I 区		II 区		III 区			
		1 層		2 層		1 层		2 层		3 层	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
上 頭	I ¹			1							
	C (♀)									1	
	P ⁴			1							
	M ²									1	1
下 頭	切 齒 骨 細 根 部			1							
	I ₁						1			3	
	I ₂									2	
	C (♀)									1	
	C (♂)			1						2	
	M ₃										
	m ₃ < M ₁ >						1				
	< M ₂ >							1			
	< M ₃ >										
	齒 細 片										
頸 関 腱	齒 横 部 (M ₁ ~ M ₃)										
	連 合 部			1	1						
	下 頭 骨 片										
	下 関 腱 痕 無 起										
	下 関 腱 痕 無 起										
	下 頭 角 體										
	*										
頭 蓋	頭 頂 骨										1
椎 体	環 椎										
	椎 体									1	
	椎 体 · 椎 体 片									2	
肋 骨	棘 突										1
	破 片	1			1				8	10	
肩 甲 骨					1				1	1	3

部 位	I 区		II 区				III 区			
	1 层		2 层		1 层		2 层		3 层	
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
上腕骨	近位	部							2	1
	骨遠位	体部							3	
	近位	部						2	2	1
絶骨	近位	部							1	1
	骨遠位	部							1	3
	近位	部							5	4
尺骨	骨遠位	体部							1	1
	近位	部							1	
寛骨	骨遠位	部								1
大脛骨	近位	部	骨端	1						1
	骨遠位	体部	端						1	
	近位	部	骨端						1	
脛骨	骨遠位	体部	端					1	1	4
	近位	部	端						1	1
	骨遠位	体部	端						1	4
	近位	部	端					1		
	骨遠位	体部	端						1	
蹠骨	完骨	體	端						1	1
	骨遠位	端	端						1	
距骨	完骨	體	端							1
中手骨	第Ⅱか第V	完形		1						1
	第Ⅲ	近位	部	1					1	
中足骨	第Ⅱか第V	完形								1
	第Ⅲ	近位	部	1						
中手・中足骨	第Ⅱか第V	骨體								1
	第Ⅲ	遠位	部							2
指骨	中節	節	骨							2
	末節	節	骨							1
長骨	片	2	4				2			74
部位不明細片		5	9							26
最少推定頭数		1	1	1	1	2				5

III区盛土から、オス・メスの区別が確実なものや、若獣・幼獣が出土した。地区・層位別に最少推定出土頭数を算出すると、全体では11頭のイノシシが確認できる。

ウシの骨が、II区3層とIII区盛土から出土したが、出土量は少ない。
ヤギの骨はツノが1点だけ出土した。III区盛土からの出土で、ツノ以外の部位の骨は出土していない。

(b) 食肉目

イヌの骨が出土した。種別にみるとイノシシに次いで骨の出土数が多い。

骨はすべてIII区盛土から出土したもので、右上腕骨遠位部の骨が2点出土しており、若獣の骨も出土していることから、少なくとも3匹のイヌが確認できる。

(4) その他

ヒトの大腿骨片が2点、III区盛土から出土した。

目・科名が部位の確認できない細片が、III区盛土から出土している。骨の大きさから見て、ウシやイノシシ等の大きな動物ではないので、表の項目では「小動物」として扱った。

表15 哺乳類の骨出土状況

		地区		II区	III区	最少推定 頭数	
		層位		2層	盛土		
目・科・種名		部位名		R不明・L	R不明・L		
衛目	ネズミ科 マンガース	大腿骨 寛骨	骨體		1 1	1 1	
クジラ目	イルカ	頸蓋骨	細片		1	1	
海牛目	ジュゴン科	下頸骨 筋骨 上腕骨 長骨	關節突起 破片 骨體 片	1 6 2 1		2	
偶蹄目	リュウキュウイノシシ	別表	(表12)			11	
	ウシ	肩甲骨 大腿骨 長骨	骨體	1 1	1	1	
	ヤギ	ツノ			1	1	
食肉目	イヌ	下顎	C (犬齒) M (後臼齒)		1 1		
		上腕骨	骨體 ~(若) 遠位部	1	1 2		
		桡骨	近位部	1		3	
		尺骨	近位部	1			
		中手・中足骨	近位部	1			
		寛骨	骨體	1			
		大腿骨	近位部 ~骨端はずれ	1		1	
		ヒト	大腿骨 遠位部		2	1	
小動物		部位	不明	細片	4		



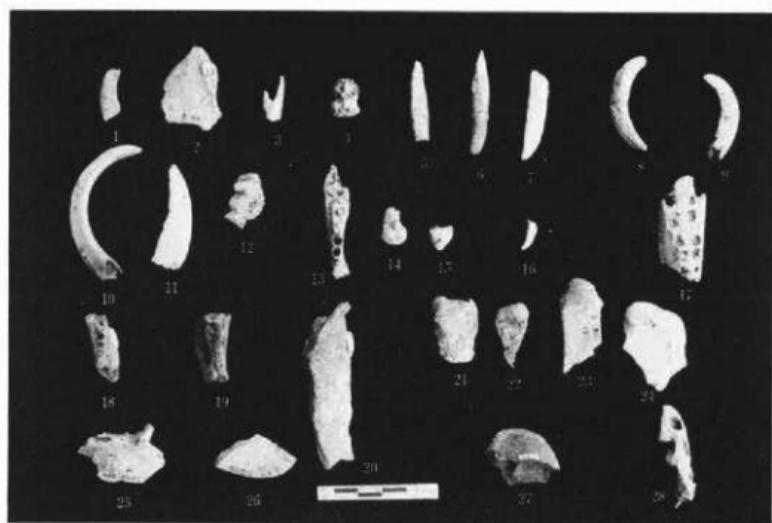
図版42 魚骨 1～3 サメ目 4・5 フエブキダイ科 6 ペラ科
7～9 ブダイ科 (9 ナンヨウブブダイ)



図版43 1・2 ウミガス 3・4 リクガメ 5・6 トリ



図版44 1 ネズミ 2 マングース 3 イルカ 4・5 ジュゴン



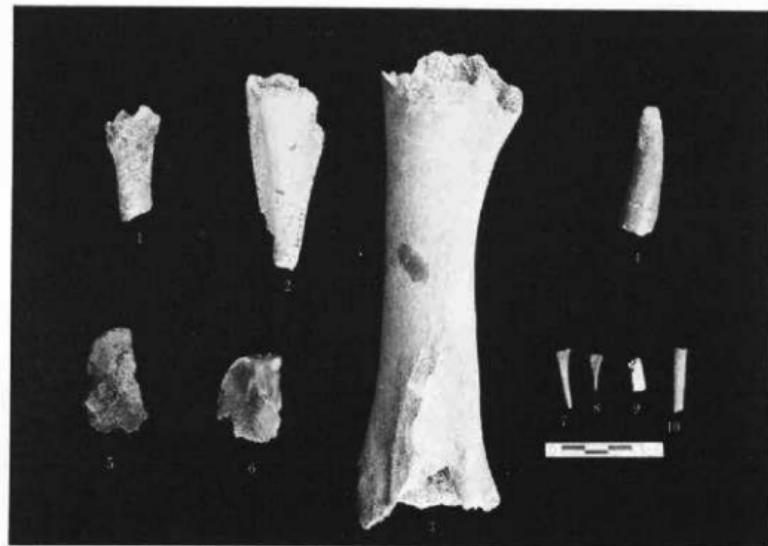
図版45 イノシシ 1~5 上顎 6~28 下顎



図版46 イノシシ 29・30 椎体 31 肋骨 32・33 肩甲骨 34～37 上腕骨
38～42 鎖骨 43～45 尺骨 46 宽骨



図版47 イノシシ 47・48 大腿骨 49～54 腰骨 55～57 跟骨
58 距骨 59～65 中手・中足骨 66・67 指骨



図版48 1~3 ウシ 4 ヤギ 5・6 ヒト 7~10 小動物



図版49 イヌ 1・2 下顎歯 3・4 上顎骨 5 桡骨 6 尺骨
7 中手(足)骨 8 審骨 9・10 大腿骨

第5節 古 墓

III区斜面のH-13、G-13、I-13に古墓が一基ある。

転落した石灰岩の岩陰を掘り込んで造ったもので、いわゆる「フィンチャー」(掘り込み式)と呼ばれる墓である。

全体が草木に覆われて、廃棄後かなりの時間の経過を思わせる状況であったが、保存状況は極めて良好であった。墓は狭い斜面に寄り添い平行状に西向きとなる。

北側の側面には、屋根の石灰岩を支えるように石積が見られる。しかし石積は切石等の加工は施されず、自然の石材をそのまま積み上げ、外側前面を揃えるという簡単な手法である。

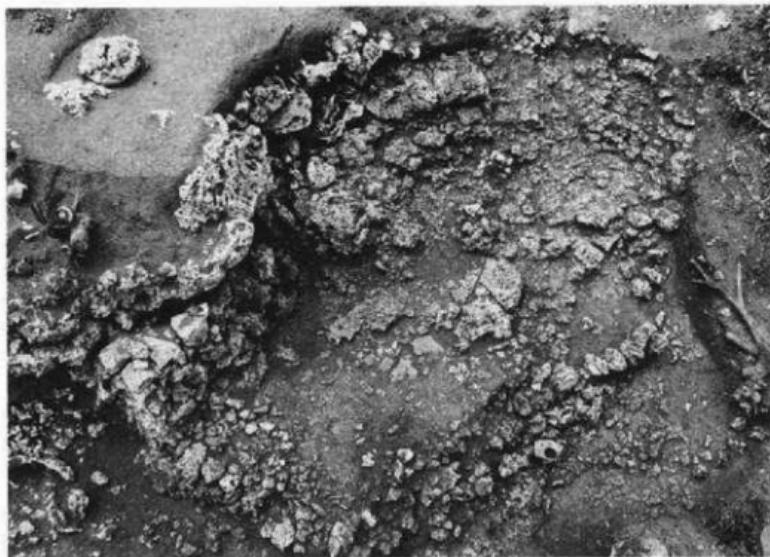
正面は比較的細長い角柱状の石材を縦に寝かせて、天井の石灰岩まで積み上げた。

右端に1個だけ潤滑のように縱に長い石があり、又その左最下段には、入口の踏石のような横石が確認できることから、本来の入口は内部の移転作業の際、壊されたものと考えられる。現在の石積は、移転終了後に簡単に積んだものではないだろうか。

墓内は奥行き1.4メートル、幅1.7メートルの規模を持つ。調査時墓中にはかなりの量の土砂が埋っていた。除去した土砂の下からは、陶器製の空きになった納骨器が1点だけ出土した。

北側面の石積をそのまま西へ延長し、そこへ斜面の土を壊して埋め、3角状の墓庭を造った。

墓は所有者不明で、造営の時期についても不明。



図版50 古墓の平面



图40 古墓平面图

— 65.50 —



— 65.50 —

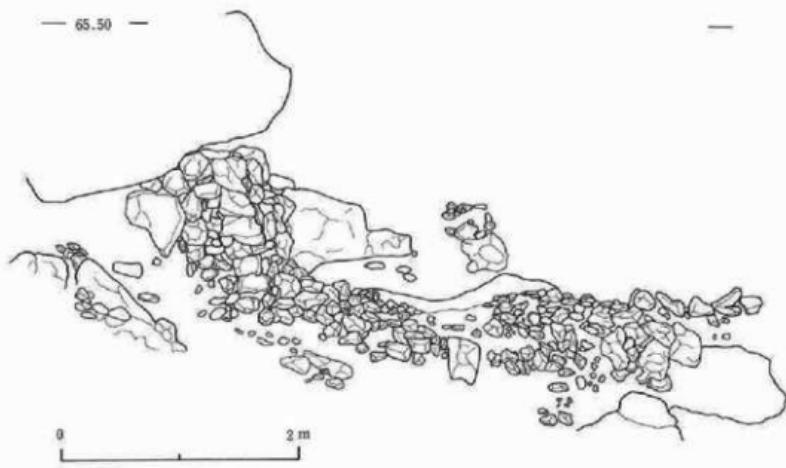


図41 古墓・正面図(上) 側面図(下)



圖版51 古墓正面



圖版52 古墓側面

第4章 まとめ

以上、発掘調査の内容について述べてきた。最後に若干の考察を加え、まとめとしたい。

本遺跡は南北に走る琉球石灰岩の丘陵（標高70～80m）の北端に形成され、沖縄では比較的内陸部に位置する。このような遺跡のあり方は石灰岩地域の一般的な特徴で、周辺には同様な立地条件を有する八重島貝塚や仲宗根貝塚、室川貝塚など同時期の遺跡が知られている。また、それらは比謝川の上流域に分布しており、下流域の嘉手納貝塚なども含めて比謝川水系のなかで遺跡相互間の関連性が捉えられると思われる。そのことについては、すでに高宮廣衛氏によって指摘されているとおりであるが、まだ具体的なことはわかつてない。詳細な比較研究は次の機会に委ねたい。

遺跡地一帯は、1960年頃から採石工事が行なわれ、ほとんど壊滅の状態にあると考えられたが、北端の斜面（II区）に一部包含層が残っており、投棄された土砂の中から比較的多くの遺物が採取できた。ただ、プライマリーな層から出土したものは極めて少なく、遺物の共伴関係や遺跡の性格を把握するまでにいたらなかった。ここでは1962年の調査成果をもとに比較検討を行ない、わずかでも遺跡の内容を捉えてみたい。

今回の調査区は1962年に調査されたD地点の北側40mに位置する。前回の調査ではAからDまでの4地点を対象としているが、すでに採石工事による破壊が進行し、A地点のみ比較的残りが良かったようである。各地点の状況についてみると、A地点は4枚の層からなり、うちII・III層が未擾乱の包含層である。土器は伊波・荻堂・大山・カヤウチパンタ・室川・室川上層・宇佐浜の7型式と奄美の土器が得られた。伊波・荻堂・大山式土器はIII層下部に集中しており、層位的な関係が把握できた。土器全体としては宇佐浜式が圧倒的で、前V期が主体となる遺跡と考えられる。B地点は遺物包含層の大部分はすでに取り除かれ、岩盤の上に僅かに残っている状態で、そこから伊波・荻堂土器のみが出土している。C・D地点も同様な状況で、伊波・荻堂のほとんど単純な包含層だけ残っており、遺跡の時期に上限を縄文後期に比定している。

さて、今回の調査で得られた遺物についてみると、貝・骨牙製品は6例と少なく、前回の調査においても出土していないことが他の同時遺跡と様相に異にしている。石器は石斧・扁平小型利器・たたき石と3器種のみであるが、量的には多く、なかでも石斧が圧倒的である。前回の資料と比較すると、I類とした小型石斧などが類似しており、扁平小型利器にいたっては同様なものがA地点から出土している。土器は伊波・荻堂・大山・カヤウチパンタ・室川・室川上層の6型式と奄美的面撻束口式・嘉徳I式が得られた。いずれも小破片であるが、型式の判別できたものでは荻堂式が主体をなし、次いで伊波式・大山式となっており、前IV期前半の土器がほとんどである。今回の遺物の出土状況や前回のA～D地点が完全に消滅していることから、これらの遺物は採石工事の際に崖下に包含層と共に投げ込まれたことがわかり、特にC・D地点のものである公算が大きい。II区において確認できたプライマリーな遺物包含層はD地点と

一連のものであると考えられるが、判然としない。

ところで、前回の調査報告によると、「……A地点の開始期については執筆者間に見解の相違はあるものの、他の地点が伊波・荻堂期に開始されたことは明らかであり、同じ時期の遺跡が數10mの距離をおいて同一丘陵上で営まれたことになる。このように類例遺跡が隣接しながら複数存することは前期（貝塚時代）では珍らしく、コミュニティー研究上重要な遺跡であったと思われる。……」と論じられている。そのことは同一集団による住み分けのことなのか、別集団による各地点の遺跡のあり方を示しているのか、これ以上の言及がなく判然としない。住居址等の遺構が確認されてなく、土器のみで論じられている点に無理があると思われ、逆に各地点の間に本来の遺跡の主体部があり、各地点の包含層はそこからの流れ込みの可能性もある。すなわち、前期の遺跡は複数で存したのではなく、單一の集落址であったことも考えられる。

遺跡が消滅した今では現地においてそのことを確かめる術はないが、出土した資料の詳細な比較研究によってある程度のことが捉えられると思われる。今回はそこまでチェックすることができず、次の機会に委ねたい。

注1. 多和田真淳・高宮廣衛・新田重清・嵩元政秀

「知花遺跡発掘調査概報」 「知花遺跡群」 沖縄県教育委員会 1978年3月

沖縄県文化財調査報告書第77集

知 花 遺 跡

—沖縄自動車道(石川ー那覇間)建設工事
に伴う緊急発掘調査報告書(1)—

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月31日

発行 沖縄県教育委員会
編集 沖縄県教育庁文化課
〒900 那覇市旭町1番地
沖配ビル6階
TEL 0988(66)-2731

印刷 文進印刷株式会社
TEL 0988(55)-2323
